

# ガリバー旅行記 GULLIVER'S TRAVELS

ジョナサン・スイフト

Jonathan Swift

原民喜訳

## 1 大騒動

私はいろいろ不思議な国を旅行して、さまざまの珍しいことを見てきた者です。名前はレミュエル・ガリバーと申します。

子供のときから、船に乗つて外国へ行つてみたいと思っていたので、航海術や、数学や、医学などを勉強しました。外国語の勉強も、私は大へん得意でした。

一六九九年の五月、私は『かもしか号』に乗つて、イギリスの港から出帆しました。船が東インドに向う頃から、海が荒れだし、船員たちは大そう弱っていました。

十一月五日のことです。ひどい霧の中を、船は進んでいました。その霧のために、大きな岩が、すぐ目の前に現れてくるまで、気がつかなかつたのです。

あつという間に、岩に衝突、船は真二つになりました。それでも、六人だけはボートに乗り移ることができました。私たちは、くたくたに疲れていたので、ボートを漕ぐ力もなくなり、たゞ海の上をたゞよつていました。と急に吹いて来た北風が、いきなり、ボートをひつくりかえしてしまいました。で、それきり、仲間の運命はどうなつたのか、わかりませんでした。

たゞ、私はひとり夢中で、泳ぎつづけました。何度もくたくた、試しに足を下げてみました。が、とても海底にはとどきません。嵐はようやく静まつてきましたが、私はもう泳ぐ力もなくなっていました。そして私の足は、今ひとりでに海底にとどきました。

ふと気がつくと、背が立つのです。このときほど、うれしかったことはありません。そこから一マイルばかり歩いて、私は岸にたどりつくことができました。

私が陸おかに上つたのは、かれこれ夜の八時頃でした。あたりには、家も人も見あたりません。いや、とにかく、ひどく疲れていたので、私は睡ねむいしばっかしでした。草の上に横

になつたかとおもうと、たちまち、何もかもわからなくなりました。ほんとに、このと  
きほどよく眠つたことは、生れてから今まで、一度もなかつたことです。

ほつと目がさめると、もう夜明けらしく、空が明るんでいました。さて起きようか  
な、と思い、身動きしようとする、どうしたとか、身体がさっぱり動きません。  
気がつくと、私の身体は、手も足も、細い紐で地面に、しっかりとつけてあるので  
す。髪の毛までくくりつけてあります。これでは、私はたゞ、仰向けになつているほか  
はありません。

日はだん／＼暑くなり、それが眼にギラ／＼します。まわりに、何かガヤ  
／＼という騒ぎが聞えてきましたが、しばらくすると、私の足の上を、何か生物が、  
ゴソ／＼這つてはいるようです。その生物は、私の胸の上を通つて、頸のところまでや  
つてきました。

私はそつと、下目を使ってそれを眺めると、なんと、それは人間なのです。身長六  
インチもない小人が、弓矢を手にして、私の頸のところに立つてゐるのです。そのあと  
につづいて、四十人あまりの小人が、今ぞろ／＼歩いて来ます。いや、驚いたの驚か  
なかつたの、私はいきなり、ワツと大声を立てたものです。

相手も、びっくり仰天、たちまち、逃げてしましました。あとで聞いてわかつたので  
すが、そのとき、私の脇腹から地面に飛びおりるひょうしに、四五人の怪我人も出  
たそうです。

しかし彼等はすぐ引つ返して来ました。一人が、何か鋭い声で訳のわからぬことを  
叫ぶと、他の連中が、それを繰り返します。私はどうも気味が悪いので、逃げよう  
と思い、もがいてみました。と、うまく左手の方の紐が切れたので、ついでに、ぐいと  
頭を持ち上げて、髪の毛をしばつてゐる紐も、少しゆるめました。これで、どうやら  
首が動くようになつたので、相手をつかまえてやろうとすると、小人はバタ／＼逃  
げ出してしまいます。

そのとき、大きな号令とともに、百幾本の矢が私の左手めがけて降りそいで来  
ました。それはまるで針で刺すようにチク／＼しました。そのうちに矢は顔に向つ  
て来るので、私は大急ぎで左手で顔をおよい、ウン／＼うなりました。逃げようと  
するたびに、矢の攻撃はひどくなり、中には、槍でもつて、私の脇腹を突きに来るも  
のあります。私はどう／＼、じつと、こらえていることにしました。そのうち夜にな  
れば、わけなく逃げられるだらうと考へたのです。

私がおとなしくなると、もう矢は飛んで来なくなりました。が、前とはよほど人数  
がふえたらしく、あたりは一段と騒がしくなりました。さきほどから、私の耳から二  
間ぐらゐ離れたところで、何かしきりに、物を打ち込んでいる音がしています。

そつと顔をそちら側へねじむけて見ると、そこには、高さ一フート半ばかりの舞台  
が出来上つてゐます。これは、小人なら四人ぐらい乗れそな舞台です。のぼるため  
に梯子まで、二つ三つかゝっています。今、その舞台の上に、大将らしい男が立つと、  
大演説をやりだしました。四人のお附きをしたがえた、その大将は、年は四十歳ぐ  
らいで、風采も堂々としています。といつても、その身長は、私の中指ぐらいでしよう。  
声を張りあげ、手を振りまわし、彼はなか／＼調子よくしゃべるのです。

私も左手を高く上げて、うや／＼しく、答えのしをしました。しかし、なに  
しろ私は、船にいたとき食べたりで、あれから、何一つ食べていません。ひもじさに、  
お腹がぐ／＼鳴りだしました。もう、どうにも我慢ができないので、私は口へ指  
をやつては、何か食べさせてください、という様子をしました。大将は私の意味がよ  
くわかつたとみえて、さつそく、命令して、私の横腹に、梯子を五六本かけさせまし  
た。

すると、百人あまりの小人が、それ／＼、肉を一ぱい入れた籠をさげて、その梯  
子をのぼり、私の口のところへやつて來るので。牛肉やら、羊肉やら、豚肉やら、  
なか／＼立派な御馳走でしたが、大きさは、雲雀の翼ほどもありません。一口に  
二つ三つは、すぐ平げることができます。それにパンも大へん小粒なので、一口に三つ  
ぐらいわけないので。あとから／＼運んでくれるのを、私がべろりと平げるので、  
一同はひどく驚いてゐるようでした。

私は水が欲しくなつたので、その手まねをしました。あんなに食べるのだから、水だ  
つて、ちよつとやそつとでは足りないだらうと、小人たちは一番大きな樽を私の上に  
吊し上げて、ポンと呑口をあけてくれました。一息に私は飲みほしてしまいました。  
なに、大樽といつたって、コップ一ぱい分ぐらいの水なのでから、なんでもあります  
。が、その水は、薄い葡萄酒に似て、なんともいゝ味のものでした。  
彼等はこんなことがよほどうれしかつたのでしよう。大喜びで、はしゃぎまわり、私  
の胸の上で踊りだしました。下からは私に向つて、その空樽を投げおろしてくれと手  
まねをします。私が左手で胸の上の樽を投げてやると、小人たちは一せいに拍手し  
ました。それにしても、私の身体の上を勝手に歩きまわつてゐる大胆さ。私の身体は

彼等から見れば、山ほどもあるのです。それを平気で歩きまわっているのです。

しばらくすると、皇帝陛下からの勅使が、十二人ばかりのお供をつれてやつてきました。私の右足の足首からぼつて、どん／＼顔のあたりまでやつて来ます。その書状をひろげたかとおもうと、私の眼の前に突きつけて、何やら読み上げました。それから、しきりに前方を指さしました。この意味は、あとになつてわかつたのですが、指さしている方向に、小人國の都があつたのです。そこへ、皇帝陛下が、私をつれて来るよう言いつけられたのだそうです。

私は、どうかこの紐を解いてくださいと、くらされていない片方の手で、いろ／＼と手まねをして見せました。すると勅使は、それはならぬというふうに、頭を左右に振りました。その代り、食物や飲物に不自由させぬから安心せよ、と彼は手まねで答えました。

勅使が帰つてゆくと、大勢の小人たちが、私のそばにやつて来て、顔と両手に、何かひどく香りのいゝ、油のようないのを塗つてくれました。と間もなく、あの矢の痛みはケロリとなおりました。

私は気分もよくなつたし、お腹も一ぱいだつたので、今度は睡くなりました。そして八時間ばかりも眠りつけました。これもあとで聞いてわかつたのですが、私が飲んだ、あのお酒には眠り薬がまぜてあつたのです。

最初、私が上陸して、草の上に何も知らないで眠つていたとき、小人たちは、私を発見すると、大急ぎで皇帝にお知らせしました。そこでさつそく、会議が開かれ、とにかく、私をしばりつけておくこと、食物と飲物を送つてやること、私を運搬するため、大きな機械を一つ用意すること、こんなことが会議で決まつたらしいのです。

八時間ばかりも眠りつけました。これもあとで聞いてわかつたのですが、私が飲んだ、あのお酒には眠り薬がまぜてあつたのです。

まず第一に、高さ一フートの柱を八十本立て、それから、私の身体をぐる／＼まきにしている紐の上に、丈夫な綱をかけました。そして、この綱を柱にしかけてある滑車で、えんさ／＼と引き上げるのです。九百人の男が力をそろえて、とにかく私を車台の上に吊し上げて結びつけてしまいました。すると、千五百頭の馬が、

その車を引いて、私を都の方へつれて行きました。もつとも、これは、みんなあとから人に聞いて知つた話なのです。

車が動きだしてから、四時間もした頃のことです。何か故障のため、車はしばらく停まつてしましたが、そのとき、二三の物好きな男たちが、私の寝顔はどんなものか、それを見るために、わざ／＼車によじのぼつて来ました。

はじめは、そつと顔のあたりまで近づいて來たのですが、一人の男が、手に持つていた槍の先を、私の鼻の孔にグイと突つ込んだのです。こよりで、つゝかれたようなもので、くすぐつたくてたまりません。思わず知らず、大きくしゃみと一しょに私は目がさめました。

日が暮れてから、車は休むことになりましたが、私の両側には、それ／＼五百人の番兵が、弓矢や炬火をかゝげて取り囲み、私がちよとでも身動きしようものなら、すぐ取り押えようとしていました。翌朝、日が上ると、車はまた進みだしました。そして正午頃、車は都の近くにやつて来ました。皇帝も、大臣も、みんな出迎えました。皇帝が私の身体の上にのぼつてみたがるのを、それは危険でござります、と言つて、大臣たちはとめっていました。

ちょうど、車が停まつたところに、この国で一番大きい神社がありました。こゝは前になつていました。この建物の中に、この私を入れることになつたのです。北に向いた門の高さが約四フート、幅は二フートぐらい、こゝから、私は入り込むことがでります。私の左足は、鋸前でとめられ、左側の窓のところに、鎖でつながれました。この神社の向側に見える塔の上から、皇帝は臣下と一しょに、この私を御見物になりました。なんでも、その日、私を見物するために、十万人以上の人出があつたということです。それに、番人がいても、梯子をつたつて、この私の身体にのぼつた連中が、一万人ぐらいはいました。が、これは間もなく禁止され、犯したものは死刑にされることになりました。

もう私が逃げ出せないことがわかつたので、職人たちが、私の身体にまきついている紐を切つてくれました。それで、はじめて私は立ち上つてみたのですが、いや、なんともいえない厭な気持でした。

ところで、私が立ち上つて歩きだしたのを、はじめて見る人々の驚きといつたら、これまた、大へんなものでした。足をつないでいる鎖は、約二ヤードばかりあつたので、半

円を描いて往復することができました。

立ち上つて、私はあたりを見まわしましたが、実に面白い景色でした。附近の土地は庭園がつづいているようで、垣をめぐらした畠は花壇を並べたようです。その畠のところどころに、森がまざっていますが、一番高い木でまず七フィートぐらいです。街は左手に見えていましたが、それはちょうど、芝居の町そつくりでした。

さきほどまで、塔の上から私を見物していた皇帝が、今、塔をおりて、こちらに馬を進めて来られました。が、これはもう少しで大ごとになるところでした。というのは、この馬はよく馴なれた馬でしたが、私を見て山が動きだしたように、びっくりしたものですから、たちまち後足で立ち上つたのです。しかし、皇帝は馬の達人だったので、鞍の上にぐつと落ち着いていられる、そこへ、家来が駆けつけて、手綱を押える、これでまず、無事におりることができました。

皇帝は、私を眺めまわし、しきりに感心されています。が、私の鎖のとくところへは近寄りません。それから、料理人たちに、食物を運べと言いつけられます。すると、みんなが、御馳走を盛つた、車のような容れものを押して来ては、私のそばにおいてくれます。

容れものごと手でつかんで、私はペロリと平げてしまします。肉が二十車、飲物が十車、どれもこれも平げてしまいました。

皇后と若い皇子皇女たちは、たくさんの女官に附き添われて、少し離れた椅子のところにいましたが、皇帝のさきほどの馬の騒ぎのとき、みんな席を立つて、皇帝のところに集つて来ました。ここで、皇帝の様子を、ちょっと述べてみましょう。

皇帝の身長は、宮廷の誰よりも、高かつたのです。ちょうど、私の爪の幅ほど高かつたようです。が、これだけでも、なかく立派に見えます。男らしい顔つきで、きりつとした口許、弓なりの鼻、頬はオリーブ色、動作はもの静かで、態度に威厳があります。年は二十八年と九ヶ月ということです。

頭には、宝石をちりばめた軽い黄金の兜をいたゞき、頂きに羽根飾りがついていますが、着物は大へん質素でした。手には、長さ三インチぐらいの剣を握つておられます。その柄と鞘は黄金で作られ、ダイヤモンドがちりばめています。

皇帝の声はキイ／＼声ですが、よく開きとれます。女官たちは、みんな綺麗な服を着ています。だから、みんなが並んで立つてゐるところは、まるで、金糸銀糸の刺繡の衣を地面にひろげたようでした。

皇帝は何度も私に話しかけられましたが、残念ながら、どうもお互に、言葉が通じません。一時間ばかりして、皇帝をはじめ一同は帰つて行きました。あとに残された私には、ちゃんと番人がついて、見張りしてくれます。つまり、これは私を見に押しかけて来るやじ馬のいたずらを防ぐためです。

やじ馬どもは、勝手に私の近くまで押しよせ、中には、私に矢を射ようとするものまでいました。一度など、その矢が、私の左の眼にあたるところでした。が、番人はさつく、そのやじ馬の中の、頭らしい六人の男をつかまえて、私に引き渡してくれました。番人の槍先で、私の近くまで、その六人が追い立てられて来ると、私は一度に六人を手でつかんでやりました。

五人は上衣のポケットにねじこみ、あとの一人には、そら、これから食つてやるぞ、というような顔つきをして見せました。すると、その男は私の指の中で、ワーン／＼泣きわめきます。

私が指を口にもつてゆくと、ほんとに食われるのではないかと、番人も見物人も、みんな、ハラ／＼していたようです。が、間もなく、私はやさしい顔つきに返り、その男をそつと地面に置いて、放してやりました。他の五人も、一人ずつ、ポケットから引っ張り出して、許してやりました。すると番人も見物人も、ほつとして、私のしたことに感謝している様子でした。

夜になると、見物人も帰るので、ようやく私は家の中にもぐりこみ、地べたで寝るのでした。二週間ばかりは、毎晩地べたで寝たものです。が、そのうちに皇帝が、私のためにベッドをこしらえてやれ、と言われました。普通の大きさのベッドが六百、車に積んで運ばれ、私の家の中で、それを組み立てました。

私の噂は国中にひろまつてしましました。お金持で、暇のある、物好きな連中が、毎日、雲のように押しかけて来ます。

そのために、村々はほとんど空っぽになり、畠の仕事も家の仕事も、すっかりお留守になりました。で、皇帝から命令が出ました。見物がすんだ人はさつさと帰れ、無断で私の家の五十ヤード以内に近よってはいけない、と、こんなことが決められました。

ところで、皇帝は何度も会議を開いて、一たい、これはどうしたらいいのかと、相談されたそうです。聞くところによると、朝廷でも、私の取り扱いには、だいぶ困っています。あんな男を自由の身にしてやるのも心配でしたが、なにしろ、私の食事がとても大へんなものでしたから、これでは國中が飢饉になるかもしれない、というのです。

「いつそのこと、何も食べさせないで、餓死させるか、それとも、毒矢で殺してしまう方がよかろう、と言うものもありました。」

だが、あの男に死なれると、山のような死体から発する臭がたまらない、その悪い臭は、國中に伝染病をひろげる事になるだろう、と説くものもありました。

ちょうど、この会議の最中に、私があの六人のやじ馬を許してやつたことが伝えられました。すると、皇帝も大臣も、私の行いに、すっかり感心してしまいました。

さっそく、皇帝は、勅命で、私のために、村々から毎朝牛六頭、羊四十頭、そのほかパン、葡萄酒などを供出するよう、命令されました。

それから、六百人のものが、私の御用係にされ、私の家の両側にテントを張つて寝とまりすることになりました。それから私の服を作ってくれるために、三百人の仕立屋が、やとされました。

それから、宮廷で一番えらい学者が六人、この國の言葉を私に教えてくれることになりました。私は三週間ぐらいで、小人國の言葉がしゃべれるようになりました。

皇帝もとき、「私のところへ訪ねて来られました。私は皇帝にひざまずいて、「どうか、私を自由な身にしてください。」

と何度もお願いしました。

すると皇帝は、「もうしばらく待て。」

と言われるのでした。

「自由な身にしてもらうには、お前はまず、この國と皇帝に誓いをしなければいけない。それから、お前はいざれ身体検査をされるが、それも悪く思わないでくれ。たぶん、お前は何か武器など持つていることだろうが、お前のその大きな身体で使う武器なら、よほど危険なものにちがいない。」

私は皇帝に申し上げました。

「どうか、いくらでも調べてください。なんなら、すぐお目の前で裸になつて御覧にも

いれましようし、ポケットを裏返してお目にかけますから。」

これは半分は言葉、半分は手まねでやつて見せました。すると皇帝は、

「では、二人の士官に命じて身体検査をやらせるが、これは臣下の生命をお前の手にゆだねるのだから、なにぶん、よろしく頼む。それから、たとえどんな品物を取り上げても、お前がこの國を去るときには、必ず返してやる。でなかつたら、いゝ値段で買い取つてやつてもいい。」

と言われました。

さて、二人の士官が身体検査にやつて来ると、私は二人をつまみあげて、まず上衣のポケットに入れてやり、それから、順次にほかのポケットに案内してやりました。が、どうしても、見せたくないものを入れていたポケットだけは、見せなかつたのです。

二人の男は、ペンとインクと紙を持って、見たものを、一つ／＼くわしく書きとめ、皇帝の御覽にいれるために、目録を作りました。私もあとになつて、その目録を見せてもらいましたが、それは、ざつと次の通りでした。

「まず、この大きな人間山の上衣の右ポケットをよく検査したところ、たゞ一枚の大きな布を発見しました。大きさは、宮中の大広間の敷物くらいあります。

次に左ポケットからは銀の蓋のついた大きな箱のようなものが出てきましたが、二人には持ち上げることができませんでした。私どもはそれを開けさせ、一人が中に入つてみますと、塵のようなものが一ぱいつまつっていました。その塵が私どもの顔のところまで舞い上ったときは、二人とも同時に何度もくしやみが出ました。

次に、チョツキの右ポケットから出てきたものは、人間三人分ぐらいの白い薄い物が、針金で幾枚も重ねて締めつけてあり、それには、いろんな形が黒くついていました。これはたぶん書物だらうと思います。一字の大きさは、私どもの手の半分ほどもあります。

ズボンのポケットからは、長さ人間ほどもある、鉄の筒がありました。これは何に使つかれました。

の方には一つの不思議な機械がついていました。私どもは、その鎖についているものを引き出してみよ、と言いました。これは半分は銀で、半分は透明なもので出来ています。彼はこの機械を、私どもの耳の傍へ持つて来ました。すると、水車のように絶えず音がしているのです。これは不思議な動物か、小さな神様らしく思えます。人間山の説明では、彼は何をするにも、いち／＼、この機械と相談するということです。

次に、彼は左の内ポケットから、漁夫の使うような網を取り出しました。これは財布だそうです。中には重い黄色い金属がいくつか入っていました。これがほんとの金だとすれば、大したものにちがいありません。

このようにして、私どもは陛下の命令どおり、熱心に彼の持ち物を調べてみました。が、最後に、彼の腰のまわりに、一つの帯があるのを見つけました。それは何か大きな動物の革でしらえたもので、その左の方からは、人間五人分の長さの剣が下つておりました。右の方からは、袋が下つておりました。

私どもは人間山の身体から発見したものを、このように、書きとめておきます。人間山は、陛下を尊敬して、礼儀正しく、私どもを待遇してくれました。」

この目録は皇帝の前で読みあげられました。

皇帝は、ていねいな言葉で、その目録に書いてある品物を、私に出せと言われました。まず短刀を出せと言わされたので、私は鞘ごとそれを取り出しました。このとき、皇帝は三千の兵士で私を遠くから取り囮み、いざといえば、弓矢で射るよう命じられていました。が、私の目は皇帝の方だけ見ていましたので、それには少しも気がつきませんでした。

「その短刀を抜いてみよ。」

と皇帝は言されました。刀は潮水で少し錆びてはいましたが、まだよく光ります。

スラリと抜き放つと、兵士どもは、あゞと叫んで、みんな驚き恐れました。振りかざしてみせたら、太陽の反射で、刀がピカ／＼光り、兵士はみんな目がくらんでしまつたのです。が、皇帝はそれほど驚かれませんでした。それをもう一度、鞘におさめて、鎖の端から六フィートほどの地上に、なるたけ静かに置け、と私に命令されました。

次に皇帝は、鉄の筒を見せよと言わされました。鉄の筒というのは、私のピストルのこ

とです。私はそれを取り出して、その使い方を説明しました。そのピストルに火薬を詰めて、

「今から使つて見せますが、どうか驚かないでください。」

と皇帝に注意しておいて、ドンと一発、空に向つて打ちました。

今度の驚きは、短刀どころの騒ぎではありません。何百人の人間が打ち殺されたように、ひっくりかえりました。皇帝はさすがに倒れなかつたものゝ、眼をパチ／＼されています。私は短刀と同じように、このピストルを引き渡しました。それから、火薬と弾丸の入つた革袋も渡しました。そして、

「この火薬は火花が一つ飛んでも、宮殿も何もかも吹き飛ばしてしまいますから、どうか火に近づけないでください。」

と注意しておきました。

それから、懷中時計を渡しました。皇帝はこの時計を非常に珍しがり、一番背の高い二人の兵士に、それを棒にかけて、かつがせました。絶えず時計がチクタク音を立てるのと、時計の長針が動いているのを見て、皇帝は大へん驚きました。この國の人たちは、私たちより目がいゝので、分針の動いているのまで見分けがつくのです。一たいこれは何だろう、と皇帝は学者たちにお尋ねになりましたが、学者たちの答えはまち／＼で、とんでもない見当違いもありました。

次に私は銀貨と銅貨を取り出し、それから櫛や嗅タバコ入れ、ハンカチ、旅行案内などを、みんな渡しました。短刀とピストルと革袋は荷車に積んで、皇帝の倉へ運ばれましたが、そのほかの品物は私に返してくれました。私は身体検査のとき、見せなかつたポケットがあります。その中には眼鏡が一つ、望遠鏡が一つ、そのほか一二三の品物が入つていました。これは失くされたり壊されると大へんだから、わざ／＼見せなくともよからうと思つたのです。

3 いろ／＼な曲芸

私の性質がおとなしいということが、みんなに知れわたり、皇帝も宮廷も軍隊も国民も、みんなが、私を信用してくれるようになりました。で、私は近いうちに自由の身にしてもらえるのだろう、と思うようになりました。私はできるだけ、みんなから良く思われるよう努めました。

人々はもう私を見ても、だん／＼怖がらなくなりました。私は寝ころんだまゝ、手の上で五六人の人間を踊らせたりしました。ときには、子供たちがやつて来て、私の髪の毛の間で、かくれんぼうをして遊ぶこともあります。もう私は彼等の言葉を聞いたり、話したりすることに馴れていました。

ある日、皇帝は、この国の見世物をやつて見せて、私を喜ばしてくれました。それは実際、素晴らしい見世物でした。なかでも面白かったのは、綱渡りです。これは地面から二フィート十二インチばかりに、細い白糸を張つて、その上でやります。

この曲芸は、宫廷の高い地位につきたいと望んでいる人たちが、出て演じるのでした。選手たちは子供のときから、この芸を仕込まれるのです。仮に、宫廷の高官が死んで、その椅子が一つ空いたとします。すると、五六人の候補者が、綱渡りをして皇帝に御覧にいれます。中で一番高く飛び上つて落ちない者が、その空いた椅子に腰かけさせてもらえるのです。

だが、この曲芸ではとき／＼、死人や怪我人を出すことがあります。私も選手が手足をくじいたのを二三回見ました。中でも、一番あぶないのは、大臣たちの曲芸です。それはお互に仲間の者に負けまいとして、あんまり気張つてやるので、よく綱から落つります。大蔵大臣のフリムナップでさえ、一度なんか、も少しで頭の骨を折るところでしたが、下に国王のクッショングがあつたので、助かつたということです。

それから、もう一つ、ほかの見世物があります。これは皇帝と皇后と総理大臣の前だけで、やらされる特別の余興なのです。皇帝はテーブルの上に、長さ六インチの細い絹糸を三本置きます。一つは青、一つは赤、もう一つは緑の糸です。皇帝は、特に取り立てゝ目をかけてやろうとする人たちに、この賞品をやるのです。

まず宫廷の大広間で、候補者たちは、皇帝からいろんな試験をされます。皇帝が手に一本の棒を構えていると、候補者たちが一人ずつ進んで来ます。棒の指図にしたがつて、人々は、その上を飛び越えたり、潜つたり、前へ行つたり後へ行つたり、そんなことを何度も繰り返すのです。

この芸を一番うまく熱心にやつた者に、優等賞として、青色の糸が授けられます。

二等賞は赤糸で、緑が三等賞です。もらつた糸は、みんな腰のまわりに巻いて飾ります。ですから、宫廷の大官は大がい、この帶をしています。

軍隊の馬も皇室の馬も、毎日、私の前を引きまわされたので、もう私を怖がらなくなり、平気で私の足許までやつて来るようになりました。私が地面に手を差し出すと、乗手が馬を躍らしてヒラリと飛び越えます。大きな馬に打ち乗つて、私の片足を靴ごと飛び越えるのをいます。これは実に見事なものでした。

ある日、私は非常に面白い余興をして見せて、皇帝にひどく喜ばれました。私は、皇帝に、長さ二フィート、太さ普通の杖ほどの棒を取り寄せていたゞきたい、と願い出ました。すると皇帝は、すぐ山林官に命じられたので、翌朝、六人の樵夫が六台の荷車を、それ／＼、八頭の馬に引かせてやつて来ました。

私は九本の棒を取つて、二フィート半の正方形ができるように、地面に打ち込みました。それから四本の棒を、二本ずつ平行に並べて、地面から二フィートばかりのところで、四隅を結びつけました。そして今度は、ハンカチを九本の棒にしばりつけ、これを太鼓の皮のように、ピンと張りました。すると横に渡した四本の棒は、ハンカチより五インチばかり高くなつたので、これはちようど、欄干の代りになりました。これだけ用意が出来たので、私は皇帝に申し上げました。

「騎兵の馬二十四騎を、この野原の上でひとつ走らせてお目にかけましょ。」

皇帝はこの申し出にすぐ賛成されました。

私は、武装した乗馬兵を馬と一しょに、人々をまみ上げて、ハンカチの上に置き、それから指揮官たちも、その上に乗せました。整列が終ると、彼等は敵味方に分れ、模擬戦をやりはじめました。矢を射かけるやら、剣を抜いて追つかけっこするやら、進んだり退いたり、こんな見事な訓練は、私もまだ見たことがありません。横棒が渡してあるので、馬も人も、舞台から落つこちる心配はありません。

皇帝は、これがすつかりお気に召したので、何日も／＼この余興をやつて見せようと仰せになります。一度などは、御自身でハンカチの上にお上りになつて、号令をおかけになりました。とう／＼終いには、厭がる皇后を無理にすかして、椅子のまゝ私に持ち上げさせました。私は訓練の有様がよく見えるように、舞台から一ヤードばかりのところに、皇后の椅子を持ち上げたのです。

幸いにも、この余興の間、故障は一つも出なかつたのです。もつとも、たゞ一度だけ、

こんなことがありました。ある隊長の乗つていたあばれ馬が、あがきまわって、蹄でハンカチに穴をあけ、足をすべらし、乗手もろとも転んだのです。すぐ私は助け起し、片手でその穴をふさぎ、片手で一人ずつ、兵隊をおろしました。転んだ馬は、左肩の筋をたがえましたが、乗手の方は無事でした。ハンカチの穴はよく繕いましたが、私は

私が自由の身にしてもらえる二三日前のことでした。宫廷の人たちを集めて、ハン

大ラの余興をしていくところへはれかは一人の僕が到着しました  
なんでも、数人の者が馬で、いつか私がつかまつた場所を通りかゝると、一つの大きな黒いものが落ちているのを見つけました。非常に奇妙な形のもので、縁が円くひろがっています。その広さは、陛下の寝室ぐらいあり、真中のところは、人の背ほど高

りを歩いてみましたが、草の上にじつとしたり動きかないのです。そこで、お互に肩を踏台にして、頂上にのぼつてみると、上は平べったくなっています。足で踏んでみると内側は空っぽだということがわかりました。そこで、みんなは、これはどうも人間山の物らしいと考えました。

一馬五頭あれはそれを運んでまいります

私はすぐ、はあ、そうか、とわかりました。そして、これはいゝ知らせを聞いたと喜びました。よく考えてみると、ボートを漕いでいるときに、私は紐で帽子をしつかり頭に結びつけていました。それから、泳いでいるときも、それは絶えず頭にかむつっていました。ところが、難船後はじめて陸にたどりついたときには、なにしろ私はひどく疲れていたので、何かの拍子に、紐が切れて落つこちたのも知らなかつたのです。帽子は海で失くしたものとばかり思つていました。

私は皇帝に、それは帽子というのだとどうことをよく説明して、どうかさうそれを取り寄せてください、とお願いしました。すると翌日、馬車引がそれをとど

綱で馬車にくくり、こんなふうにして一マイル半以上も引きずっと来たのです。たゞ、かりのところに、穴を二つあけ、これに鉤かぎが二つ引っかけてあります。その鉤を長い綱で馬車にくくり、こんなふうにして一マイル半以上も引きずっと来ました。帽子はかなり、ひどいことをされていました。縁から一インチ半ばかりのところに、穴を二つあけ、これに鉤が二つ引っかけてあります。その鉤を長い

それから二日たつと、皇帝は、首府の軍隊に出動を命じて、また途方もない遊び

を思いつかれました。私にはできるだけ、大股をひろげて、巨人像のよう立つていよと仰せられます。それから今度は、将軍(この人は何度も戦場に出た)ことある老将軍で、私の恩人(もあります)に命じて、あの股の下を軍隊に行進させてみよ、と仰せになるのでした。

歩兵が二十四列、騎兵が十六列に並び、太鼓を鳴らし、旗をひるがえし、槍を横たえ、歩兵三千、騎兵一千、見事に私の股の下を行進しました。

陛下は名兵士に向ひて行進中は利よく本備を守<sup>まつど</sup>ると背<sup>そ</sup>には死開<sup>し</sup>にござると申し渡されていました。しかし、それでも若い士官などが、私の股の下を通るとき、ちょっと眼をあげて上を見るのは仕方がありません。私のズボンは、もうひどく綻<sup>ほつ</sup>びていたので、下から見上げると、さぞ、びっくりしたことでしょう。

このボルゴラムという男は、この国の海軍提督で、皇帝からもあつく信任されており、海軍のことにかけては、なか／＼専門家なのですが、どうも気むずかし屋で、苦虫をつぶしたような顔をしています。

苦虫をつぶしたような顔をしています。

私は自由にするには、私にいろんなことを誓わせなければならないのですが、その条件は俺が書くのだ、と、あくまで押しとおしました。その誓約書を私のところへ持つて来たのも、このスカイリッシュ・ボルゴラムでした。一人の次官と数人の名士をつれてやつて来ましたが、誓約書を読みあげると、私に、いち／＼その実行を誓え、と言います。

まずははじめに私の国のやり方によつて誓い、次にこの国のやり方で誓わされたのですが、それは右の足先を左手で持ち、右手の中指を頭の上に、おやゆび拇指みゆみを右の耳みみ朵におくのでした。そのときの誓約書というのには、次のようなものです。

「」の宇宙の歓喜恐怖にもあたる、リリ・ペット国大皇帝、ゴルバストー・モマレン・エブレ

イム・ガーディロウ・シェフイン・ムリ・ギュー皇帝、領土は地球の端から端まで五千グラムにわたり、帝王中の帝王として、人の子より背が高く、足は地軸にとき、頭は天を突き、一度首を振れば草木もなびき、その徳は春、夏、秋、冬に通じる。こゝにこの大皇帝は、この頃、わが神聖なる領土に到着した人間山に対し、次の条項を示し、厳粛に誓わせ、その実行を求めるものである。

第一 人間山は朕の許可なしに、この国土を離ることはできない。

第二 人間山は朕が特に許した場合でなくては、勝手に首都に入ることはできない。首都に入るときは、市民は二時間前に、家の中に引っ込んでいるように注意されることになっている。

第三 人間山の歩いてもいゝ場所は主要国道だけに限られている。牧場や畠地を歩いたり、そこで寝ころんだりすることは許されない。

第四 人間山が主要国道を歩く際には、朕の良民、馬、車などを踏みつけないよう、よく注意すること。また良民の承知なしに矢鱈に人をつまみあげて掌に乗せることはできない。

第五 急用の使が要る際には、毎月一回、その伝令と馬を人間山のポケットに入れて運ぶこと。また場合によつては、さらにこれを宮廷に送り返さねばならない。

第六 人間山は朕の同盟者となり、ブレフスキュ島の敵を攻め、朕の国をねらう敵艦隊を打ち滅ぼすことに努力しなければならない。

第七 人間山は閑のときには、朕の労役者の手助をして、公園その他帝室用建物の外壁に大きな石を運搬するのを手伝わねばならぬ。

第八 人間山は二ヵ月以内に、海岸を一周して歩き、その距離をはかり、朕の領土の地図を作つて出すこと。

第九 これまで述べた条項をよく謹んで守るならば、人間山は毎日、朕の良民千七百二十四人分の食料と飲料を与えられ、自由に朕の近くに侍ることを許され、その他、いろいろ優遇されるであろう。

ベルファボラック皇宮にて

聖代第九十一月十二日」

私は大喜びで満足し、誓いのサインをしました。たゞ、この条項の中には、提督ボルゴラムが悪意で押しつけたものもあり、あまり有り難くないものもありましたが、それはどうも仕方のないことでした。

すぐに私の鎖は解かれました。私は全く自由の身になつたのです。この儀式には、皇帝もわざ／＼出席されました。私は陛下の足許にひれふして感謝しました。すると皇帝は私に、「立て」と仰せになり、それから、いろ／＼と有り難い言葉を賜りました。国家有用の人物となり、陛下の恩にそむかないようにしてもらいたいとうお言葉でした。

#### 4 宮殿見物

鎖を解かれたので、私は、この国の首府ミレンンドウを見物させていたゞけないでしょうか、と皇帝にお願いしました。皇帝はすぐ承知されました。たゞ、住民や家屋を傷つけないよう、注意せよ、と言われました。

私が首都を訪問することは、前もつて、市民に知らされていました。街を囲んでいる城壁は、高さ二フィート半、幅は少くとも十一インチありますから、その上を馬車で走つても安全です。城壁には十フィートおきに、丈夫な塔が築いてあります。

西の大門を、一またぎで越えると、私はそろつと横向きになつて、静かに歩きだしました。上衣の裾が、人家の屋根や軒にあたるといけないので、それは脱いで、手にかゝえ、チョッキ一つになつて、歩いて行きます。市民は危険だから外に出ていてはいけない、という命令は前から出していたのですが、それでも、まだ街中をうろ／＼している人もいます。踏みつぶしでもすると大へんですから、私はとても気をくばつて歩きました。

屋根の上からも、家々の窓からも、見物人の顔が一ぱいのぞいています。私もずいぶん旅行はしましたが、こんなに大勢、人の集つているところは見たことがありません。市街は正方形の形になつていて、城壁の四辺はそれ／＼五百フィートです。全市を四つに分けている、十文字の大通りの幅は五フィート。私は小路や横町には、入れないので、たゞ上から見て歩きました。街の人口は五十万。人家は四階建から六階建まであり、商店や市場には、なか／＼、いろんな品物があります。皇帝の宮殿は、街の中央の、二つの大通りが交叉するところにあります。高さ二

ファイートの壁で囲まれ、他の建物から、二十ファイート離れています。私は皇帝のお許しを得て、この壁をまたいで越えました。壁と宮殿との間には、広い場所がありますから、私はそこで、あたりをよく見まわすことができました。外苑は方四十ファイート、そのほかに二つの内苑があります。一番奥の庭に御座所があるのです。

私はそこへ行つてみたくてたまらなかつたのですが、どうもこれは無理でした。なにぶん、広場から広場へ通じる大門というのが、たつた十八インチの高さ、幅はわずかに七インチです。それに、外苑の建物というのは、みな高さ五ファイート以上で、壁は厚さ四インチもあり、丈夫な石で出来ていますが、それを私がまたいで行つたら、建物がこわれてしまいそうなのです。

ところが、皇帝の方ではしきりに、御殿の美しさを見せてやろう、と仰せになりました。その日は御殿を見るのは、あきらめて帰りましたが、ふと、私はいゝことを思つきました。

翌日、私は市街から百ヤードばかり離れたところの林に行つて、一番高そうな木を、五六本、小刀で切り倒しました。それで、高さ三ファイートの踏台を二つ、私が乗つても、グラつかないような、丈夫な踏台を作りました。

これが出来上ると、私はまた市街見物を皇帝にお願いしました。市民には、また家の中に引っ込んでいるよう、お達しが出ます。

そこで、私は二つの踏台をかゝえて、市街を通つて行きました。外苑のほとりに来ると、私は一つの踏台の上に立ち上り、もう一つの踏台は手に持ちました。そして、手の方の踏台を屋根越しに高く持ち上げ、第一の内苑と第二の内苑の間にあら、幅八ファイートの空地へ、そつとおろしました。

こんなふうにして、私は建物をまたいで、一方の踏台から、もう一方の踏台へ、乗り移つて行くことができました。乗り捨てた方の踏台は、棒の先につけた鉤で、釣り寄せて、拾い上げるのです。こういうことを繰り返して、私は一番奥の内庭まで来ました。そこで、私は横向きに寝ころんで、二三階の窓に、顔をあててみました。窓はわざと開け放しにされていましたが、その室内的立派なこと、どの部屋も、目がさめるばかりの美しさです。

皇后も皇子たちも、従者たちと一緒に、それ／＼、部屋に坐つておられます。皇后は、私を御覧になると、やさしく笑顔を向けられ、わざ／＼窓から、手を出しになります。私はその手をうや／＼しくいたゞいてキスしました。

私が自由な身になつてから、二週間ぐらいたつた頃のことでした。ある朝、宮内大臣のレルドレザルがひょっこり、一人の従者をつれて、私を訪ねて来ました。乗つて来た馬車は、遠くへ待たしておき、彼は、

「一時間ばかりお話をしたいのです。」

と私に面会を申し込みました。

私がしきりに皇帝へ嘆願書を出して、彼にはいろいろ世話をなつたのです。で、私はすぐ彼の申込みを承知しました。

「なんなら私は横になりますか。そうすれば、あなたの口は、この耳許にとどいて、お互に話しあいでしよう。」

「いや、それよりか、あなたの掌の上に乗せてください。その上で、私は話しますから。」

私が彼を掌に乗せてやると、彼はまず、私が釈放されたことのお祝いを述べました。

「あなたを自由の身にするについては、私もだいぶ骨折ったのです。だが、それも現在、宫廷にいろ／＼混みいつた事情があつたからこそ、うまくいったのです。」

と、彼は宫廷の事情を次のように話してくれました。

「今、わが国の状態は、外国人の眼には隆盛に見えるかもしだれませんが、内幕は大へんなのです。一つは、国内に激しい党派争いがあり、もう一つは、ある極めて強い外敵から、わが国はねらわれていて、この二つの大事件に悩まされているのです。

まず、国内の争いの方から説明しますが、この国では、こゝ七十カ月以上というものの、トラメクサン党とスラメクサン党という、二つの政党があつて、絶えず争つているのです。この党派の名前は、はいている靴の踵かかとの高さからつけられたもので、踵の高いか、低いかによつて区別されています。一般にわが国昔からしきたりでは、高い踵の方をいゝとしていました。

ところが、それなのに、皇帝陛下は、政府の方針として、低い踵の方ばかりを用いました。特に陛下の靴など、宫廷の誰の靴よりも一ドルル(ドルルは一インチの約十四分の一)だけ踵が低いのです。この二つの党派の争いは、大へん猛烈なもので、反対党の者とは、一しょに飲食もしなければ、話もしません。数ではトルメクサン、すなわち高党の方が多いのですが、実際の勢力は、われ／＼低党の方が握っています。

たゞ心配なのは、皇太子が、どうも高党の方に傾いていられるらしいのです。その証拠には、皇太子の靴は、一方の踵が他の一方の踵より高く、歩くたびにびつをひいていられるのです。

ところが、こんな党派争いの最中に、われ／＼はまた、ブレフスキュ島からの敵にねらわれ、脅かされているのです。ブレフスキュというのは、ちょうどこの国と同じぐらいの強国で、國の大きさからいつても、国力からいつても、ほとんど似たりよつたりなのです。

あなたのお話によると、なんでも、この世界には、まだいろ／＼國があつて、あなたと同じぐらいの大きな人間が住んでいるそうですが、わが國の学者は大いに疑つていて、やはり、あなたは月の世界か、星の世界から落ちて来られたものだらうと考えています。それというのも、あなたのような人間が百人もいれば、わが國の果実も家畜も、すぐ食いつくされてしまふではありますか。それに、この國六千月の歴史を調べてみても、リリ・バットとブレフスキュの二大国のほかに、國があるなどとは、本に書いてありません。

ところで、この二大国のことですが、この三十六カ月間というもの、実にしつゝ、実際にうるさく、戦争をつづけているのです。事の起りというのは、こうなのです。もともと、われ／＼が卵を食べるときには、その大きい方の端を割るのが、昔からのしきたりだつたのです。

ところが、今の皇帝の祖父君が子供の頃、卵を食べようとして、習慣どおりの割り方をしたところ、小指に怪我をされました。さあ、大へんだというので、ときの皇帝は、こんな勅令を出されました。『卵は小さい方の端を割つて食べよ。これにそむくものは、きびしく罰す。』と、このことは、きびしく国民に命令されました。だが、国民はこの命令をひどく厭がりました。歴史の伝えるところによると、このために、六回も内乱が起り、ある皇帝は、命を落されるし、ある皇帝は、退位されました。

ところが、この内乱というのは、いつでもブレフスキュ島の皇帝が、おだてゝやらせたのです。だから内乱が鎮まるとき、いつも謀反人はブレフスキュに逃げて行きました。とにかく、卵の小さい端を割るぐらゐなら、死んだ方がましだといって、死刑にされたものが一万一千人からいます。この争いについては、何百冊も書物が出ていますが、大きい端の方がいゝと書いた本は、國民に読むことを禁止されています。また、大きい端の方がいゝと考へる人は、官職につくこともできません。

ところで、ブレフスキュ島の皇帝は、こちらから逃げて行つた謀反人たちを非常に大げにして、よく待遇するし、おまけに、こちらの反対派も、こつそりこれを応援するので、二大国の間に三十六カ月にわたる戦争がはじましたのです。その間にわが国は、四十隻の大船と多数の小舟と、それから、三万人の海陸兵を失いました。が、敵の損害は、それ以上だらうといわれています。

しかし、今また敵は新しく、大艦隊をとゝのえ、こちらに向つて攻め入ろうとしています。それで、皇帝陛下は、あなたの勇気と力を非常に信頼しているので、このことを、あなたと相談してみてくれ、と言われ、私を差し向けられたのです。』

宮内大臣の話が終ると、私は彼にこう言いました。

「どうか陛下にそう伝えてください。私はどんな骨折でもいといません。しかし、私は外国人ですから、政党の争いのことには立ち入りたくありません。が、外敵に対してなら、陛下との國を守るために、命がけで戦いましょ。」

## 5 大手柄

ブレフスキュ帝国というのは、リリ・バットの北東にあたる島で、この国とはわずかに八百ヤードの海峡で隔つています。私はまだ一度もその島を見たことはなかつたのですが、こんどの話を聞いてからは、敵の船に見つけられるといけないので、そちら側の海岸へは、出て行かないよう努めました。戦争になつて以来、両国の人々は行き来してはいけないことになつており、船が港に出入りすることも皇帝の命令でとめられていたので、私のことは、敵側にはまだ知られていないはずです。

私は一つの計略を皇帝に申し上げました。

「なんでも斥候の報告では、敵の全艦隊は、順風を待つて出動しようとして、今、港に錨をおろしているそうですから、これを全部とつかまえて御覽にいれましょ。」

そこで、私は水夫たちに、海峡の深さを聞いてみました。彼等は何度もはかつてみたことがあるので、よく知つていましたが、それによると、満潮のときが真中の深さが七十グラムグラム、(これはヨーロッパの尺度で約六フィートにあたります)そのほかの場所なら、まず五十グラムグラムだということです。

私はちようど正面にブレフスキュ島が見える北東海岸に行きました。小山の陰に

腹這いになりながら、望遠鏡を取り出しても、敵の艦隊は約五十隻の軍艦と、多数の運送船が碇泊しているのです。

そこで、私は家に引っ返すと、リリパットの人民に、丈夫な綱と鉄の棒を、できるだけたくさん持つて来るよう言いました。綱はまず荷造り糸ぐらいの太さ、鉄棒はおよそ編物針ぐらいの長さでした。だから、これをもつと丈夫にするために、綱は三つをより合せて一つにしました。鉄棒も、やはり三本をより合せて一本にし、その端を鉤形に折りました。こうしてできた五十の鉤を、一つ／＼、五十本の綱に結びつけました。

それから、また海岸へ引っ返すと、満潮になる一時間ばかり前から、私は上衣と靴と靴下を脱いで、革チョッキのまゝ、ジャブ／＼水の中に入つて行きました。大急ぎで海の中を歩き、真中の深いところを三十ヤードばかり泳ぐと、あとは背が立ちました。三十分もたゝないうちに、もう私は敵の艦隊の前に現れたのです。

（略）

私の姿にびっくりした敵は、すっかりあわてゝ、われがちに海に飛び込んでは、岸の方へ泳いで行きます。その人数は、三万人をくだらなかつたでしょう。そこで、私は綱を取り出すと、軍艦の舳の穴に、一つ／＼鉤を引っかけ、全部の綱の端を一つに結び合せました。こうしているうちに、敵は、何千本という矢を、一せいに射かけできます。

矢は、私の両手や顔に降りそゝぎ、痛いのも痛いのですが、これでは全く、仕事のじやまになつて仕方がありません。一番、心配したのは目をやられることです。今つぶされはすまいかと、いら／＼しました。ところが、ふと、私はいゝことを思ついたので、やつと助かりました。私には、あの身体検査のとき見せないで、そつとポケットに隠しておいた、眼鏡があります。その眼鏡を取り出すと、しつかり鼻にかけました。これさえあれば、もう大丈夫、私は敵の矢など気にかけず、平気で仕事をつづけました。眼鏡のガラスにあたる矢もだいぶあります、これは、眼鏡をちょっとグラつかせるだけで、大したことはありません。

どの船にもみんな鉤をかけてしまうと、私は綱の結び目をつかんで、ぐいと引っ張りました。ところが、どうしたことか、船は一隻も動きません。見ると、船はみんな錨で、しつかりとめてあるのです。そこで、また、やつかいな、骨の折れる仕事がはじめました。鉤のかゝつたまゝの綱を、一たん手から放し、それから、小刀を取り出して、錨の綱をズン／＼切つてゆきました。このときも、顔や手に二百本以上の矢が

飛んで来ました。さて、私は鉤をかけた綱を手に取り上げると、今度はすぐ簡単に動き出しました。こうして、私は敵の軍艦五十隻を引っ張つて帰りました。

ブレフスキュの人たちは、私が何をしようとしているのか、見当がつかなかつたので、はじめのうちは、たゞ呆れているようでした。私が錨の綱を切るのを見て、船を流してしまったのか、それとも、互に衝突させるのかしら、と思つていましたが、いよいよ全艦隊が私の綱に引っ張られて、うまく動きだしたのに気づくと、にわかに泣き叫びだしました。彼等の嘆き悲しむ有様といつたら、まあ、なんといつていいのかわからぬほどでした。

さて、私は一休みするために、立ち停つて、手や顔に一ぱい刺さつてある矢を引き抜きました。前に小人からつけてもらつた、矢の妙薬を、その疵きずあとに塗り込みました。それから、眼鏡をはずして、潮が退くのをしばらく待ち、やがて荷物を引きながら、海峡の真中を渡り、無事に、リリパットの港へ帰り着いたのです。

海岸では、皇帝も廷臣も、みんなが、私の戻つて来るのを、今か／＼と待つていました。敵の艦隊が大きな半月形を作つて進んで来るのは、すぐ見えましたが、私の姿は、胸のところまで水につかつていて、見分けがつかなかつたのです。私が海峡の真中まで来ると、首だけしか水の上には出でていなかつたので、彼等はしきりに気をもんでいました。皇帝などは、もう私は溺おぼれて死んだのだろう、そして、あれは敵の艦隊がいま押し寄せて来るところだ、と思い込んでいました。けれども、そんな心配はすぐ無用になりました。歩いて行くうちに、だん／＼と海は浅くなり、やがて、人声の聞えるところまで近づいて來たので、私は、艦隊をくゝりつけている綱の端を高く持ち上げ、

「リリパット皇帝万歳！」

と叫びました。

皇帝は大喜びで私を迎えてくれました。すぐ、その場で、ナーダックの位を私にくれました。これはこの国で最高の位なのです。ところが、皇帝は、

「またそのうち、敵の艦隊の残りも全部持つて帰つてほしい。」

王様の野心というものは、かぎりのないもので、陛下は、ブレフスキュ帝国を、リリパットの属国にしてしまい、反対派をみな滅し、人民どもには、すべて卵の小さい方の端を割らせる、そして、自分は全世界のたゞ一人の王様になろう、というお考えだ

つたのです。しかし、私は、

「どうもそれは正しい」とではありません。それにきっと失敗します。」

「いろいろと、皇帝をいさぎました。そして、私は、

「自由で勇敢な国民を奴隸にしてしまうようなやり方なら、私はお手伝いできません。」

と、はつきりお断りしました。

そして、この問題が議会に出されたときも、政府の中で最も賢い人たちは、私と同じ考えでした。ところが、私があまりあけすけに、陛下に申し上げたので、それが、皇帝のお気にさわったらしいのです。陛下は議会で、私の考えを、それとなく非難されました。賢い人たちは、たゞ黙っていました。けれども、ひそかに私をねたんでいる人たちは、このときから、私にケチをつけました。そして、私を快く思っていない連中が、何かたくらみをはじめたようです。そのため、二ヵ月とたゞないうちに、私はもう少しで殺されるところでした。

さて、私が敵の艦隊を引っ張つて戻つてから、二週間ばかりすると、ブレフスキュ国から、和睦を求めて、使がやつて来ました。この講和は、わが皇帝側に非常に都合のよい条約で、結ばれました。使節は六人で、それに、約五百人の従者がしたがいました。彼等が都に入つて来るときの有様は、いかにも、君主の大切なお使いらしく、実に壯觀でした。

私も彼等使節のために、何かと宮中で面倒をみてやりました。条約の調印が終ると、彼等は私のところへも訪ねて来ました。私が彼等に好意を持つていたことは、それとなく彼等も聞いてわかつたのでしょう。彼等はまず、私の勇気とやさしさをほめ、それから、「われく」の皇帝も、かねてから噂であったことを聞いています。あなたの力業を、ひとつ実地に見せてもらいたいと言つています。どうかぜひ一度お出かけください。」

と、言うのでした。

私も、すぐ承知しました。しばらくの間、私は使節たちを、いろいろともてなしましたが、彼等もすっかり満足し、私に驚いたようです。そこで、私は彼等にこう言っておきました。

「あなた方がお国へ帰られたら、陛下によろしくお伝えください。陛下のほまれは、

世界中に知れわたっていますから、私もイギリスに帰る前に、ぜひ一度お目にかかりたいと存じます。」

そんなわけで、私はリリパット皇帝にお目にかかると、さうそくこんなお願ひをしました。

「そのうち私はブレフスキュ皇帝に会いに行きたいくつてているのですが、どうか行かせてくださいませ。」

皇帝は許してくれましたが、ひどく気の乗らない御様子でした。これはどうしたわけなのか、私にはその頃わからなかつたのですが、間もなく、ある人から、こんなことを聞かされました。

私が使節たちと仲よくするのを見て、

「あれはあゝして、いまにブレフスキュ国になるつもりです。」

と、皇帝に告げ口した者がいたのです。大蔵大臣のフリムナップと海軍提督のボルゴラムの二人がそれです。

こゝでちよつとことわつておきますが、私と使節たちとの面会は通訳つきで行われたのです。なにしろ両国の言葉はひどく違つてゐる所以でしたが、リリパットの方でも、ブレフスキュの方でも、自分の国の言葉こそ、一番、古くからあつて、美しく、立派な、力強い、言葉だと自慢しているのです。そして、お互に相手の国の言葉は、野蛮だと軽蔑しているのでした。

しかし、リリパットの皇帝は、敵の艦隊を捕虜にしたのですから、鼻づばしが強かつたわけです。使節団には、書類も談判も、みんなリリパット語を使わせました。もつとも、この両国は、絶えずお互に行つたり来たりしてゐるので、両方の国語で話ができる人もたくさんいます。世間を見たり、人情風俗を理解するために、貴族の青年や、お金持たちが、互に行き来していましたから、貴族でも、商人でも、人夫でも、海岸に住んでいる人々なら、大がい、両方の言葉を知つていました。

前に私が釈放してもらうとき、あの誓約書には、いろいろ情ない役目が決められていました。ところが、私は今この国の一一番高い位のナーダックになつたのですから、あんな仕事は私に似合いません。皇帝ももう、そんなことは一度もお命じにならなかつたのです。ところが、間もなく、陛下にたいして、大へんな働きをしなければならない事件が起つたのです。

ある真夜中のこと、私はすぐ門口で、数百人の人が大声で何か叫んでいるのを聞

きました。はつとして眼をさましたが、私も多少びっくりしました。外では、

バーラム  
バーラム

という言葉が絶えず聞えています。と思うと、群衆を押し分けながら、宮廷の人たちが私のところへやつて来ました。

「火事です。宮殿が火事です。早く来てください。」

聞けば、皇后の御殿で、一人の女官が本を読みながらうたうねしていると、いつのまにか火がついて、大ごとになつたというのです。

私はすぐ、はね起きました。私の通り路をあける、という命令は前もって出でました。月夜で路は明るかつたし、私は一人も人を踏みつけないで、宮殿まで来ました。見ると、宮殿の壁には、もう、いくつも梯子がかけられ、バケツが運ばれています。

でも、なにぶん、水は遠くから運ばれているらしいのです。人々はどん／＼バケツを私のところ持つて来ますが、バケツといつても、大きさは指袋ぐらいですから、これでは、ちよつと、あの火は消せそうもありません。私は上衣さえあれば、すぐ消してしまうのですが、急いだので、つい着てくるのを忘れたのです。着ているのは革チョッキだけでした。これでは、もう駄目かなあ、あゝ、あの立派な御殿が、みす／＼焼ける、と私は悲観しかけていました。

ところが、ふとこのとき、私には、素晴らしい考えが浮んできました。その晩、私はグリミグリムという、非常においしい、お酒をたんと飲んでいました。火事騒ぎで、動きまわつてると、身体はカツカとほつて、お酒のきめがあらわれてきました。私は今にも、おしつこが出そうになつたのです。そこで、私は思いきつて、火の上に、おしつこを振りかけてゆきました。三分間もしないうちに火事はすっかり消えてしましました。これでまず、綺麗な宮殿は、丸焼けにならないで助かつたのです。

火事が消えたとき、もう夜は明けていました。私は皇帝に、よろこびの挨拶も申し上げないで、家に戻りました。私は消防夫として、非常な手柄をたてたのですが、しかし、皇帝が私のやり方をどう思われるか、心配でたまらなかつたのです。この国の法律では、たとえどんな場合でも、宮城の中で、立小便をするような者は、死刑にされることになつていました。

しかし私はその後、皇帝から、特別に罪を許すよう取りはからつてやる、と、お手紙をいたしましたので、これで少し安心していました。けれども、それもやはり駄目でした。皇后は私のしたことを、大へん御立腹になりました。

「今にきつと思ひしらせてやる。」

と、おそばの者に言われたそうです。そして、もとの建物はもう厭だから、修繕させないことにされて、宮中の一番遠い端へ引っ越されました。

さて、私はここで、リリパット国の風俗を少し説明しておきたいと思います。

この国の住民の身長は、平均して、まず六インチ以下ですが、その他の動物の大きさも、これと、正比例して出来ています。まず一番大きい牛や馬でも、せい／＼四インチか五インチぐらい、羊なら一インチ半ぐらい、鶯鳥なんか、ほとんど雀ぐらいの大きさです。だん／＼こんなふうに小さくなつてゆきますが、一番小さな動物など、私の眼では、ほとんど見えません。

ところが、リリパット人の眼には、非常に小さなものでも、ちゃんと見えるのです。彼等の眼は、こまかいものなら、よく見えますが、あまり遠いところは見えません。

雲雀は普通の蠅ほどもない大きさですが、リリパットの料理人は、ちゃんと、その毛をむることができます。それから私が感心したのは、若い娘が、見えない針に、見えない糸を通しているのです。この国で一番高い木は七フィートぐらいで、その木は国立公園の中になりますが、私が握りこぶしを固めても、すぐ、てっぺんにとづきます。

ところで、この国では、学問も古くから非常に発達していますが、たゞ、文字の書き方が、実に風変りなのです。ヨーロッパ人のように、左から右へ書くのではなく、アラビア人のように、右から左へ書くのでもなく、中国人のように、上から下へ書くのでもなく、かといって、下から上へ書くのでもありません。リリパット人は、紙の隅から隅へ、斜めに字を書いてゆくのです。

リリパットでは、人が死ぬと、頭の方を下にして、逆さまに土に埋めます。死人は、一万一千月たつと生き返る、そのとき、世界はひっくりかえつて、逆さまにしておけば、ちゃんと立てる、と彼等は考えているのです。もつとも、そんな馬鹿なことはないと、学者たちは笑っています。

この国では、盗みよりも詐欺の方が悪いことになつていています。詐欺をすれば死刑で

す。盜みは、こちらが馬鹿でなく用心さえしていれば、まず、物を盗まれるということはありません。ところが、こちらが正直のために、不正直なものに、騙<sup>だま</sup>されるのは、

これはどうも防ぎようがない、だから、詐欺が一番いけないのだ、と、リリバットの人たちは考えています。それから、忘恩も死刑にされます。恩に仇をもつてむくいるというようなことをする人は、生きる資格がないとされています。

人を官職にえらぶ場合、この国では、才能より徳義の方を重く見ます。政治といふものは、誰にも必要なのだから、普通の才能があればいとされています。けれども、徳義のない人は、いくら才能があつても、危険だから、そんな人に政治はまかせられないというのです。

私はこのリリバット国に九ヶ月と十三日間滞在していたのですが、ここで、ひとつ私がその間どんなふうにして暮したか、それをお話ししてみましょう。

私は生れつき、手先は器用でしたが、どうしてもテーブルが一つ欲しかったので、帝室庭園の一番大きな木を何本か切つて、手頃なテーブルと椅子をこしらえました。それから、二百人の裁縫師が、私のために、シャツとシーツとテーブル掛を作つてくれました。それにはできるだけ丈夫な布を使つてくれたのですが、それでも、一番厚いのが紗よりまだ薄いのです。だから、何枚も重ねて縫い合わせねばなりませんでした。

女裁縫師たちは、私を寝ころばしておいて、寸法をはかりました。一人が私の首のところに立ち、もう一人は、私の足のところに立ち、そして丈夫な綱を両方から、二人が持つてピンと張ります。すると、さらにもう一人の裁縫師が、一インチざしの物さしで、この綱の長さをはかつてゆくのです。私は自分の古シャツを地面にひろげて見せてやつたので、シャツはピッタリ私の身体に合うのが出来上りました。

私の服をこしらえるには、また三百人の洋服屋が、つききりでやつてくれました。

今度もその寸法の取り方が、また振つてきました。私がひざまずいていると、地面から首のところへ梯子をかけ、一人がこの梯子にのぼつて、私の襟首<sup>えりくび</sup>から地面まで、錘<sup>おもり</sup>のついた綱をおろす、それがちょうど、上衣の丈になるのでした。腕と腰の寸法は、妙な服でした。

食事は、私のために、三百人の料理人がついていました。彼等はそれ／＼、私の近所に小さな家を建てゝもらつて、家族もろとも、そこで暮していました。そして、

一人が一皿ずつ、こしらえてくれることになつていました。

私はまず、二十人の給仕人をつまみ上げて、テーブルの上に乗せてやります。すると、下には百人の給仕が控えていて、肉の皿や葡萄酒や樽詰などを、それ／＼肩にかついで待っています。私が欲しいという品を、上にいる給仕人がテーブルから綱をおろして、うまく引き上げてくれるのです。肉の皿は一皿が一口になり、酒一樽が私にはまず一息に飲めます。この羊の肉はあまり上等でないが、牛肉はなか／＼おいしかったのです。三口ぐらゐの大きさの肉はめつたにありません。

召使たちは、私が骨もろともボリ／＼食べてしまうのを見て、ひどく驚いていました。それから、鶯鳥や七面鳥も、大がい一口で食べられます。これはイギリスのよりずつといふ味です。小鳥なんかは、一度に二十羽や三十羽は、ナイフの先ですくいあげて食べるのでした。

ある日、皇帝は私の食事振りを聞かれて、では自分も皇后、皇子、皇女たちと一緒に、私と会食がしてみたいと望まれました。そこで彼等が来ると、私はみんなテーブルの上の椅子に乗せて、ちょうど私と向き合うように坐らせました。そのままには、見張りの兵もついていました。

大蔵大臣のフリムナップもこの席に一しょに来ていましたが、どういうものか、彼はとき／＼、私の方を見ては、苦い顔をします。しかし私は、そんなことは気にしないで、ひとつみんなを驚かしてやれと思って、思いきりたくさん食べてやりました。これはあとで気づいたのですが、大蔵大臣は、かねてから私に反感を持っていたので、この会食のあとで陛下に言つたらしいのです。

「あんなものを陛下が養つておられては、お金がかゝつて大へんです。できるだけ早く、いゝ折を見て、追放なさつた方が、国家の利益でございましょう。」

と、こんなことを言つたものとみえます。

私はこの国を去るようになつたのですが、それを述べる前に、まず、二ヶ月前から、私をねらっていた陰謀のことを語ります。

私がちようどブレフスキュ皇帝を訪ねよう、準備しているときのことでした。ある晩、宫廷の、ある大官がやつて来ました。(この大官が、以前、皇帝の機嫌を損じた

とき、私は彼のために大いに骨折つてやつたことがあるのです）彼は車で、こつそり、私の家を訪ねて來たのです。

ぜひ、内証でお話ししたいことがあると言うので、従者たちは遠ざけました。私は彼を乗せた車をポケットに入れ、召使に命じて戸口をしつかり閉めさせました。それから、テーブルの上に車を置いて、その側に坐りました。一通り挨拶をすませてから、相手の顔を見ると、非常に心配そうな顔色をしているのです。

「一たいどうしたのです。何か変つたことでもあるのですか。」

と私は尋ねました。

「いや、なにしろ、あなたの名譽と生命にかゝわる問題ですから、これはどうか、ゆつくり聞いてください。」

と言つて、彼は次のように話しました。

「まずお知らせしたいのは、あなたのことで、近頃、秘密の会議が数回ひらかれましたが、陛下が、いよ／＼決心されたのは、つい二日前のことです。」

御存知のとおり、ボルゴラム提督は、あなたがこの国に到着以来、あなたをひどく憎んでいます。どうしてそんなに怨むのかは、私にはよくわからないのですが、あなたが、ブレフスキュで大手柄をたてられて以来、彼の提督としての人気が減つたようを考え、それからいよいよ／＼憎みだしたのでしよう。この人と大蔵大臣のフリムナップ、それからまだあります、陸軍大将リムトック、侍従長ラルコン、高等法院長バルマツフ、これらの人々が一しょになつて、あなたを罪人にしようとして、弾劾文を書きました。

ここまで彼の話を聞いていると、私はむしやくしやしてきたので、

「何だつて、みんなは私を罪人にしようとするのか、私はそんなに……」

と言いかけました。

「まあ、黙つて聞いていてください。」

と、彼は私を黙らせました。

「私はいつかあなたの御恩になつたので、こんなことを打ち明けるのですが、もしかすると、そのために私まで罪になるかわかりません。が、それも覚悟でお知らせするのです。こゝに、その弾劾文の写しを手に入れていますから、今それを読みあげてみましよう。」

## 人間山に対する弾劾文

### 第一条

カリ・デファード・ブリューン陛下の御代に作られた法律によると、宮城の中で立小便をした者は、死刑にされることになつてゐる。それなのに、人間山は皇后の御殿が火事のとき、火を消すことを口実にして、不埒千万にも、小水で宮殿の火を消しとめた。

### 第二条

人間山はブレフスキュ国の艦隊を引つ張つて持つて戻つたが、その後、陛下は残りの敵も全部捕えて來いと命令された。陛下はブレフスキュ国を征服して属国にしてしまふ、お考えだつた。すると人間山は不忠にも、陛下のお考えに反対し、その命令に従わなかつた。罪のない人民の自由や生命は奪えません、と、こんなことを言うのであつた。

### 第三条

ブレフスキュ国から講和の使節がやつて來たとき、その使節は敵国の皇帝の使であることを知つていながら、人間山は、まるで叛逆者のように、これを助けたり慰めたりした。

### 第四条

人間山は近頃、ブレフスキュ国へ渡ろうとして航海の準備をしている。陛下はたゞ、口先で、ちよと許可されただけなのだ。それをいゝことにして、彼は敵国の皇帝と会い、敵国を助けようと企んでいる。

このほかにもまだあるのですが、主なところを今読みあげてみたのです。

ところで、あなたの罪状について、この弾劾文をめぐつて、何度も議論が行われたのですが、陛下は、あなたがこれまで立派な手柄をたてゝいられるので、まあ、大目にみて罪は軽くしてやれ、と言われるのです。しかし、大蔵大臣と提督の二人は、夜中にあなたの家に火をつけて、焼き殺してしまつた方がいゝ、と、ひどいことを言うのです。それから、陸軍大将は、そのときには毒矢を持った二万の兵をひきいて、あなたの手や顔を攻撃する、と、こんなことを言つのです。

それからまた、あなたの味方の宮内大臣レルドレザルは、こんなことを言います。殺すのは、どうもひどすぎるから、たゞ、あなたの両方の眼をつぶすことにしたらどう

でしようか、と、こんなことを陛下に申し上げたのです。すると、これには議員たちがみな反対しました。

君は叛逆者の生命を助けようとするのか、と、ボルゴラムはどなりました。皇后の御座所の火事を立小便で消すことのできるような男なら、いつ大水を起して宮城を水浸しにしてしまうかもわからない、それに、敵艦隊を引っ張つて来たあの力では、一たん何か腹を立てゝ暴れだしたら大へんなことになる、と、ボルゴラムは死刑を説くのです。

大蔵大臣も、あんな男を養つては、間もなく国が貧乏になつてしまふと言つて、死刑を主張しました。しかし、陛下はどうでも、あなたを死刑にはしたくないお考えでした。

両方の眼をつぶしただけでは、刑が軽すぎるというのなら、食物を減して、だん／＼やせ衰えさせるといゝでしょう、身体が半分以上も小さくなつて死ねば、死骸から出る臭だつて、どう恐ろしくはないし、骸骨だけは記念物として残しておけます、と、宮内大臣は言いました。

そんなわけで、とにかく、みんなの意見はまとまりましたが、この、あなたを餓死さす、計画は、ごく／＼秘密にされているのです。

あと三日すると、あなたの味方の大臣がこゝへ訪ねて来るでしょう。そして、弾劾文を読んで聞かせ、それから、陛下のおかげで、あなたの罪は両眼を失くするだけですむことになつた、と告げることになります。陛下は、あなたがよろこんで、この刑に服すだらうと思つていられます。そこで外科医二十名が立会のうえで、あなたを地面に寝かせ、あなたの眼球に、鋭く尖つた矢を、何本も射込む手筈になつています。

私はたゞ、ありのまゝを、あなたにお知らせしたのですが、どうか、そのつもりでいてください。あまり長居をしていると、人から疑われますから、これで失礼いたします。」

そう言つて、大官は帰つてゆきました。あとに残された私は、どうしたらいいのかしらと、いろいろ悩みました。

とう／＼私は逃げ出すことに決心しました。三日が来ないうちに、私は宮内大臣に手紙を送り、明日の朝ブレフスキュ島へ出発するつもりだ、と言つてやりました。もう返事など待つてはいられません。そのまゝ海岸の方へ歩いて行きました。

そこで大きな軍艦を一隻つかまえ、綱を結びつけ、錨を上げると、裸になつて、着物は軍艦に積み込みました。それから、その船を引っ張つて、歩いたり泳いだりしながら、ブレフスキュの港に着きました。

向うでは私の来るのを待ちかねていたところです。二人の案内者をつけて、首都まで案内してくれました。私は二人を両手に乗せて、城の近くまで行きましたが、こゝで、誰か大臣に知らせてきてくれ、と頼みました。

しばらく待つていると、皇帝御自身が私を出迎えになるということでした。私は百ヤードばかり歩いて行きました。皇帝とその従者たちは、馬からおりられました。皇后は馬車からおりられました。みんな、少しも私を怖がつてゐる様子はありません。私は地面に横になつて、陛下の手にキスしました。それから、いつかの約束どおり、リパツト皇帝の許しを得て、今このとおりブレフスキュ大帝にお目にかかりに来ました、私の力でできることなら何でもいたします、と、私はこう申し上げました。

私がブレフスキュ島へ来てから三日目のことでした。

島の北東の岸をぶら／＼歩いて行つてみると、沖の方にボートのような物のひつくりかえつてゐるのが見えます。さつそく、靴を脱いで、二三百ヤード海の中を歩いて行つてみると、その物は潮に乗つて、だん／＼近づいて来るよう見えます。よく見ると、ほんとのボートです。たぶん、これは嵐にあつて本船から流されたのでしよう。

私はすぐ首府へ引っ返して、皇帝にお願いして、二十隻の軍艦と三千人の水兵を借りてきました。それから私は海に入つて、ボートのこゝろへ泳いで行きました。水兵たちが軍艦から綱の端を投げてくれたので、それをボートの穴に結びつけ、もう一方の端は、軍艦に結びつけました。さらに私は泳ぎながらいろいろ／＼骨を折つて、九隻の軍艦にボートの綱を結びつけました。ちょうど風向きもよかつたので、私はボートを押し、水兵は引っ張り、こうして、どう／＼海岸に来ました。

それから十日ばかりかゝつて、オールをこしらえ、それでやつと、ブレフスキュの港へ、ボートを漕いで入つたわけです。私が港へ着くと、大へんな人出で、なにしろ、あんまり大きな船なので、すつかり仰天していました。私は皇帝に向い、「天の祐（ゆけ）で、ボートが手に入りました。これに乗つて行けば、私の故国へ帰れるところまで行けるでしょう。つきましては、出発の許可をいたゞいて、いろ／＼準備する」とをお許しください。」

とお願いしました。

皇帝は思いとどまつてはどうかと言われましたが、ついに喜んで許してくださいました。

さて、リリパツト国では、私がブレフスキュ国皇帝のところへ行つたのは、それはただ、

前の約束をはたすために行つたので、一二三日すれば帰つて来るだろう、と思つていました。ところが、いつまでたつても、私が戻らないので、とう／＼やきもきして、大臣一同が会議を開きました。その相談のあぐく、一人の使者が、リリパツト皇帝の手紙を持って、ブレフスキュ皇帝に会いにやつてきました。その手紙は、私の手足をしづつ、リリパツトへ送り返してくれというでした。

その返事はこうでした。私をしばつて送り返すことなど、とてもできないことは、すでにリリパツト皇帝も知られるおりだし、それに間もなく、私はブレフスキュ国を去ることになっているので、御安心ください、というでした。

とにかく、私はなるべく早く出発しようと思ひました。宫廷の方でも一日も早く行つてもらいたいのでいろいろ／＼手助けをしてくれます。五百人の職人がかゝつて、ボートにつける一枚の帆を／＼しらえました。私の指図にしたがい、一番丈夫な布を、十三枚重ねて縫い合わせました。私は一番丈夫な太い綱を、十本、二十本、三十本と、一生懸命に、ない合わせました。それから海岸を探しまわつて、錨の代りになりました。大きな石を見つけました。ボートに塗つたり、そのほかいろんなことに使つたため、三百頭の牛の脂をもらいました。何より骨の折れたのは、オールとマストにするため、大きな木を伐り倒すことでした。しかし、これは陛下の船大工が手伝つてくれて、私がたゞ粗けりすれば、あとは大工が綺麗に仕上げてくれました。

一月もすると、準備はすっかり出来上りました。私はいよいよ／＼出発の許可の御命令がいたゞきたい、と陛下に願いました。陛下は皇族たちと一緒に宮殿から、わざ／＼出て来られました。私は皇帝の手にキスしようとして、うつ伏せに寝ました。

陛下は快く手を貸してくださいます。皇后も、皇子たちも、みな手にキスを許してくださいました。それから、皇帝は二百スプラグ入りの金袋を五十箇と、陛下の肖像画を私にくださいました。肖像画の方は、いたまないようすに、すぐ片一方の手袋の中にしまつておきました。

私はボートの中に、牛百頭、羊三百頭の肉と、それに相当するパンと飲物を積み

込みました。それから四百人のコックの手でとゞのえてくれた肉なども積み込みました。それから、生きた牝牛六頭と牡牛を二頭、それから牝羊六頭と牡羊二頭を、これらは国へ持つて帰つて、飼つてみようと思いました。船の中で食べさせるために、乾草を一袋と麦を一袋、用意しました。

私はこの國の人間も、十人ばかり、つれて行きたかったのですが、これはどうしても、陛下がお許しになりません。それどころか、私のポケットをすつかり調べられ、たゞえ志願する者があつても、人民は決してつれて行かないと誓わされました。

そんなふうに、できるかぎりの準備をとゞのえ、いよいよ／＼、一七〇一年九月二十一日の朝六時、私は出帆しました。風は南東だったので、北へ向けて四リーグばかり行くと、ちょうど午後六時頃、小さな島の影が見えてきました。ぐん／＼進んで行つて、その島のそばで、ボートの錨をおろしました。こゝは誰も住んでいない無人島らしいのです。私は軽い食事をすませ、ぐっすり眠りました。六時間も眠つた頃、目がさめ、それから二時間ばかりすると、夜が明けました。日の出前に朝飯をすまし、錨を上げて、風向もよかつたので、羅針盤をたよりに、昨日と同じ進路をつづけて行きました。私の考えでは、ヴァン・ディーメンズ・ランドの北東にある群島の、どれか一つに、たどりつこうと思っていたのです。だが、その日はついに何も見えませんでした。

翌日、午後三時頃、ブレフスキュから二十四リーグばかりも来たかと思える海上で、一隻の帆船を見つけました。船は南西に向つて進んでいます。私は大声で呼んでみましたが、返事してくれません。しかしちようど、風が風いだので、私の船はだん／＼向うへ近づいて行くのでした。私はあつたけの帆を張りました。半時間もすると、向うの船でも気がついて、合図に旗を出し鉄砲を打ちました。

私はもう一度、故国が見られ、あの懐しい人たちとも会えるのかと思うと、うれしさがこみあがてきました。船は帆をゆるめました。それで私はその船に追いつきました。その時刻は九月二十六日の夕方の五時か六時頃でした。私はイギリスの国旗を見ただけで、胸がワク／＼しました。牛と羊を上衣のポケットに入れると、私は食料の小さな荷物を抱えて、向うの船に乗り移りました。

この船はイギリスの商船で、北海、南海を通つて、日本から帰る途中でした。船長のジョン・ビデルはデットフォード生れで、大へん親切な男でした。乗組員は五十人ばかりいましたが、そのなかに私の以前の仲間のウイリアムがいたのです。このウイリア

ムが私のことを船長に大へんよく言つてくれました。

船長は私をよくもてなしてくれました。一たい、どこから来て、どこへ行くつもりだったか、話してくれと言うので、私は今までのことをごく簡単に話しました。だが、船長は、私の頭がどうかしている、と思つたようです。いろんな危険に会つたので、気が変になつたと思って、ほんとにしてくれません。そこで私はポケットから黒い牛や羊を出して見せてやりました。これには船長も非常に驚いて、私の言うことが嘘でないと納得したようです。それから私は、ブレフスキュ皇帝からもらった金貨や肖像画や、その他いろいろ珍しい品を取り出して見せました。私は二百スフラグ入りの金袋を船長にやりました。

船は無事におだやかに進み、一七〇二年四月十日、私たちはダウンスに着きました。ただ、途中でちよつと不幸な事件が起きました。それは船にいる鼠どもが、私の羊を一頭、引いて行つてしまつたことです。きれいに肉をむしりとられた羊の骨は、穴の中で見つかりました。

残りの家畜はみんな無事にイギリスへ持つて戻りました。私はそれをグリニッジの球場の芝生に放してやりました。この草でも食べるかしら、と心配でしたが、放してみると、家畜たちは、この草が綺麗なので、喜んで食べるのでした。

私が長い航海の間、この家畜を無事に飼つたのは、全く船長のおかげでした。私は船長から特別製のビスケットを分けてもらい、それを粉にして水でこねて、家畜に食べさせていたのです。イギリスにしばらく滞在している間に、私はこの家畜を見世物にして、かなりお金をもうけました。が、また、私は航海に出ることになつて、六百ポンドで売り払いました。

私が妻子と一緒に暮したのは、たつた一ヶ月でした。もつと／＼外国を見たいという気持がうず／＼して、どうしても、私は家にじつとしていられなくなりました。そこで、私は商船『アドベンチュア号』乗組員になりました。この航海の話は、次の『大人国』を読んでください。

## 1 つまみ上げられた私

私はイギリスに戻つて二ヶ月もすると、また故国をあとに、ダウنسを船出しました。私の乗つた船は、『アドベンチュア号』でした。

船がマダガスカル海峡を過ぎる頃までは、無事な航海でしたが、その島の北あたりから、海が荒れました。そして二十日あまりは、難儀な航海をつづけました。が、そのうち風もやむし、波もおだやかになつたので、私たちは大へん喜んでいました。ところが、船長は、この辺の海のことをよく知つてゐる男でした。暴風雨が来るから、すぐ、その用意をするよう命令しました。はたして、次の日から暴風雨がやつて来ました。

船は荒れ狂う風と波にもまれ、私たちは一生懸命、奮闘しましたが、なにしろ、恐ろしい嵐で、海はまるで氣狂のようでした。船はずん／＼押し流されて、どこに自分たちがいるのやら、もう見当がつかなくなりました。

私たちの船は、どこともしれない海の上を、陸を求めて進んでいました。まだ、船には食糧も充分あるし、船員はみんな元気でしたが、たゞ困るのは水でした。ある日、マストに上つていた少年が、

「陸が見える！」

と叫びました。

それが一七〇三年六月十六日のことでした。翌日になると、何か大きな島か陸地らしいものが、みんなの目の前に見えてきました。その南側に小さな岬が海に突き出ていて、浅い入江が一つ出来てきました。

私たちは、その入江から一リーグばかり手前で、錨をおろしました。みんな水を欲しがつて、船長は十二人の船員に、水桶を持たせて、ボートに乗せて、水探しに出しました。私もその国が見たいのと、何か発見でもありはしないかと思つたので、一しょにそのボートに乗せてもらいました。

ところが、上陸してみると、川もなければ、泉もなく、人ひとり住んでいる様子もないでした。船員たちは、どこか清水がないかと、海岸をあてもなく歩きまわっていましたが、私は別の方角へ一マイルばかり、一人で歩いてみました。だが、あたりは石ころばかりの荒地でした。面白そうなものも別に見つからぬし、そろ／＼疲れてきたので、私は入江の方へプラ／＼引っ返していました。海が一目に見わたせるとここまで来てみると、船員たちは、もうちゃんとボートに乗り込んで、一生懸命に、本船めがけて漕いでいるのです。

おーい待つてくれ、と私は大声で呼びかけようとして、ふと気がつきました。恐ろしく大きな人間がグン／＼海を渡つて、ボートを追つかけているのです。膝のあたりしかない海の中を、その男は恐ろしい大股で歩いて行きます。だが、ボートは半リーグばかりも先に進んでいたし、あたりは鋭い岩だらけの海だったので、この怪物も、ボートに追いつくことはできなかつたのです。

もつとも、これはあとから聞いた話なのです。そのときの私は、そんなものを見ているどころではありません。もと来た道を夢中で駆けだし、それから私は、とにかく、嶮しい山の中をよじのぼりました。山の上にのぼつてみると、あたりの様子が、いくらくわかりました。土地は見事に耕されていますが、何より私を驚かしたのは、草の大きいことです。そこらに生えている草の高さが、二十フィート以上ありました。

やがて、私は国道へ出ました。国道といつても、実は、麦畑の中の小路なつたが、私は、まるで国道のように思えたのです。しばらく、この道を歩いてみましたが、両側とも、ほとんど何も見えないのでした。とりいれも近づいた麦が、四十フィートかららの高さに、伸びています。一時間ばかりもかゝつて、この畑の端へ出でみると、高さ百二十フィートもある垣で、この畑が囲まれているのがわかりました。だが、樹木などは、あんまり高いので、私には見当がつきませんでした。

この畑から隣りの畑へ通じる段々があり、それが四段になつていて、一番上の段まで行くと、一つの石をまたぐようになつてきました。一段の高さが六フィートもあつて、上の石は二十フィート以上もあるので、とても私には、そこは通れませんでした。どこか垣に破れ目でもないかしら、と探していると、隣りの畑から、一人の人間がこちらの段々の方へやつて来ました。人間といつても、これは、さつきボートを追つかけたのと同じくらいの大きな怪物です。背の丈は、塔の高さくらいはあり、一歩あるく幅が、十ヤードからありそうです。私は胆をつぶし、麦畑の中に逃げ込んで、身

を隠しました。

そこから見ていると、その男は段々の上に立ち上つて、右隣りの畑の方を振り向いて、何か大声で叫びました。その声のもの凄いこと、私ははじめ雷かと思つたくらいでした。

すると、手に／＼鎌を持った、同じような、七人の怪物が、ぞろ／＼と集つてくるではありませんか。鎌といつても、普通の大鎌の六倍からあるのを持つてゐるのです。が、この七人は、あまり身なりもよくないので、召使らしく思えました。はじめの男が何か言いつけると、彼等は私の隠れている畑を刈りだしました。

私は、できるだけ遠くへ逃げようとしましたが、この逃げ路が、なか／＼難儀でした。なにしろ、株と株との間が一フイートしかないところもあります。これでは、私の身体でも、なか／＼通りにくいのでした。どうにかこうにか進んでいるうちに、麦が風雨で倒れてしまつてゐるところへ出ました。もう、私は一步も前進できません。茎がいくつも絡み合つていて、潜り抜けることもできないし、倒れた麦の穂先は、ナイフのようく尖つていて、それが、洋服ごしに、私の身体を突き刺しそうなのです。

そうこうしているうちに、鎌の音は、百ヤードとない後から、近づいて来ます。私はすっかり、へたばつて、もう立つてゐる力もなくなりました。畠と畠との間に横になると、いつそ、このまゝ死んでしまいたい、と思いました。私は、残してきた妻や子供たちのことが、眼に浮んできました。みんながとめるのもきかないで、航海に出たのが、今になつて無念でした。ふと、私はリリパットのことも思い出しました。あの国の住民たちは、この私を、驚くべき怪物として、尊敬してくれたし、あの国でなら、一艦隊をそつくり引きずつて帰ることだつてできたのです。

だが、こゝでは、こんな、とてつもない、大きな連中に会つては、この私はまるで芥子粒けしづぶみたいなものです。今に誰かこの大きな怪物の一人につかまつたら、私は一口にパクリと食われてしまうでしょう。しかし、この世界の果てには、リリパットより、もつと小さな人間だつているかも知れないし、その世界の果てには、今こゝにいる大きな人間より、もつと／＼大きな人間だつているかも知れないと、私は恐怖で気が遠くなつていながら、こんなことを思いつけていました。

そのうちに、刈手の一人が、私の寝ている畠から、十ヤードのところまで、近づいてきました。もう、この次には、足で踏みつぶされるか、鎌で真二つに切られるかもわかりません。その男が動きかけると、私は大声でわめきちらし、助けを求めました。

巨人は立ちどまつて、しばらく、あたりを見まわしていましたが、ふと、地面にひふしている私を、見つけました。この小さな、危険な、動物を、騒がれないように、囁まれないよう、つかまえるには、どうしたらいいのかしら、といった顔つきで、彼はしばらく考えていました。私もイギリスで、いたちや鼠をつかまえるときには、ちよつとこんなふうにしたものでした。

とう／＼、彼は思いきつて、人差指と親指で、私の腰の後の方をつまみあげると、私の形をもっとよく見るために、目から三ヤードのところへ、持つてゆきました。私は、彼のしていることがよくわかつたので、安心して落ち着いていました。こうして、地上から六十フィートの高さにつまみ上げられてゐる間は、じつとしていよう、と思いまし。ただ、苦しかつたのは、私を指からすり落すまいとして、ひどく、脇腹をしめつけられていることでした。

私はたゞ、天を仰ぎ両手を合せながら、お願ひするように、哀れっぽい調子で、何かと言つてみました。というのは、私たちが厭な虫など殺す場合、よく地面にパツとたきつけるのですが、あれを今やられはすまいかと、心配でならなかつたのです。

だが、幸いなことに、彼には私の声や身振りが気に入つたようでした。私がはつきり言葉を話すので、その意味は彼にはわからなかつたのですが、ホウ、ものが言えるのか、と驚いたような顔つきで、彼は珍しげに私を眺めるのでした。私は、彼の指で、脇腹をしめつけられているのが苦しくなつたので、うめいたり、泣いたりして、一生懸命、そのことを身振りで知らせました。

すると、彼にもその意味がわかつたらしく、上衣の垂れをつまみ上げて、その中に、そつと私を入れました。それから大急ぎで、主人のところへ駆けつけて行きました。主人というのは、私が最初に畠で見た男でした。

その主人は、召使が話すのを、じつと聞いていましたが、杖ほどもある藁わらすべを取つて、それで、私の上衣の垂れを、めぐりあげました。この洋服は、私の身体に、生れつきくつついてるものと思ったのでしよう。それから、私の髪の毛に、フーと息を吹きかけて、髪を分けると、顔をしげ／＼眺めました。それから、(これはあとになつて、わかつたのですが)召使たちを呼び集めると、これまでこんな小さな動物を畠で見たことがあるかと、みんなに、尋ねました。それから、私を、そつと、四つ這いのまゝの恰好で、地面におろしてくれました。

私はすぐに立ち上つて、逃げ出すつもりのないことを見せるために、ゆる／＼と

あたりを歩きまわりました。すると、みんなは、私の動きぶりをよく見ようとして、私を囲んで、坐り込んでしまいました。私は帽子を取つて、百姓にていねいに、おじぎをしました。それから、ひざまずいて、両手を高く差し上げ、天を仰いで大声で、二言、三言話しかけました。そして、ポケットから、金貨の入った財布を取り出して、うや／＼しく彼のところへ持つて行きました。

彼はそれを掌で受け取つてくれましたが、目のそばへ持つて行つて、何だろかと、眺めていました。袖口からピンを一本抜き取つて、その先で何度も、掌の上の財布をひっくりかえしていましたが、やはり、何だかわからないようでした。

そこで、私は手まねで、その掌の財布を下に置いてくれ、と言いました。財布が下に置かれるとき私はそれを手に取つて、中を開いて、金貨をみんな彼の掌の上にばらまきました。四ピストルのスペイン金貨が六枚と、ほかに小銭が二三十枚ありました。見ると彼は小指の先を舌で濡しては、大きい方の金貨を一枚々々つまみ上げていましたが、やはり、それが何だか、さっぱりわからぬらしいのです。

彼は手まねで私に、もう一度これを財布におさめて、ポケットに入れておけ、と言ふのでした。私は何度も、そのお金彼に差し出してみましたが、やはり、彼の言うとおりに、おさめできました。

そのうちに、もう百姓には、私が理性的な生物（人間）だ、ということが、わかつていたのです。彼は何度も私に話しかけましたが、その声は、まるで水車の響のようで、私の耳は破れそうでした。私も、知つてゐるかぎりのいろんな外国语を使って、力一ぱいの大声で、話しかけてみました。すると向うは、耳をすぐ私のそばに持つて来て、聞いてくれるのですが、駄目でした。私たちの言い合つてゐる言葉は、お互に意味が通じないのでした。

召使たちはまた麦刈に取りかゝりましたが、主人はポケットから、ハンカチを取り出し、二つ折りにして、左手の上にひろげ、その掌を地面の上に差し出して、この中に入つて来いと、手まねで私に合図をします。その掌の厚さは一フートぐらいでしたから、私も、らくにのぼれるのです。今はとにかく主人の言うとおりにしていようと思いました。

それで、私は落つこちないように用心しながら、ハンカチの上に長くなつて寝ころびました。すると、彼はハンカチの端で、私の頭のところを大切そうにくるんでしまい、そのまま、家に持つて行きました。

家に帰ると、彼はさっそく、細君を呼んで、ハンカチの中のものを見せました。ちょうど、イギリスの女が、ひきがえるやくもを見たときのように、「きやあ……」と叫んで、細君は飛びのきました。しかし、しばらくそばで見てゐるうちに、主人の手まねで私がいろんなことをするのを見て、細君はすっかり感心してしまいました。そして今日は、だん／＼と私にやさしくしてくれるようになりました。

正午頃になると、一人の召使が、食事を持つて来ました。それはいかにも、お百姓の食事らしく、肉をたっぷり盛つた皿が、たゞ一つだけ出されたのでした。しかし、それは直径が二十四フィートもある、大きなお皿でした。

食堂には主人と細君と、子供が三人、それに、年寄の祖母がやつて来ました。みんながテーブルに着くと、主人は私をテーブルの上にあげて、少し彼から離れたところに置きました。そのテーブルは高さ三十フィートもあるのですから、私は怖くてたまらないのです。落っこちないように、できるだけ、真中の方へよつて行きました。

細君は肉を少し、小さく刻んで、それから、パンを二つ／＼に碎くと、それを私の前に置いてくれました。そこで、私は細君に向つて、ていねいに、おじぎをして、ポケットから、ナイフとフォークを取り出して食べはじめました。みんなは、私の有様が面白くてたまらないようでした。

細君は女中を呼んで、小さなコップを持って来させました。小さいといつても、三ガロン（約五升）は入りそうなコップですが、それに飲物を注いでくれました。それを私はやつと両手でかゝえあげると、まず、英語で、できるだけ大きな声を張り上げて、細君の健康を祝しました。それから、うや／＼しくコップを頂戴しました。すると、みんなはお腹をかゝえて笑いだしましたが、その笑い声のもの凄さ、私は耳がつんぽになるばかりでした。

この飲物はサイダーのような味なので、私はおいしく、いたゞきました。しばらくすると、主人は私を手まねで、彼の皿のところへ来い、と招きました。しかし、なにしろ私はテーブルの上をビク／＼しながら歩いてゐるのでしたから、パンの皮に躊躇ちゆうじゆと、うつ伏せに、ぺたんと倒れてしましました。けれども、怪我はなかつたのです。すぐに起き上りましたが、みんながひどく心配してくれるので、私は小脇にかゝえていた帽子を取り、頭の上で振りながら、「万歳！」と叫びました。これは転んでも、怪我はなかつたということを、みんなに知つてもらつたのでした。

そのとき、主人の隣りに坐つていた、一番下の息子で、まだ十ばかりのいたずら児

が、私の方へ手を伸したかとおもうと、いきなり、私の両足をつかまえ、宙に高くぶら下げました。私は手も足も、ブル／＼ふるえつづけました。しかし、主人は息子の手から、私を取り上げ、同時に彼の左の耳をビシャリと殴りつけました。それは、ヨーロッパの騎兵なら、六十人ぐらい叩きつけてしまいそうな殴り方でした。それから主人は息子に、向うへ行つてしまえ、と命令するのでした。

しかし私は、この子供に怨まれはしないかと、心配でした。私はイギリスの子供たちも、雀や、兎や、小猫や、小犬に、よくいたずらをするのを知っています。そこで、私は主人の前にひざまずいてその息子を指さしながら、どうか、許してあげてください、と手まねで、私の気持を伝えました。私は息子のところへ行き、その手にキスしました。主人はその息子の手を取つて、私をやさしくなでさせました。

ちょうどこの食事の最中に、細君の飼つている猫がやつて来て、細君の膝の上に跳び上りました。私はすぐ後の方で、何か十人あまりの職人が仕事でもはじめたような物音を聞きました。振り返つてみると、この猫が咽喉をゴロ／＼鳴らしているのです。細君が食物をやつたり、頭をなでている間に私はそつと、その猫を眺めてみましたが、その大きさは、まず、牡牛の三倍はありそうでした。私は五十フィートも離れて、猫から一番遠いところに、立つていたのですが、そして、細君は、猫が私に跳びかゝつたり、爪を立てたりしないように、しつかり猫を押えていてくれたのですが、それでも、私はそのもの凄い顔が恐ろしくてならなかつたのです。しかし危険なことは起らなかつたのです。

主人はわざと、私を猫の鼻の先三ヤードもないところに置きました。しかし、猫は見向きもしませんでした。猛獸というものは、こちらが逃げ出したり、怖がると、かえつて追つかけて来て跳びかぶるものだ、ということを私は前に人から聞いて知つてました。それで、私は今いくら恐ろしくても知らん顔をしていよう、と決心しました。

私は、猫の鼻先をわざと、五六回、行つたり来たりしてやりました。それから、ずっと側まで近づいて行つてみました。と、かえつて猫の方が怖そうに後しさりするのでした。そのときから、私はもう、猫や犬を怖がらなくなりました。犬も、この家には、三四頭ばかりいたのです。それが部屋の中に入つて来ても、私は平氣でした。一匹はマスティフで、大きさは象の四倍ぐらいありました。もう一匹は、グレイハウンドで、これはとても背の高い犬でした。

食事がしまい頃になると、乳母が赤ん坊を抱いてやつて来ました。赤ん坊は、私を見つけると、玩具に欲しがつて、泣きだしました。その赤ん坊の泣声は、なんとももの凄い声でした。母親は私をつまみ上げて、赤ん坊の傍に置きました。赤ん坊は、いきなり、私の腰のあたりを引っつかんで、頭を口の中に持つてゆきました。私がワツと大声でうめくと、赤ん坊はびっくりして、手を離します。そのとき細君が前掛をひろげて、うまく受けてくれたので、私は助かりました。でなかつたら、首の骨ぐらい折れたでしよう。

乳母はガラ／＼を持って来て、赤ん坊の機嫌をとろうとしました。そのガラ／＼というのは、空罐に大きな石を詰めたようなもので、それを綱で子供の腰に結びつけるのでした。でも、赤ん坊はまだ泣きつづけていました。それで、とう／＼乳母は胸をひろげて、乳房を出し、赤ん坊の口に持つてゆきました。私はその乳房を見て、びっくりしました。

大きさといへ、形といへ、色合いといへ、とても気味の悪いものでした。なにしろ、六フィートも突き出しているので、まわりは十六フィートぐらいあるでしょう。乳首だつて、私の頭の半分ぐらいあります。それに、乳房全体が、あざやら、そばかすやら、おできやらで、しみだらけなのです。見ていると、気持が悪くなるくらいでした。乳母は乳を飲ましいゝような姿勢で、赤ん坊を抱いていますが、私はテーブルの上にいるので、その乳房はすぐ目の前にはつきりと見えるのでした。

それで私はふと、こんなことがわかりました。イギリスの女が美しく見えるのは、それは私たちと身体の大きさが同じだからなのでしょう。もし虫眼鏡でのぞいて見れば、どんな美しい顔にも凹凸やしみが見えるにちがいありません。

そういうえば、リリパットに私がいた頃、あの小人たちの肌の色は、とても美しかったのを、私はよくおぼえています。リリパットの友達も、この私の顔が、小人の目から見ると、どんなに見えるか、教えてくれたことがあります。私の顔は、地上から見るかに見上げている方が、美しいそうです。私の掌に乗せられて、近くで見ると、私の顔は大きな孔だらけで、髪の根はいのしゝの毛の十倍ぐらいも堅そうで、顔の色の気味の悪いことゝいつたらないそうです。顔だちはみんなよくとつていました。ことに主人など、私が六十フィートの高さから眺めてみると、なかなか立派な顔つきでした。

食事がすむと、主人は仕事に出かけて行きました。彼は細君に、私の面倒をみてやれ、と命令しているようでした。その声や身振りで、私にはそれがわかつたのです。

私は大へん疲れて、睡くなりました。すると細君は、私の睡そうな顔に気がつき、自分のベッドに寝かして、綺麗な白いハンカチを私の上にかけてくれました。ハンカチといつても、軍艦の帆よりも大きいくらいで、ゴツ／＼していました。

私は二時間ばかりも眠りました。私は國へ帰つて妻子と一しょに暮している夢をみていました。ふと目がさめて、あたりを見まわすと、私は、広さ二三百フィート、高さ二百フィート以上もある、がらんとした、大きな部屋に、たつた一人、幅二十ヤードもある大きなベッドで、寝ているのに気がつきました。すると、私はなんだか悲しくなつてしましました。

細君は家事の用で外に出て行つたらしく、姿が見えません。私は錠をおろした部屋に、一人、とじこめられているのです。このベッドは床から八ヤードもあります。私は下へおりたかたのですが、声を出して叫ぶ元気もなくなつてきました。しかし、たとえ呼んでみても、とても私の声では、この部屋から家族のいる台所までは、とゞかなかつたでしょう。

ところが、そのとき、鼠が二匹、ベッドの帷<sup>とほ</sup>をのぼつて来ると、ベッドの上<sup>うへ</sup>をあちこち嗅ぎまわつて、ちよろ／＼走り出しました。一匹などは、も少しで、私の顔に這いのぼらうとしたのです。私はびっくりして飛び起きると、短剣を抜いて、身構えました。だが、この恐ろしい獸どもは、左右からドタ／＼とおそいかゝつて来て、とう／＼、一匹は私の襟首に足をかけました。しかし、私は幸運にも、彼に噛みつかれる前に、彼の腹に、ズシリと短剣を突き刺していました。

たちまち、彼は私の足許に倒れてしましました。もう一匹の方は、仲間が殺されたのを見ると、あわてて逃げ出しました。逃げようとするところを、私は肩に一刀浴せかけたので、タラ／＼血を流しながら行つてしましました。この大格闘のあとで、私はベッドの上をあちこち歩きながら、息をしづめ、元気を取り戻しました。鼠といつても、大きさはマステイフ種の犬ぐらいいつて、それに、とても、すばしこくて、獰猛<sup>どうもう</sup>な奴でした。もし私が裸で寝ていたら、きっと八つ裂きにされて食べられたでしょう。

死んだ鼠の尻尾をはかつてみると、二ヤードぐらいいりました。まだ血を流して横になつて死骸を、ベッドから引きずりおろすのは、実に、厭なことでした。それに、まだ、少し息が残つているようでしたが、これは、首のところへ深く剣を突き刺して、

息の根をとめてしまいました。

それから間もなく、細君が部屋に入つて来ました。私が血まみれになつてゐるのを見て、細君は駆けよつて、抱き上げてくれました。私は鼠の死骸を指さし、そして、笑いながら、怪我はなかつたと手まねで教えました。細君は大喜びでした。女中を呼ぶと、死骸を火箸ではさんで、窓から捨てさせました。それから、彼女は私をテーブルの上に乗せてくれました。私は血だらけの短剣を見せ、上衣の垂れで拭いて鞘におさめました。

## 2 見世物にされた私

この家には九つになる娘がいました。年のわりには、とても器用な子で、針仕事も上手だし、赤ん坊に着物を着せたりすることも、うまいものでした。この娘と母親の二人が相談して、赤ん坊の搖籃<sup>ゆりかご</sup>を私の寝床に作りなおしてくれました。私を入れる搖籃を箪笥<sup>たんす</sup>の小さな引出に入れ、鼠に食われないように、その引出をつるし棚の上に置いてくれました。私がこの家で暮している間は、いつもこれが私の寝床でした。もつとも、私がこの国の言葉がわかるようになり、ものが言えるようになると、私はいろ／＼と頼んで、もつと便利な寝床になおしてもらいました。

この家の娘は大へん器用で、私が一二度その前で洋服を脱いでみせると、すぐに私に着せたり脱がせたりすることができるようになりました。もつとも、娘に手伝つてもらわないとときは、私は自分ひとりで、着たり脱いだりしていました。彼女は私にシヤツを七枚と、それから下着などをこしらえてくれました。一番やわらかい布地でこしらえてくれたのですが、それでも、ズックよりもつとゴツ／＼していました。そして、その洗濯も彼女がしてくれるようになりました。

彼女は私の先生になつて、言葉を教えてくれました。何でも、私が指さすものを、この国の言葉で言つてくれます。そんなふうにして教えられたので、一二三日もすると、私はもう欲しいものを口で言えるようになりました。

彼女は大へん気だてのいい娘で、年のわりに小柄で、四十フィートしかなかつたので、彼女は私に、グリルドリッジという名前をつけてくれました。やがて家の人々も、この名を使うようになるし、後には國中の人がみな、私のことをそういうて呼びました。このグリルドリッジという言葉は、イギリスでなら、マニキン（小人）という言葉と

同じ意味でした。

私がこの国で無事に生きていたのは、一つには、この娘のおかげでした。私たち  
はこゝにいる間じゅう、決して離れなかつたものです。私は彼女のことを、グラムダル  
クリツチ（可愛いお乳母さん）と呼びました。彼女が私につくしてくれた、親切のか  
ずくは、特に、こゝに書いておきたいと思います。私はぜひ、折があつたら、彼女  
に恩返ししたいと、心から願つているのです。

さて、私の主人が畑で不思議な動物を見つけたという噂は、だんぐり、ひろがつてゆきました。

その動物の大きさはスブテクナク(三)の国の綺麗な動物で、長さはおよそ六フィートほど)ぐらいで、形はまるで人間と同じ形だし、動作も人間とそつくり、何だか可

愛い言葉をしやべるし、それにこの国の言葉も今は少しおぼえたようだし、二本足でまつすぐ立つて歩くし、おとなしくて、すなおで、呼べば来るし、言いつけたことは何

でもするし、とても、きやしやな手足を持つていて、顔色は三三になる  
もつと綺麗だ、などと、私の評判は、だん／＼、ひろまつていました。

ところで、主人の親友の農夫が、このことを聞くと、ほんとかどうか、見にやつて來ました。私はさつそく出されて、テーブルの上に乗せられました。私は言いつけどおりに、歩いて見せたり、短剣を抜いたり、おさめたりして見せました。それから、お客様に向つて、うや／＼しく、おじぎをして、

よくいらっしゃいました。御機嫌はいかがですか。」

てやりました。

と、彼女は私のことを嘆くのでした。

しかし、私は、この乳母さんほどには、心配していなかつたのです。いつかは、きっと自由の身になつてみせると、私は強い希望を持っていました。それに、私が怪物として、あちこちで見世物にされても、私はこの国には知人ひとりあるわけではなし、私はイギリスに帰つてからも、何も、このことは非難されるはずがないと思います。イギリスの国王でも、今の私と同じようなことになつたら、やはり、これくらいの苦労はするだろう、と私は思いました。

この老人は、けちんぼうだとの評判でしたが、やはりそうでした。そのため、私はと  
んだ目に会うことになりました。こゝから二十一マイルばかり、馬でなら、半時間  
かかる、隣りの町の市日に、私をつれて行って、ひとつ見世物にするがいゝ、と、彼は  
主人にすゝめたのです。

主人とその男は、とき々、私の方を指さして、長い間、ひそ々とさへやき

「見物人たちは、どんな乱暴なことをするかわかりません。あなたを押しつぶしてしまうかもしれないし、もしかすると、手を取つて、あなたの手足を一本ぐらい折つてしまふかもわかりません。」

と、彼女は私のことを心配してくれました。

「あなたは遠慮ぶかい、おとなしい、そして、気位の高い人でしょう。それなのに、見世物なんかにされて、お金のために、卑しい連中の前でなぐさみにされるなんて、ほんとうに口惜しいことでしょう。お父さんもお母さんも、私にグリルドリッジをあげると言つて約束したくせに、今になつて、こんなことをするのです。去年も子羊をあげると言つておきながら、その羊が肥えてくると、すぐ肉屋に売り払つてしまつた、あれと同じようなことをしようとしてるのです。」

と、彼女は私のことを嘆くのでした。

しかし、私は、この乳母さんほどには、心配していなかつたのです。いつかは、きっと自由の身になつてみせると、私は強い希望を持つつていました。それに、私が怪物として、あちこちで見世物にされても、私はこの国には知人ひとりあるわけではなし、私がイギリスに帰つてからも、何も、このことは非難されるはずがないと思ひます。イギリスの国王でも、今の私と同じようなことになつたら、やはり、これくらいの苦労はするだらう、と私は思いました。

主人は友達の意見にしたがつて、私を箱に入れて、次の市日に隣りの町まで運んで行きました。私の可愛い乳母さん（娘）も、父親の後に乗つて、一しょについて来ました。私の入れられた箱は、四方とも塞がれていて、たゞ、出入口の小さな戸口のほかには、空気抜きのため錐の穴が二つ三つつけてありました。娘は私が寝られるようになつたのでした。彼女は私と別れることを、大へん悲しがり、私を胸に抱きしめて泣きだしました。私が見世物にされるということを、グラムダルクリッチは、母親から聞き出したのでした。彼女は私と別れることを、大へん悲しがり、私を胸に抱きしめて泣きだしました。

「見物人たちは、何か悪いことを相談し合つてゐるな、と思つました。じつと氣をつけていると、ときどき、もれて聞える一人の言葉は、なんだか私もわかるような氣がしました。しかし、ほんとのことは、次の朝、グラムダルクリッチが私に話してくれたので、それで、すつかりわかつたのでした。

私が見世物にされるということを、グラムダルクリッチは、母親から聞き出したのでした。彼女は私と別れることを、大へん悲しがり、私を胸に抱きしめて泣きだしました。彼女は私と別れることを、大へん悲しがり、私を胸に抱きしめて泣きだしました。

た／＼になつてしましました。なにしろ、馬は一步に四十フィートも飛んで、しかも非常に高く跳ねるので、私の箱は、まるで大暴風雨の中を、船が上つたり下つたりするようなものでした。

さて、町に着くと、主人は、行きつけの宿屋の前で馬をおり、しばらく、宿の亭主と相談していました。それから、いろんな準備が出来上ると、東西屋をやどつて、町中に触れ歩かしました。

「さあ、いらつしやい、いらつしやい、世にも不思議な生物、身の丈はスプラクナク（この国の綺麗な動物）ほどもないのに、頭のてっぺんから足の先まで、身体は人間にそつくりそのまま、言葉が話せて面白い芸当をいたします。」

と、こんなふうなことをしゃべらせたのです。

私は宿屋で、三百フィート四方もありそうな、大広間につれて行かれ、テーブルの上に乗せられました。私の乳母は、テーブルのそばの腰掛の上に立つて、私の面倒をみたり、いろ／＼と指図をしてくれるのでした。そのうちに、見物人がぞろ／＼と押しかけて来ましたが、あまり混雑するので、主人は一回に三十人だけ見せることに決めました。

私は乳母の言いつけどおりに、テーブルの上を歩きまわつたり、私にものと言わそくとして、彼女がいろ／＼質問をすると、私は力一ぱいの声で、それに答えるのでした。それから、何度も見物人の方を振り向いて、ていねいにおじぎして、「よくいらっしゃいました。」と言つたり、そのほか、教わつたとおりの挨拶をします。そしてグラムダルクリッチが、指貫ゆびぬきに酒を注いで渡してくれると、私はみんなのために乾盃をしてやります。かとおもえ、短剣を抜いて、イギリスの剣術使のまねをして、振りまわします。私の乳母が、藁の切れつばしを渡してくれると、私はそれを槍のつもりにして、若い頃習つた槍の術をして見せます。

その日の見物人は、十二組あつたので、私は十二回も、こんなくだらないまねを繰り返さねばならなかつたのです。そう／＼、私は疲れて腹が立つて、すつかり、へばつてしましました。

私を見た連中が、これは素晴らしいという評判を立てたものですから、見物人はどつと押しかけて、大入満員でした。主人は、私の乳母以外には、誰にも私に指一本させません。そのうえ、危険を防ぐために、テーブルのまわりを、ぐるりとベンチで取り囲んで、誰の手にもとゞかないようにしました。

それでも、いたずらの小学生が、私の頭をねらつて榛の実を投げつけたものです。あたらなかつたので助かりましたが、もしあつたら、私の頭は滅茶苦茶にされたでしょう。なにしる榛の実といつても、南瓜ぐらいの大きさだし、それに猛烈な勢で飛んで来たのです。しかし、このいたずら小僧は、なぐられて部屋から追い出されてしましました。

市日がすんで、私たちは家に戻りましたが、主人はこの次の市日にも、またこの見世物をやるという広告を出しました。そして、それまでに、私のためにもつと便利な乗り物を用意してくれました。だが、それはあたりまえのことで、なにぶんこの前の旅行で、私は非常に疲れ、八時間もぶつとおしに見世物にされたので、ヘト／＼になつてしましました。私が元気を取り返すには、少くとも三日はかかりました。

ところが、私の評判を聞いて、あちこちの紳士たちが、百マイルも先から、今度は主人の家に押しかけて来ました。私は家でも休めなくなりました。毎日々々、私はほとんど身体の休まる暇はなかつたのです。

これはもうかりそだ、と主人は、今度は私を街から街へつれ歩いて見世物にすることを思つきました。長い旅行に必要な支度をとゝのえ、家の始末をつけると、細君に別れを告げて、一七〇三年の八月十七日（これは私がこの国へ着いてからちょうど二カ月目でした）に出発しました。主人は、この国のほど真中にある、首都をめざして行くのでしたが、家からそこまでは、三千マイルの道のりでした。

主人は娘のグラムダルクリッチを自分の後に乗せました。私は箱に入れられ、その箱は娘の腰に結びつけてありました。彼女は箱の内側を一番やわらかい布地ですつかり張つてくれ、下には厚い敷物を入れて、その上に赤ん坊の寝台を置いてくれました。私の下着やシャツなんかも、みんな、彼女がとゝのえてくれ、何不自由なくしてくれました。私たちの後から、家の小僧が一人、荷物を持つてついてきました。

主人の考えでは、この旅は途中の町で見世物を開き、客のありそうな村や、貴人の家には、五十マイルや百マイルは、寄り道するつもりだつたらしいのです。私たちは毎日わずかに百四五十マイルぐらいずつ進み、大へんらくな旅をしました。グラムダルクリッチが私を庇かばうために、馬の揺れですぐ自分の方が疲れてしまうと言つてくれたからです。私が頼むと、彼女はたび／＼、箱から出しては、外の空気を吸わせてくれたり、景色を見せてくれました。そんなとき、彼女は紐でしつかり私を引っ張ついてくれるのでした。

私たちはナイル河やガンジス河よりも、何倍も大きな河を、五つ六つ越したのです。

ロンドンのテムズ河みたいな、小さな川は一つもないのです。この旅行は十週間かかりました。私たちは十八の大都市に立ち寄り、それから村々や、貴人の家で、何十回となく、見世物になりました。

十月二十六日に、いよ／＼、私たちは国都に着きました。その国都の名はローブラルグラットといわれ、これは『世界の誇』という意味でした。主人は宮殿から程遠くない、目抜きの大通りに宿をとりました。そして、この私のことを、くわしく書いたビラを、あちこちに貼り出しました。それから、方三四百フィートもある、大きな部屋を借りて、そこに、私の舞台として、直径六十フィートばかりのテーブルを置きました。そして、私が落つこちないように、テーブルの縁から三フィート入ったところに、高さ、三フィートの柵をめぐらしました。

私は毎日、十回ずつ見世物にされました。人々はすっかり感心して、大満足のようでした。私はこの頃、もうかなりうまく言葉が使えて、話しかけられる言葉なら、何でもわかるようになつていきました。そのうえ、家にいるときも、旅行中も、いつもグラムダルクリッチが私の先生になつてくれたので、この国の文字もおぼえ、ちょっとした文章なら説明することができるようになりました。彼女はポケットに小さな本を入れていました。それは若い娘たちによく読まれる本で、宗教のことが簡単に書いてあります。その本を使って、彼女は私に字を教えたり、言葉を説明してくれるのでした。

### 3 箱の中の私

私は毎日、忙しく動きまわらされたので、二三週間もすると、どう／＼身体の調子が変になりました。主人は私のおかげで、もうければもうけるほど、ます／＼欲ばかりになりました。私はまるで、食事も欲しくなくなり、骸骨のようく痩せ細りました。主人はそれを見ると、これは死んでしまうにちがいない、と考え、これが生きているうちに、できるだけもうけておこう、と決心したようです。

ちょうど、彼がこんなことを考えているところへ、宮廷から一人の使者がやつて来ました。王妃と女官たちのお慰みにするのだから、すぐ私をつれて来い、という命令なのです。これは、女官たちの中にもう私を見物したものがあつて、私の振舞いの美しさ

いこと、賢いことなど、いろいろ珍しい話を申し上げていたからです。

さて宮廷に私が引き出されると、王妃や女官たちは、私の物腰、態度を見て、大へん面白がりました。私はさつそくひざまずいて、王妃の御足にキスすることをお願いしました。しかし、慈深い王妃は、手の小指を差し出されました。私はテーブルの上に置かれていたので、その小指を両腕でかゝえて、その先にうや／＼しく唇をあてました。

王妃はまず、私の国や旅行について、いろいろ質問されました。私はできるだけ簡単に、はつきりとお答えしました。それから王妃は、宮廷に来て住む気はないかと聞かれました。そこで、私はテーブルに頭をすりつけて、「只今は主人の奴隸でございますが、もし、お許しが出るのでしたら、私は陛下に一身を捧げてお仕えしたいと存じます。」と答えました。

すると、王妃は主人に向つて、これをいゝ値段で売つてはくれないか、とお尋ねになりました。主人の方では、私がとてもあと一月とは生きていまいと思つていたところですから、「それでは、お譲りいたしますが、金貨一千枚頂戴いたしたいと存じます。」と言いました。

王妃はその場で、すぐお金を渡されました。そのとき、私は王妃に次のように、お願いしました。

「これから陛下にお仕えするにつきまして、お願ひしたいことがござります。それは、今まで私のことをよく気をつけて面倒をみてくれていたグラムダルクリッチのことです。あの人もひとつ宮廷でお召し使いになり、これからもずっと私の乳母と教師にさせていただけないでしようか。」

王妃はこの私の願いをすぐ許されました。が、父親の方もこれはわけなく承知しました。自分の娘が宮廷に召し出されることは、彼には願つてもない喜びでした。娘の方も、うれしさは包みきれないようでした。そこで旧主人は私に別れを告げ、「よい御奉公をするのだよ。」

と言ひながら出て行きました。

私は軽くおじぎしただけで、返事もしてやらなかつたのです。王妃は、私のこの冷淡さに気がつかれ、どうしたのか、とお尋ねになりました。そこで、私はありのまゝを

申し上げました。

「私はあの主人に畑の中で見つけ出されたのですが、そのとき、頭を打ち砕かれなかつたことだけが、まあ有り難かつたのです。主人は私を見世物にしたりして、さんざ大もうけしたのですから、私は主人の恩には充分報いているはずです。これまで私の送つてきた生活は、私より十倍強い動物でも、死んでしまいそうな、そんな、ひどいものでした。毎日つづけざまの骨折りのため、私の身体は非常に弱っていました。主人はもう私が長生きしないと思ったから、陛下に売り払ったのです。

けれども今では、自然の光、世界の愛人、人民の喜び、天地の不死鳥フニーフックスであらせられる陛下に保護されましたので、もう私は悪い扱いをされる心配もなくなりました。陛下のお顔を眺めさせていたゞくだけでも、私はもう、ひとりでに元気の湧いてくる気がいたします。」

私はざつと、こんなふうに王妃に申し上げました。王妃は私の挨拶を聞かれると、とにかく、こんな小さな動物に、こんな智恵と分別があるのを、すっかり驚かれました。そこで、王妃は掌の中に私を入れて、国王陛下の部屋のところへ、つれて行かれました。

国王陛下は、非常にいかめしく、おも／＼しい顔つきの方でしたが、はじめは、私の恰好が、よくおわかりにならなかつたらしく、

「いつからスプラクナクなど可愛がつてゐるのだね。」

と、王妃にお聞きになりました。

「これは私が、王妃の右手の中にうつ伏していたので、国王は、てつきり私をスプラクナク（この国の動物）だと思われたのでしよう。」

これは私が、王妃は非常に気のきいた、面白いことの好きな方でした。私をそつと書

いたところが、王妃は非常に気のきいた、面白いことの好きな方でした。私をそつと書きもの机の上に置くと、ひとつ国王に身の上話ををしてあげなさい、と仰せられるのです。私はごく簡単に話しました。そのとき、戸口までついて来て、私から目を離さなかつたグラムダルクリツチが部屋の中に入つて来ました。彼女は、私が彼女の父の家に来てから以来のことを、全部残らず、陛下に説明して聞かせました。

国王は、この国一番の学者で、哲学や数学にくわしい方でした。はじめ、私がまだものを言わないので、まつすぐに立つて歩いているのを御覧になつたとき、これは誰か器用な職人が工夫して作った、ぜんまい仕掛けの人形だろう、とお考えになりました。けれども、私の声を聞き、私の言うことが、一つ一つ道理に合つてゐるのを御覧にな

ると、さすがにびっくりされたようです。

しかし、国王は、どうして私がこの国へ来たか、それだけは、私の説明では、どうも満足されなかつたようです。これはグラムダルクリツチと父親がでつちあげた作り話だろう、よい値段で売りつけるために、一人で言葉を教え込んだのだろう、というふうにお考えになりました。それで陛下は私に向つて、まだ、いろ／＼と質問をされました。

私はすじみちの立つ返事を申し上げました。たゞ、私の言葉には訛なまりがあり、農家でおぼえたのですから、宫廷の上品な言い方ではなかつたわけです。

この国では毎週、三人の大学者が、陛下のところに集まることになつていました。陛下は、その三人の学者を呼んで、この私を研究させられました。これは一たい何だろうかと、学者たちは、しきりに首をひねつて、私の形を調べていましたが、みんな、まち／＼のことと言うのでした。

これはどうも自然の正しい法則から生れたものではない、こんな身体では木によじのぼることも、地面に穴を掘ることもできないから、さぞ困るだろう、ということだけは、三人とも意見が合いました。

彼等は私の歯をよく調べてみたうえで、これは肉食動物だと言いました。ところが、大がいの獣は私より強いのです。野鼠でも私より敏捷でした。これでは、かたつむりか虫でも食べるのでなければ、生きてゆけるとは考えられないのです。ところが、いろいろやつてみても、とてもそんなものは食べないことがわかりました。

学者の一人は、もしかすると、これはまだ産れない前の子供だろう、と言いました。だが、それには二人の学者がすぐ反対しました。これには手も足もちゃんとついている、それに髪まである、髪は虫眼鏡で見なければわからないが、とにかく、これは数年間は生きて来たものにちがいない、と二人の学者は言うのでした。

学者たちは、また首をひねつて言います。これは侏儒じほくでもない、侏儒なら、王妃のお気に入りのこの国第一の小人でも、身の丈三十フィートはあるが、これもつと小さいいから、侏儒とも言えない、と不思議がるのでした。そんなふうにして、いろ／＼議論をしたあげく、三人はとう／＼、こう決めてしまひました。これはつまり、自然がいたずらして作り出したものだろう、といふことになつて、私のことを、『自然の戯れ』だと彼等は言うのでした。

こんなふうに学者たちが私を、『自然の戯れ』だと決めてしまひたので、私はそれが、

ひどく不服でした。そこで、私は国王陛下に申し上げました。

「どうか私の申し上げることも少し聞いてください。私はこう見えても、これでも故国に帰りさえすれば、私と同じような背丈の人間が、何百万人といいます。そしてそこでは、動物も樹木も家も、みんな私の身体と同じ割合で、小さくなっています。ですから、私でも、その国でなら、充分自分で身を守ることもできるし、ちゃんと立派に生きてゆけるのです。」

私はこう言って、学者たちの見当違いを正してやつたつもりなのです。しかし、彼等はたゞニヤ／＼笑うばかりで、

「あんなうまいこと言うが、農夫から教え込まれたのだろう。」

と言ふのでした。

しかし、陛下はさすがに賢いお方でした。それで、学者たちを帰らすと、もう一度、私の旧主人の農夫を呼びにやられました。私の旧主人がやつて来ると、陛下はまず御自身で、彼にいろ／＼とお尋ねになりました。それから、その旧主人と私と娘と、三人に目の前で話させて御覧になりました。そして、これは私たちの言つてゐるところが、ほんとかもしれない、というふうにお考えになりました。

陛下は王妃に、私の面倒をよくみるよう言いつけられました。また、私とグラムダルクリッチが非常に仲好しなのを御覧になつて、私の世話はこの娘にやらせようと、お考えになりました。そこで彼女は宮中に便利な部屋を一つあてがわれました。そして、彼女の世話をするために、家庭教師の婦人が一人、それから、着物の世話をする女中が一人、いろんな雑用をする召使が一人、それだけが彼女に附き添うようになりました。けれども、私の世話は全部、グラムダルクリッチ一人がしてくれるのでした。

王妃は私がすっかりお気に入りで、私がいないと食事も召し上らないほどになりました。私は王妃の食卓の上に、ちょうどその左脇のあたりに、私のテーブルと椅子を置いてもらうのでした。グラムダルクリッチは、私のテーブルの近くの、床の上の腰掛の上に立つて、私の面倒をみてくれるのです。

私のためには、銀の皿が一揃い、そのほかいろんな品がありました。これも大きさは、王妃御自身のものにくらべると、ちょうど玩具屋にある人形のお家の食器類のようなものでした。私の食器はちゃんと銀の箱に入れて、乳母さんがポケットにしまつていて、食事のときになつて、欲しいというと、必ず自分で綺麗に拭いて、それから、私に渡してくれます。王妃と一しょに食事をするのは二人の王女だけで、姉の方は十六歳、妹は十三歳と一ヵ月でした。

王妃が肉を切つて、私の皿に入れてくださると、私は自分でさらに、それを小さく切つて食べます。この、まゝごとのような、私の食べ方が、王妃にはとても面白かつたのでしよう。というのは、王妃は、(少食の方でしたが)なにしろ、イギリスの百姓が十二人も食べられるほどのものを、一口に召し上るのです。実際この有様には、私

クリッチが取り出して日にあて、ちゃんと自分でとゝのえては、晩になると中に入れ、天井に錠をおろすのでした。

それから、小さい骨董品などをこしらえるので有名な一人の職人が、象牙みたんなもので、凭つかかりのついた椅子を二つ、引出つきのテーブルを二つ、作ってくれました。部屋は壁も床も天井も、蒲団が張りつめてありました。この寝室を提げて持ち歩くとき、中に入る私が怪我をするといけないし、また、馬車に乗せるときに、搖れるのを防ぐために、こうしてあるのです。

私は、鼠などの入つて来ないように、扉に鍵をつけてほしいと言いました。鍛冶屋は、いろ／＼工夫してみたうえで、これまでに類のないほど、小さな鍵を作ってくれました。イギリスにだつて、紳士の家の門などには、もっと大きなのがあるはずです。私はこの鍵は自分のポケットにしまつておくことにしました。あんまり小さいので、グラムダルクリッチに持たせては、失くするかもしれないと思ったからです。

王妃は一番薄い絹地で、私の洋服を作らせてくださいました。が、これはイギリスの毛布ぐらいの厚さで、馴れるまでにはずいぶん着心地の悪い服でした。仕立はすつかりこの国の型でしたが、ペルシャ服のようなどころもあれば、支那服にも似ていて、非常にきちんととしていて重々しいものでした。

王妃は私がすっかりお気に入りで、私がいないと食事も召し上らないほどになりました。私は王妃の食卓の上に、ちょうどその左脇のあたりに、私のテーブルと椅子を置いてもらうのでした。グラムダルクリッチは、私のテーブルの近くの、床の上の腰掛けの上に立つて、私の面倒をみてくれるのです。

私のためには、銀の皿が一揃い、そのほかいろんな品がありました。これも大きさは、王妃御自身のものにくらべると、ちょうど玩具屋にある人形のお家の食器類のようなものでした。私の食器はちゃんと銀の箱に入れて、乳母さんがポケットにしまつていて、食事のときになつて、欲しいというと、必ず自分で綺麗に拭いて、それから、私に渡してくれます。王妃と一しょに食事をするのは二人の王女だけで、姉の方は十六歳、妹は十三歳と一ヵ月でした。

王妃が肉を切つて、私の皿に入れてくださると、私は自分でさらに、それを小さく切つて食べます。この、まゝごとのような、私の食べ方が、王妃にはとても面白かつたのでしよう。というのは、王妃は、(少食の方でしたが)なにしろ、イギリスの百姓が十二人も食べられるほどのものを、一口に召し上るのです。実際この有様には、私

もとき／＼、やりきれない気持がしました。

王妃は、雲雀の翼を、骨ごとポリ／＼噛み砕いてしまわれますが、その翼の大きさは、七面鳥の翼の九倍からあるのです。それに、パンの一口分も、驚くほど大きなものです。

王妃は黄金の盃で、大樽一箇分以上の飲物を、一息にお飲みになります。それから、王妃のナイフの大きさは、大鎌の二倍もあります。スプーンもフォークも、それ／＼みな実に大きなものです。私はいつかグラムダルクリツチが、面白半分に宫廷の食卓につれて行つてくれたのを、おぼえていますが、こういう巨大なナイフやフォークが、十あまりも並んだ有様、こんな恐ろしい光景は、全く見たことがないと思いました。

この国では毎週、水曜日がお休みの日なので、この日には、両陛下はじめ、王子王女殿下も、国王陛下のお部屋で一しょに食事をされることがあります。私は今では国王陛下にも、すっかりお気に入りになつていて、この会食のときには、いつも私の椅子と食卓が、陛下の左手の塩壺の前に置かれました。

陛下は、私と話をするのがお好きで、ヨーロッパの風俗、宗教、法律、政治、学問などについて／＼、お質問になります。私もできるだけ、よくお答え申し上げるのでした。陛下は頭のいゝ方ですから、私の申し上げることが、すぐおわかりです。そして、なか／＼賢いことをおつしやいます。

けれども、一度こんなことがありました。私がイギリスのことや、貿易のことや、戦争や、政党のことを、あまり、いゝ気になつてしまつたところ、陛下は、右手に私をつまみ上げて、左の手で静かに私をなでながら、大笑いされました。それから、陛下の後に大きな白い杖を持つて控えている首相をかえりみて、こう言わされました。

「人間なんて、いくら威張つたところで、つまらないものではないか。このちっぽけな虫けらでさえ、まねができるのだからな。どうだ、こんな奴等にでも、位とか称号があるというし、家とか市とか呼ぶ、ちっぽけな巣や穴なども作るらしい。それに、お洒落をしてみたり、戦争してみたり、喧嘩したり、欺いたり、裏切つたりするというのだからな。」

と、大たいこんなふうな調子で言われましたので、自分の祖国がこんなに軽蔑されるのを聞いては、私は腹が立つて、顔が真赤になつてしましました。しかし、よく

／＼考へなおしてみると、私は陛下に恥をかゝされたのかどうか、あやしくなりました。というのは、私はこうして幾月か、この国民の姿や話しぶりに馴れ、見るものがみな、この国では人間の大きさに比例して大きい、ということがわかつたので、今では、もうはじめのように、その大きさに驚いたり恐れたりしなくなりました。ですから、今では、もしイギリスの貴族たちが晴着を着て、さも上品らしく、気どつた恰好で、歩いたり、おじぎをしたり、おしゃべりしているのを見たら、私はかえつて、噴き出すかもしれません。ちょうど、今この国の陛下や貴族が、私を笑つたように、私もまた、彼等を大いに笑つてやりたい気になるでしょう。

また実際、王妃がよく私を掌に乗せて鏡の前につれて行き、私たち両方の全身を一しょに映して見せるときなど、われながら微笑させられました。全くこの滑稽な比較には、私はなんだか自分の実際の身体が、ずっと小さく縮まつてくるような気がしました。

私が一番癪にさわり、悩まされたのは、王妃のところの侏儒でした。

彼は國中で一等背が低いので、（実際、三十五フィートに足りないようでした）自分よりさらに小さなものを見ると、急に高慢になつて、たとえば、私が王妃の次の間で貴族たちと話をしていると、彼はひどくふんぞり返つて、私のテーブルのそばを通つて行くのです。そして彼は、私の小さいことを、いつも一言一言いわねば気がすまないでした。私は彼に向つて、「おい、兄弟、相撲をとつてみようか。」と言つてやつたり、口でなんとかやりこめて、そんなことで仇討をしてやるのでした。

ある日、食事のとき、この意地悪小僧は、何か私の言ったことに、かつと腹を立てると、王妃の椅子の上に飛び上り、私の腰のあたりをつかんで、まるで見境もなく、いきなりクリームの入つた銀の鉢の中にはうりこむと、そのまま一散に逃げ出しました。私はまつ逆さに落されましたが、あのとき、もし泳げなかつたら大へんでした。ちょうど、グラムダルクリツチは、そのとき、部屋の向うの方に行つていましたし、王妃は驚きのあまり、私を助けることを忘れていました。私がしばらく鉢の中で泳ぎまわつていると、乳母さんが駆けつけて救い出してくれましたが、そのときはもうクリームをずいぶん飲んでいました。

私はさつそくベッドに寝かされました。まあ損害といったら、着物一着がすっかり駄目になつたことぐらいでした。侏儒はひどく鞭で打たれ、罰として鉢の中のクリームを全部飲まされることがあります。そしてその後、侏儒は王妃から愛想をつか

され、間もなく他の貴婦人にやつてしまわれました、だからそれつきり、二度と彼の顔を見なくてすんだので、私はほつとしました。

私は臆病者だといって、王妃からよくからかわれました。

そして、王妃は、お前の國の者はみんなそんなに臆病なの、とよくお聞きになります。それには、ちよつと訳があるので。この國では、夏になると、蠅が一ぱい出ます。ところが、その蠅というのが、雲雀ほどの大きさですし、この厭つたらしい虫が、食事中も、ぶん／＼耳許で唸りつづけるので私はちつとも落ち着けません。ときによると、食物の上にとまって、汚い汁や、卵を残してゆきます。ところが、この國の人たちの目には、それが一向に見えないので、私の目には実によく見えるのです。とき／＼、蠅は、私の鼻や額にとまって痛く刺したり、厭な臭を出します。

蠅の足の裏側には、ねば／＼したものがくつついてるので、それで、天井を逆さまに歩くことができるのだ、と、博物学者たちは言っていますが、私の目には、あのねば／＼したものまで、実にはつきり見えるのです。私はこの憎つたらしい動物から、身を守るために、大へん閉口しました。顔などにとまられると、思わず飛び上つたものです。ところが、侏儒の奴はいつもこの蠅を五六匹、ちようど、小学生がよくやるよう、手につかんで来では、いきなり私の鼻の先に放すのです。これは私を驚かして、王妃の御機嫌をとるつもりなのでした。私は飛んで来る奴をナイフで斬りつけるばかりでした。この私の腕前は、みんなからほめられました。

今でもよくおぼえていますが、ある朝、グラムダルクリッヂは、私を箱に入れたまゝ、窓口に載せておいたのです。これは天気のいい日なら、私を外気にあるため、いつもそうしていました。そこで、私は箱の窓を一枚あけて、食卓について、朝食のお菓子を食べていました。その匂に誘われて二十匹ばかりの地蜂が部屋の中に飛び込んで来ると、てんでに大きな唸りをたてました。

なかには私のお菓子をつかんで、粉々にしてさらつて行く奴もいるし、私の頭や顔の近くにやつて来て、ゴー／＼と唸つて脅す奴もいます。しかし、私も剣を抜いて彼等を空中に切りまくりました。四匹は打ちとめましたが、あとはみんな逃げ去つたので、私はすぐ窓を閉めました。この蜂は鷗鵠しやくじゆぐらいの大きさでした。針を抜き取つて見ると、一インチ半もあつて、縫針のようになに鋭いものでした。私はそれを大事にしまつておいて、その後、いろいろの珍品と一しょにイギリスに持つて戻りました。

こうで私はこの國の有様をちよつと簡単に説明しておきたいと思います。

この國は大きな半島になつていて、北東の方に高さ三十マイルの山脈がありますが、それらの山は頂上がみな火山になつてゐるので、そこから向うへ越すことはできないのです。だから、その向うには、どんな人間がいるのか、はたして人が住んでいるのかどうか、それはどんな偉い学者にもわからないのです。國の三方は海で囲まれていますが、港というものは一つもないのです。海岸には尖つた岩が一面に立ち並んでいて、海が荒いので舟で乗り出す人はいません。この國の人は他の國と行き来することはまるでないのです。大きな川には舟が一ぱい浮んでいて、魚類はたくさんいます。この國の人たちは海の魚はめつたに取りません。というのは、海の魚はヨーロッパの魚と同じ大きさなので、取つてもあまり役に立たないからです。しかし、とき／＼、鯨が巖にぶつかって死ぬことがあります。これは捕えて、みんな喜んで食べています。

この國は非常に人口が多くて、五十一の大都市と百近くの町や村落があります。國王の宮殿の建物は不規則に並んでいて、その周囲は七マイルあります。

グラムダルクリッヂと私には馬車が許されたので、これに乗つて、市内見物に出たり、店屋に行つたものです。私はいつも箱のまゝつれて行かれるのですが、街の家々や人々がよく見えるように、彼女はたび／＼、私を取り出して手の上に乗せてくれました。ある日、たま／＼馬車をある店先に停めると、それを見て乞食の群が、一せいに馬車の両側に集つて来ました。これは実にもの凄い光景でした。胸におできのできた女が一人いましたが、とても大きく脹れ上つていて、一面に孔だらけなのです。その孔というのが、私の身体など潜り抜けることができそうな奴です。だが何よりもたまらなかつたのは、彼等の着物を這いまわつてゐる虱でした。それがちようど、あのヨーロッパの虱を顕微鏡で見るときよりも、もつとはつきり肉眼で見えます。そして、あの豚のようになに喰ぎまわつてゐる鼻など、こんなものを見るのは、はじめてでした。

いつも私を入れて歩いていた箱のほかに、王妃は、旅行用として、小さい箱を一つ作らせてくれました。今までのは、グラムダルクリッヂの膝には少し大き過ぎたし、馬車で持ち運ぶにも少しかさばり過ぎたからです。この旅行用の箱は、正方形で、三方の壁に一つずつ窓があり、どの窓にも外側から鉄の針金の格子がはめてあります。一方の壁には窓がなくて、二本の丈夫な留金がついています。私が馬車で行くときには、乗手がこれに革帶を通して、しつかり腰に結びつけるのです。

こんなふうにして、私は國王の行列に加わったり、宮廷の貴婦人や大臣を訪問したりしました。というのも、両陛下のおかげで、私は急に大官たちの間で有名になつ

てきたからです。旅行中もし馬車にあきると、召使が彼の前の蒲団の上に箱を置いてくれます。そこで、私は三つの窓から外の景色を眺めるのでした。この箱には、折り畳みのできるベッドが一つ、ハンモックが一つ、椅子が二つ、テーブルが一つ、それ／＼、床板にねじで留めて、馬車が揺れても動かないようにしてありました。私は長い間、航海に馴れていたので、馬車の揺れるのも、わりに平気でした。

#### 4 猿にからかわれて

私は身体が小さいために、とき／＼、滑稽な出来事に会いました。

グラムダルクリッチは、よく私を箱に入れて、庭につれ出し、そしてときには、箱から出して手の上に乗せてみたり、地面を歩かせてみたりしていました。あるとき、それはまだあの侏儒が宮廷にいた頃のことですが、彼が庭までついてやつて來たのです。ちょうど、彼と私のすぐ傍に、盆栽の林檎の木がありました。この盆栽と侏儒を見くらべていると、なんだかおかしくなったので、私はちょっと、彼を冷やかしてやりました。すると、このいたずら小僧は、私が林檎の木蔭を歩いている隙をねらって、頭の上の木を揺さぶりだしました。たちまち、十あまりの林檎が頭の上に落ちかゝりましたが、これがまた酒樽ほどもある大きさなのです。かゞもうとするところへ、その一つが背中にあたり、私は前へのめてしましました。しかし幸いに怪我はなかつたのです。

ある日、グラムダルクリッチは、私を芝生の上におろして、ひとり遊ばしておき、自分は家庭教師と一しょに、少し離れたところを歩いていました。すると、にわかに猛烈な霰あられが降ってきて、私はたちまち地面にたゞきつけられました。霰はまるでテニスの球でも投げつけるように、全身に打ち込んでくるのです。しかしやつと四違になつて、レモンの木蔭に這い込み、私は顔を伏せていました。だが、頭のてっぺんから、足の先まで、傷だらけになつて、十日ばかりは外出もできなかつたのです。

しかし、これは少しも驚くことではないのです。この国では、何もかも同じ割合に大きいのですから、霰粒一つでもヨーロッパの霰の千八百倍はあります。これは、私がわざわざ秤にかけて計つてみたのですから、たしかです。

しかし、もつと危険な事が、この庭園で起つたことがあります。私は一人で考えごとをしたいので、とき／＼、一人にしてくれと頼むのですが、乳母さんは私を安全

な所へ置いたつもりで、ほかの人たちと一しょに、庭園のどこか別のところへ行つていました。ちょうど、その留守中のことでした。園丁が飼つているスペニエル犬が、どうしたはずみか、庭園に入り込んで来て、私の寝ている方へやつて來たのです。私の匂を嗅ぎつけると、たちまち飛んで来て、私をくわえると、尻尾を振りながら、ドン／＼、主人のところへ駆けつけて行つて、そつと、私を地面に置きました。運よく、その犬は、よく仕込まれていたので、歯の間にくわえられながらも、私は怪我一つせず、着物も破れなかつたのです。

だが、園丁はすつかりびっくりしてしまい、私をそつと両手に抱き上げて、怪我はなかつたかと尋ねます。彼は私をよく知つていて、前から私にはいろ／＼親切にしてくれていた男です。けれども、私は驚きで息切れがしてしまつていて、まだなか／＼口がきけません。それから、二三分して、やつと私が落ち着くと、彼は乳母のところへ、私を無事にとゞけてくれました。

乳母は、さきほど私を残しておいた場所に戻つてみると、私がいないし、いくら呼んでみても、返事がないので、気狂のようになつて探しまわつていたところでした。それで、今、園丁を見つけると、

「そんな犬飼つておくのがいけないです。」

これは面白かつたとも、癪にさわつたともいえることなのですが、私が一人で歩いていると、小鳥でさえ、私を怖がらないのです。まるで、人がいないときと同じように、私から一ヤードもないところを、平気で、虫や餌を探して、跳びまわつていました。あるときなど、一羽のつぐみが、実にずう／＼しいつぐみで、私がグラムダルクリッチからもらつた菓子を、ひよいと、私の手からさらつて行つてしましました。捕えてやろうとすると、相手はかえつて私の方へ立ち向つて来て、指を啄こうとします。それで、私が指を引っ込むと、今度は、平気な顔で、虫やかたつむりをあさり歩いていました。

だが、ある日とう／＼、私は太い棍棒を持ち出して、一羽の紅雀めがけて力一ぱい投げつけると、うまく命中して、相手は伸びてしましました。でさつそく、首の根つ子をつかまえ、乳母のところへ喜び勇んで、持つて行こうとしました。

ところが、鳥はちょっと目をまわして気絶していただけなので、じきに元気を取り戻すと、両方の翼で、私の顔をポカ／＼なぐりだしました。爪で引っ搔かれないと

うに、私は手をずっと前へ伸してつかまえていたのですが、よっぽどのことで、もう放してしまおうかと思ったのです。しかし、そこへ、召使の一人がかけつけて来て、鳥の首をねじ切つてしましました。そして翌日、私はそれを料理してもらつて食べました。

王妃は、私から航海の話を聞いたり、また私が陰気していると、いつもしきりに慰めてくださるのでしたが、あるとき私に、帆やオールの使い方を知つているか、少し舟でも漕いでみたら、健康によくはあるまいか、とお尋ねになりました。

私は、普通の船員の仕事もしたことがあるので、帆でもオールでも使えます、とお答えしました。だが、この国の船では、どうしたものか、それはちょっとわかりませんでした。一番小さい舟でも、私たちの国的第一流の軍艦ほどもあるので、私に漕げるような船は、この国の川に浮べられそうもありません。しかし王妃は、私がボートの設計をすれば、お抱えの指物師にそれを作らせ、私の乗りまわす場所もこさえてあげる、と言われました。

そこで、器用な指物師が、私の指図にしたがつて、十日かゝつて、一艘の遊覧ボートを作り上げました。船具も全部そろつていて、ヨーロッパ人なら、八人は乗れそうなボートでした。それが出来上ると、王妃は非常に喜び、そのボートを前掛に入れ、国王のところへかけつけました。国王は、まず試しに、私をそれに乗せて、水桶に水を一ぱい張つて浮かせてみよ、と命じられました。しかし、そこの水桶では狭くて、うまく漕げませんでした。

ところが、王妃は、ちゃんと前から、別の水槽を考えていたのです。指物師に命じて、長さ三百フィート、幅五十フィート、深さ八フィートの、木の箱を作らせ、水の漏らないように、うまく目張りして、宮殿の部屋の壁際に置いてありました。水は、二人の召使が、半時間もかゝればすぐ一ぱいにすることができます。そして、その箱の底には栓があつて、水が古くなると抜けるようになつていきました。

私はその箱の中を漕ぎまわつて、自分の気晴しをやり、王妃や女官たちを面白がらせました。彼女たちは、私の船員姿を大へん喜びます。それにつき、帆を上げると、女官たちが扇で風を送つてくれます。私はたゞ舵をとつていればいいわけでした。彼女等があおぐのに疲れると、今度は侍童たちが口で帆を吹くのです。すると、私はおも舵を引いたり、とり舵を引いたりして、思うまゝに乗りまわすのでした。それがすむと、グラムダルクリンチは、いつも私のボートを自分の部屋に持つて帰り、釣にかけて、かわかすのでした。

この水箱は、三日おきに水を替えることになつていました。あるとき、水を替える役目の召使が、うつかりしていて、一匹の大蛙を手桶から一しょに流し込んでしまいました。はじめ、蛙はじつと隠れていたのですが、私がボートに乗り込むと、うまい休み場所が出来たとばかりに、ボートの方に這い上つて来ました。船はひどく一方へ傾くし、私はひつくりかえらないよう、その反対側によつて、うんと力を入れていなければなりません。

いよ／＼ボートの中に入り込んで来ると、いきなりボートの半分の長さを、ひよいと飛び越し、それから私の頭の上を前や後へしきりに飛び越えるのです。そしてそのたびに、蛙はあの厭な粘液を、私の顔や着物に塗りつけるのです。その顔つきの大きな／＼といったら、こんな醜い動物が世の中にいたかと驚かされます。しかし、私がオールの一本を取つて、しばらく打ちのめしてやつていてうちに、蛙はとう／＼、ボートから飛び出でてしまいました。

私がこの国で一番あぶない目に会つたのは、宮廷の役人の一人が飼つていた猿が、私にいたずらしたときのことです。

ある日、グラムダルクリンチは、用たしに出かけて行くので、私の箱を自分の部屋に入れて、鍵をおろしておきました。大へん暑い日でしたが、部屋の窓は開け放しになつており、私の住まつている箱の戸口も窓も、開け放しになつていました。私が机に向つて、静かにものを考えていると、何か窓から飛び込んで、部屋の中をあちこち歩きまわるような音がするのです。私はひどく驚きましたが、じつと椅子に坐つたまゝ、見つめました。

今、部屋に入つて来た猿は、いゝ気になつて、はねまわつてゐるのでした。そのうちに、とう／＼猿は私の箱のところへやつて来ました。彼は、この箱がよほど気に入つたのか、さも面白く珍しそうに戸口や窓から、いぢ／＼のぞきこむのです。

私は箱の一番奥の隅へ逃げ込んでいましたが、猿が四方からのぞきこむので、怖くてたまりません。すつかりあわてゝいたので、ベッドの下に隠れることにも気がつかなかつたのです。猿は、のぞいたり、歯を向き出したり、ムニヤ／＼しゃべつたりしていましたが、とう／＼私の姿を見つけると、ちようどあの猫が鼠にするように、戸口から片手を伸してきました。私はうまく避けまわつてゐたのですが、とう／＼上衣の垂れをつかまれて、引きずり出されました。

彼は私を右手で抱き上げると、ちようどあの乳母が子供に乳房をふくませるよう

な恰好で私をかゝえました。私があがけばあがくほど、猿は強くしめつけるので、これは、じつとしていた方がいゝと思いました。一方の手で、猿は何度も、やさしげに私の顔をなでてくれます。てっきり私を同じ猿の子だと感違いでいるのでしょうか。こうして、彼がすつかりいゝ気持になっているところへ、突然、誰か部屋の戸を開ける音がしました。すると、彼は急いで窓の方へ駆けつけ、三本足でとつと歩きながら、一本の手では私を抱いたまま、樋を伝つて、とう／＼隣りの大屋根までよじのぼつてしましました。

猿が私をつれて行くのを見ると、グラムダルクリッヂは「キャシ」と叫びました。彼女は気狂のようになつてしましました。それから間もなく、宫廷は大騒ぎになつたのです。召使は梯子を取りに駆けだしました。猿は屋根の上に腰をおろすと、まるで赤ん坊のように片手に私を抱いて、顎の袋から何か吐き出して、それを私の口に押し込もうとします。

そして今、屋根の下では数百人の人々が、この光景を見上げているのです。私が食べまいとすると、猿は母親が子をあやすように、私を軽く叩くのです。それを見て、下の群衆はみんな笑いだしました。実際、これは誰が見ても馬鹿々々しい光景だつたでしよう。なかには猿を追うつもりで、石を投げるものもいましたが、これはすぐ禁じられました。

やがて梯子をかけて、数人の男がのぼつて来ました。猿はそれを見て、いよ／＼囲まれたとわかると、三本足では走れないでの、今度は私を瓦の上に残しておいて、一人でさつと逃げてしましました。私は地上三百ヤードの瓦の上にとまつたまゝ、今にも風に吹き飛ばされるか、目がくらんで落ちてしまうか、まるで生きた心地はしませんでした。が、そのうちに召使の一人が、私をズボンのポケットに入れて、無事に下までおろしてくれました。

私はあの猿が私の咽喉に無理に押し込んだ何か汚い食物のため、息がつまりそうでした。しかし、私の乳母が小さい針で一つ／＼それをほじくり出してくれたので、やつとらくになりました。だが、ひどく身体が弱つてしまい、あの動物に抱きしめられていたため、両脇が痛くてたまりません。私はそのため二週間ばかり病床につきました。王、王妃、そのほか、宫廷の人たちが、毎日見舞いに来てくれました。猿は殺され、そして今後こんな動物を宫廷で飼つてはならないことになりました。

病気が治ると、私は王にお礼を申し上げに行きました。王はうれしそうに、今度

のことをさんざ、おからかいになるのでした。猿に抱かれていた間どんな気持がしたか、あんな食物の味はどうだったか、どんなふうにして食べさすのか、などお尋ねになります。そして、あんな場合、ヨーロッパではどうするのか、と言われます。そこで、私は、

「ヨーロッパには猿などいません。いてもそれは物好きが遠方からつかまえて来たもので、そんなものは実に可愛らしい奴です。そんなのなら十二匹ぐらい束になつてやつて来ても、私は負けません。なに、この間のあの大きな奴だつて、あれが私の部屋に片手を差し込んだとき、あのときも私は平気だつたのです。私がほんとに怖いと思つたら、この短剣で叩きつけます。そうすれば、相手に傷ぐらい負わせて、手を引っ込めさせたでしよう。」

と、私はきつぱり申し上げました。  
けれども、私の言うことに、みんなはどつと噴きだしてしまいました。これで私はつ／＼考えました。はじめから問題にならないほど差のある連中の中で、いくら自分を立派に見せようとしても駄目だということがわかりました。

国王は非常に音楽が好きで、だから、よく宫廷では音楽会がありました。私もとき／＼、つれて行かれて、テーブルの上に箱を置いてもらつて聞いたのですが、なにしろ大へんな音で、曲も何もわからないのです。軍楽隊の太鼓とラッパをみんな持つて来て耳許で鳴らすより、もっと凄い騒がしさです。ですから、私はいつも一番遠いところに箱を置いてもらい、扉も窓もすつかり閉め、カーテンまでおろします。そうすると、それでまず、どうにか聞けるのでした。

国王はまた非常に賢い方でしたが、よく私を箱のまゝつれて来て、陛下のテーブルの上に置かれます。私は椅子を一つ持つて、箱から出で来ると、陛下の近くの簾笥の上に坐ります。そこで、私の顔と陛下の顔が向い合いになります。こんなふうにして、私たちは何度も話し合いましたが、ある日、私は思いきつて、こんなことを申し上げました。

「一たい陛下がヨーロッパなどを軽蔑なさるのは、どうも賢い陛下に似合わぬことのようです。智恵はなにも身体の大きさによるものではありません。いや、あべこべの場合だつてあるようです。蜜蜂とか蟻とかは、ほかのものと大きな動物たちよりも、はるかに勤勉で、器用で、利口だと言われています。私なども、陛下は取るに足りない人間だとお考えでしようが、これでも、いつか素晴らしいお役に立つかもしれませ

h<sub>o</sub>

「それではひとつ、イギリスの政治について、できるだけ正確に話を聞いておられましたが、前よりよほど私をよくわかつてくださるようでした。そして、

「それではひとつ、イギリスの政治について、できるだけ正確に話してもらいたい。」  
と仰せになりました。

そこで、私はわが祖国の議会のこと、裁判所のこと、人口について、宗教について、或いは歴史のことまで、いろいろとお話し申し上げることになりました。私は王に何回もお目にかゝって、毎回数時間、この話をお聞かせしたのですが、王はいつも非常に熱心に聞いてくださいました。そして、ノートには、一つ一つ、後で質問しようと思われるところや、私の話の要点を書き込んでおられました。

ある日、私は王の御機嫌をとるつもりで、こんなことを申し上げました。

一 実は私は素晴らしいことを知っているのです というのは 今から三四百年前に ある  
粉が発明されました が その製造法を私はよく知っているのです まず この粉とい  
うのは それを集めておいて これに ほんのちよびりでも火をつけてやると たとえ  
山ほど積んである物でも たちまち火になり 雷よりももつと大きな音を立てゝ 何  
かも空へ高く吹き飛ばしてしまいます。

でもし、この粉を真鎗か鉄の筒にうす

で、もし、この粉を真鍮か鉄の筒にうまく詰めてやると、それは恐ろしい力と速さで遠くへ飛ばすことができるのです。こういうふうにして、大きな奴を打ち出すと、一度に軍隊を全滅させることも、鉄壁を破つたり、船を沈めてしまうこともできます。また、この粉を大きな鉄の球に詰めて、機械仕掛けで敵に向つて放つと、舗道は砕け、家は崩れ、かけらは八方に飛び散つて、そのそばに近づくものは、誰でも脳味噌を叩き出されます。

私はこの粉を、どういうふうにして作つたらいいか、よく心得ているのです。で、職人たちを指図して、この国で使えるぐらいの大きさに、それを作らせる」ともできます。一番大きいので長さ百フィートあればいいでしょうが、こうした奴を二三十本打ち出すと、この国の一一番丈夫な城壁でも、二三時間で打ち壊せます。もし首都が陛下の命令に背くような場合は、この粉で首都を全滅させることだってできます。そこから、私は陛下の御恩ご報いを思つてゐるので、こんなふうを申上げる次

私がこんなことを申し上げると、国王はすっかり、仰天してしまわれたようです。

5 鶯にさらわれて

私は、いつかは自由の身になりたい、という気持を、いつも持っていました。しかし、どうしたら自由になれるのか、それはまるでわかりませんでした。私にできそうな工夫はてんで見つからないのです。この国の海岸に吹きつけられた船は、後にも前にも私の乗つて来た船のほかに、誰も見たことはありません。しかし国王は、もし万一家たほかの船が現れたら、すぐ海岸へ引っ張つて来て、船長や乗客を手押車に乗せてつれて来るようによく、言い渡されていました。

国王は、私に私と同じ大きさの女を妻にさせて、私たちの子供をふやしてみたい、と熱心に望まれていました。しかし私は、馴れたカナリヤのように籠の中で飼われたり、国中の貴族たちの慰みに売られるために、子供をつくるくらいなら、そんな恥かしい目に会うよりか、死んだ方がましだと思っていました。それに、国に残してきた家庭のことも忘れることができませんでした。もう一度、気楽に話のできる人間の中に帰り、街や野を歩くときも、蛙や犬の子みたいに踏みつぶされる心配なしに歩きたかったのです。しかし私は、たま／＼思いがけないことから、全くうまく、この国を離れることができたのです。それを次にお話しいたしましょう。

それは私がこの国へ来て二年が過ぎ、ちょうど三周年のはじめ頃のことでした。グラムダルクリツチと私は、国王と王妃のお供をして、南の海岸の方へ行きました。私はいつものように、旅行用の箱に入れられていました。ハンモックを天井の四隅から綱

そして呆れ返った顔つきで、こう仰せになりました。

糸で吊し、旅行中はよくこれで眠ることにしました。

いよ／＼海岸に着くと、国王はその海岸からあまり遠くないところにある離宮

れでいても、すぐ見つけ出すので、私が箱の中にいる」とも、ちゃんともう知っている  
にちがいありません。

しばらくして、羽音が烈しくなったかと思うと、箱はまるで風の中の看板のようにはく揺れだしました。と今度は何かズシンと驚くぶつかる音がして、突然、私はまっ逆さまに落ちて行くのを感じました。恐ろしい速さで、ほとんど息もできないくらいでした。それから一分ぐらいたつと、私の耳にはゴー／＼とナイガラの滝のような音がして、何か凄いものに箱がぶつかっているように思えました。ふと、落ちてゆくのがやんだかとおもうと、あたりは真暗になりました。

て行つてくれる」とになりました。しかし、グラムダルクリツチは、私が海へ行くのを喜びませんでした。別れるとき、彼女は何か虫が知らせるのか、しきりに涙を流していました。

侍童は、私を箱に入れて、宮殿から半時間ほどの道を歩いて、海岸の岩のところへ来ました。私は頼んで下におろしてもらうと、窓を一枚開けて、海の方をじっと眺めていました。そのうち、少し気分が悪くなつたので、ハンモックの中で昼寝してみたいと侍童に言いました。すると、彼は寒気の入らないように、窓を閉めてくれました。私はハンモックの中で、すぐ眠りに陥りました。

ところで、侍童は私が眠っている間に、まさか危険も起るまいと思って、岩の間へ鳥の卵でも探しに出かけたらしいのです。というのは私が眠る前から、彼は卵を探していました。それはともかくとして、私がふと箱の中で目をさまして見ると、驚きました。箱の上についている鉄の環を誰かぐい／＼引っ張っているのです。と、つづいて私の箱は空高く引き上げられ、猛烈な速さで前へ走つて行くような気がしました。はじめ私は、ハンモックがひどく揺れて、落っこちそうになりましたが、その後はずつと静かになりました。二三度声を張り上げて呼んでみましたが、誰も答えてくれません。窓の方へ目をやつて見ると、目にうつるものは雲と空ばかり、そして私のすぐ頭の上で、何か羽ばたきのような物音が聞えるのでした。

で、私は自分がどんなことになつてゐるのか、わかりかけました。今、一羽の鷺が、私の箱をくわえているのですが、これはちよどあの亀の子をつかまえたときするよう、やがて箱を岩の上に落して割り、私の身体をほじくり出して食うつもりなのでしょう。というのは、鷺はよく臭を嗅ぎつける鳥ですから、たとえ獲物が上手に隠

それから、そろ／＼と箱は引き上げられるようでした。私はステッキの先のハンカチを振り、声をかぎりに呼んでみました。すると、それに答えて大きな叫び声が二三度繰り返されました。やがて頭の上で足音がしたかとおもうと、誰か穴の口から大声で、

「誰かいるなら返事をしろ。」

となりました。相手は英語で言つてくれてます。

「私はイギリス人です。今こゝでひどい目に会つてます。何とかうまく助け出してください。」

と、私は一生懸命、頼みました。

「もう大丈夫だ。箱は本船にくゝりつけたし、今すぐ大工が屋根に穴をあけて出しへやるから。」

と外では言つています。

「そんなことしなくてもいいのですよ。それより早く誰かチョイとこの箱を指でつまみあげて、船長室へ持つて行ってください。」

私がこう答えると、船員たちは私を氣狂だと思つたらしく、大笑いしていました。大工がやつて来て、箱に穴をあけ、そこから私は救い出され、本船に移されました。

船員たちはみな驚いて、いろんなことを尋ねますが、私はもう答える気もしないのでした。こんな大勢の小人を見て、私の方も驚いてしまったのです。なにしろ長い間、あの大きな人間ばかり見つけてきたので、船長たちが小人のように思えるのです。私が今にも気絶しそうな顔をしてるので、船長は気つけ薬を飲ませてくれました。それから船長室に私をつれて行き、「まあ一寝入りしなさるんですね。」と言つてくれました。

私は数時間眠つて、すつかり元気を取り戻しました。起きたのは夜の八時頃でした。船長は、私が長い間食事をしていないだろうと思って、すぐ晩食を言つけてくれました。私がもう気狂じみた目つきをしたり、変なことをしゃべらなくなつたのを見ると、彼は大へん親切してくれました。一たいどこへ行つたのか、またどうしてあんな大きな箱に入れられて流されたのか、ひとつ話してくれと言います。

船長の話では、正午頃、望遠鏡をのぞいてみると、家が泳いでいるは船だと思つたそうです。それからボートを出して近づいてみると、家が泳いでいるというので、みんなびっくりしました。本船の方へ引っ張り上げようとしていると、ち

ようどそのときハンカチのついた棒を穴から突き出す者があるので、これはきっと誰か不幸な人間がとじこめられているにちがいない、と思つたのだそうです。

「それでは一番はじめ私を見つけた頃、何か大きな鳥でも空を飛んでいるのを見かけなかつたでしようか。」

と私は尋ねてみました。

「あ、あのとき、鷺が三羽北を指して飛んでいました。でも別に普通の鷺と変ったところはなかつたようです。」

と一人の船長が答えました。

だが、それは非常に高く飛んでいたので、小さく見えたのでしょう。どうも私の尋ねたり言つたりすることは、みなに合点がゆかないようでした。私はイギリスを出発したときから、今までのことを、ありのまゝ話して聞かせました。それから、あの国で集めた珍しい品を見せてやりました。王の鬚で作った櫛や、王妃の親指の爪を台にして作った櫛や、一フートもある縫針や、地蜂の針や、王妃の金の指輪や、そのほか、いろいろのものを取り出して見せてやりました。

この船はトンキンを行つて、いまイギリスへ帰る途中なのでした。航海は無事にすみ、一七〇六年六月三日に故国の港に戻りました。そこで、私は船長に別れを告げると、家の方へ向いました。

途々、小さな家や、木や、家畜や、人間などを見ると、なにカリリ。バツトヘでも来たような気がします。行き会う人ごとに、なんだか踏みつけそうな気がして、私は、「退け！ 退け！」

ととなりつけました。

私の家へ帰つてみると、召使の一人が戸を開けてくれましたが、私はなんだか頭をぶつけそうな気がして、身体をかゞめて入りました。妻が飛んでやつて来ましたが、私は彼女の膝より低くかゞんでしまいました。娘もそばへやつて来ましたが、なにしろ長い間、大きなものばかり見なれた眼には、ヒヨイと片手で娘をつかんで持ち上げたいような気がしました。召使や友人たちも、みんな私には小人のように思えるのでした。こういう有様ですから、はじめ人々は、私を気が違つたものと思いました。しかし間もなく、私もこゝに馴れて、家族とも友人とも、お互にわかり合うことができました。

## 1 変てこな人たち

私が家に戻ると間もなく、ある日、『ホーブウェル号』の船長が訪ねて来ました。それからたび／＼彼はやつて来るようになりましたが、いろ／＼話し合っているうちに、私はまた、船に乗つてみたくなつたのです。これまで私はずいぶん苦しい目にも会いましたが、それでも、まだ海へ出て外国を見たいという気持が強かつたのです。

そこで、私は一七〇六年八月五日に出帆し、翌年の四月十一日にフォート・ゼン・ジョージ(インドの港)に着きました。それから、トンキンに行つたのですが、ここで、私は船長と別れて、別の船に乗り、十四人の船員をつれて出帆しました。

出帆して三日もたつないうちに、暴風雨に会い、船は北へ東へと、流されていました。その後、天気がよくなつたかと思うと、私たちの船は二隻の海賊船に見つかり、たちまち追いつかれてしまいました。

海賊どもは、両方の船から、一せいに乗り込んで来ました。海賊どもは、恐ろしいけんまくで、手下の先頭に立つて入つて来ましたが、私たちがおとなしくひれ伏しているのを見ると、丈夫な縄で、一人残らずしばりあげ、番人を一人つけておいて、そのまま彼等は船中を探しに行きました。

海賊の中に、一人のオランダ人がいましたが、私たちを今に海の中にはうりこんでやるぞ、と言つていました。海賊船の一隻の方は、日本人が船長でした。その男は私どところへやつて来て、いろんな質問をするので、私は一つ／＼、ていねいに答えました。すると彼は、命だけは助けてやる、と言いました。やがて、私は小さな舟に一人乗せられ、八日分の食物を与えられ、そして、どこへでも一人で勝手に行くがいゝ、と海へ放されました。

海賊船を離れて、しばらく行くと、私は望遠鏡で島影を五つ六つ見つけました。そこでとにかく一番近い島へ漕ぎつけるつもりで、帆を張りました。すると三時間ばかりで、その島へ着きました。見ると、海岸は岩だらけなのです。だが、鳥の卵がたく

さん見つかったので、火をおこして枯草を燃やし、卵を焼いて食べました。その晩は、岩の陰に木の葉を敷いて寝ましたが、よく眠れました。

翌日は次の島へ渡りました。それからまた次々へと渡つて行きました。そして五目に、私はまだ見残していた島の方へ向いました。

その島は、思ったより遠く、渡るのに、五時間もかかりました。私はぐるりと島を一まわりしてみて、上陸するのに都合のいゝ所を見つけました。

上つてみると、あたりは岩だらけで、たゞ、ところ／＼に、雑草や、香のいゝ薬草などが生えています。私は食物を取り出して、腹ごこしらえをすると、残りは洞穴の中にしまつておきました。それから岩の上で卵を拾つたり、乾いた枯草を集めました。私は明日はひとつ、これに火をつけて、卵を焼いておこうと思いました。その夜は、食物をしまいこんだ洞穴に入つて、拾い集めた枯草の上で寝ました。けれども、私は心配でなか／＼眠れなかつたのです。

こんな無人島で、どうして生きてゆけるでしょう。いざれ私はみじめな死に方をしなければならないのです。こんなことを考えていると、私はぐつたりしてしまつて、立ち上る元気も出なかつたのです。それでも、気を取りなおして、やつと洞穴から這い出ましたが、そのときには、もう日が高くのぼつていました。私はしばらく、岩の間を歩きまわりました。

空には雲一つなく、太陽がギラ／＼照りつけるので、まぶしくて顔をそむけていました。

そのときでした。突然、あたりが暗くなつたのです。しかも、これは太陽が雲にさえぎられたときの暗さとは違つていました。振り返つて見ると、これはまたどうしたことがでしよう。今、私と太陽との間に、何か途方もなく大きなものが、ずん／＼島の方へ向つて進んで来るのでした。高さは二マイルばかりありそうでした。そして、六七分間というものは、すっかり、太陽を隠してしまいました。

やがて、その物は私の真上に来ましたが、見ると、どうもそれは固い塊りのようで、底の方が平くなつてゐるのです。ちょうどそのとき、私は二百ヤードばかりの高い丘の上に立つてゐたのですが、やがて、その大きな物はずん／＼下にさがつて来ました。そして、私から一マイルとは離れていない眼の前に見えて來たのです。私はさつそく、望遠鏡を取り出して眺めました。その物体の斜面には、たくさんの人間が上下に動きまわつてゐるのです。その姿がはつきりと見えるのです。たゞ、何をしているのか

は、わかりませんでした。

私は、今、空に浮んでいるその島が、どちら側へ動きだすかと、じつと眺めています。が、間もなく、島はこちらの方へ近づいて来たのです。見ると、その側面には、通路が何段にも分れていて、ところ／＼に階段があつて、のぼりおりできるようになっています。一番下の通路では、数人の男が長い釣竿で魚釣をしているし、それをそばから眺めている男もいます。

私はその島に向つて、帽子とハンカチを振りましたが、いよいよ近づいて来たので、声をかぎりに叫んでみました。そのうちに、向うでは、私の一番よく見える側へ、人々がぞろ／＼集つて来ました。そして、彼等は今しきりに私の方を指さしながら、互に顔を見合せているのです。と、四五人の男が階段を駆け上つて行つたかと思うと、そのまま見えなくなりました。これはきっと誰か偉い人のところへ私のことを告げに行つたのだろう、と私は考えました。そして、それはそのとおりでした。

人の数が次第にふえてきました。それから半時間ばかりすると、島は上方へのぼつて行き、一番下の道路が、私の立つている丘から、百ヤードぐらいのところに、正面に見えてきました。私は一生懸命、救いを求めるように話しかけてみましたが、何とも答えてくれません。私のすぐ前に立つている人々は、その身なりで、偉い方らしく思われました。私の方を見ては、何かしきりに相談しているようでしたが、ついに、その一人が、上品な言葉で、何か呼びかけました。私もさつそく、返事しました。が、どちらも、言葉はまるで通じません。たゞ、私がひどく困つてゐることだけは、身振りで、わかつてくれました。

相手は私に、岩からおりて海岸の方へ行け、と合図しました。で、私はそのとおりに立つているのが、どうも上流の人々のようでした。彼等は私を眺めて、ひどく驚いている様子でしたが、私の方も、すっかり驚いてしまつたのです。なにしろ、その恰好も、服装も、こんな奇妙な人間を私はまだ見たことがなかつたからです。彼等の頭はみんな、左か、右か、どちらかへ傾いています。目は、片方は内側へ向き、もう一方は真上を向いています。上衣は、太陽、月、星などの模様に、提琴、

横笛、堅琴、喇叭、六弦琴、そのほか、いろんな珍しい楽器の模様を交ぜています。

それから、召使の服装をした男たちは、短い棒の先に、膀胱をふくらませたものをつけて持ち歩いています。そんな男たちも、だいぶいました。これはあとで知つたのですが、この膀胱の中には、乾いた豆と小石が少しばかり入っています。

ところで、彼等は、この膀胱で、傍に立つてゐる男の口や耳を叩きます。これは、この国の人間は、いつも何か深い考えごとに熱中しているので、何か外からつゝいてやらねば、ものも言えないし、他人の話を聞くこともできないからです。そこで、お金持は、叩き役を一人、召使としてやつておき、外へ出るときには、必ずついて行きます。召使の仕事というのは、この膀胱で、主人やお客様の耳や口を、静かに代る／＼、叩くことなのです。また、この叩き役は主人に附き添つて歩き、とき／＼、その目を軽く叩いてやります。というのは、主人は考えごとに夢中になつていて、うつかりして、崖から落つこちたり、溝にはまりこんだりすることもあるかもしれませんからです。

ところで、私はこの国の人々に案内されて、階段を上り、島の上の宮殿へつれて行かれたのですが、そのとき、私は、みんなが何をしているのか、さっぱり、わかりませんでした。階段を上つて行く途中でも、彼等は考えごとに熱中し、ぼんやりしていました。そのたびに、叩き役が、彼等をつゝいて、気をはつきりさせてやりました。

私たちは宮殿に入つて、国王の間に通されました。見ると、国王陛下の左右には、高位の人たちが、ずらりと並んでいます。王の前にはテーブルが一つあつて、その上には、地球儀や、そのほか、種々さまざま／＼の数学の器械が一ぱい並べてあります。なにしろ今、大勢の人などが／＼と入つたので、騒がしかつたはずですが、陛下は一向、私たちが来たことに気がつかれません。陛下は今、ある問題を一心に考えておられる最中なのです。私たちは、陛下がその問題をお解きになるまで、一時間ぐらい待つていていました。

陛下の両側には、叩き棒を待つた侍童が、一人ずつついています。陛下の考えごとが終ると、一人は口許を、一人は右の耳を、それ／＼軽く叩きました。すると陛下は、まるで急に目がさめた人のように、ハツとなつて、私たちの方を振り向かされました。それでやつと、私たちの来たことを気づかれたようです。陛下が、何か一言二言言われたかとおもうと、叩き棒を持つた若者が、私の傍へやつて来て、静かに私の耳を叩きはじめました。私は手まねで、そんなものは要らないということ

を伝えてやりました。

陛下はしきりに何か私に質問されているらしいのでした。で、私の方もいろんな国語の言葉で答えてみました。けれども、向うの言うことわからなければ、こちらの言うこともまるで通じません。

それから、私は陛下の命令で宮殿の一室に案内され、召使が二人、私に附き添いました。やがて、食事が運ばれてきました。そして、四人の貴族たちが、私と一しょにテーブルに着きました。食事中、私はいろんな品物を指さして、何という名前なのか、聞いてみました。すると、貴族たちは、叩き役の助けをかりて、喜んで答えてくれました。私は間もなく、パンでも、飲物でも、欲しいものは何でも言えるようになりました。

食事がすむと、貴族たちは帰りました。そして今度は、陛下の命令で来たという男が、叩き役をつれて、入つて来ました。彼はパン、インキ、紙、それに、三四冊の書物を持って来て、言葉を教えに来たのだと手まねで言います。私たちは、四時間一緒に勉強しました。私はたくさん言葉を縦に書き、それに訳を書いてゆきました。短い文章も少しあげました。

それにはまず先生が、召使の一人に、「何々を持つて来い。」「あつちを向け。」「おじぎ。」「坐れ。」「立て。」というふうに命令をします。すると私は、その文章を書きつけるのでした。それから今度は本を開いて、日や月や星や、そのほか、いろんな平面図、立体図の名を教えてくれました。先生は、また、楽器の名前と音楽の言葉を、いろいろ教えてくれました。こんなふうにして、二三日すると、私は大たい彼等の言葉がどんなものであるか、わかつてきたのです。この島は『ラピュタ』といいます。私はそれを『飛島』『浮島』などと訳しておきました。

私の服がみすぼらしいというので、私の世話人が、翌朝、洋服屋を呼んで来ました。ところが、その洋服屋のやり方が、ヨーロッパの寸法の取り方とは、まるで違うのでした。彼は定規とかコンパスで、私の身体をはかり、いろんな数学上の計算を紙の上に書きとめました。そして、服は六日目に出来上りましたが、その恰好はてんでなつていいのでした。なんでも、計算の数字を間違えたのだそうです。しかし、そんな間違いはいつもあることで、誰も気にするものはないというので、私も少し安心しました。

私は病気で五六日引きこもつていましたが、その間に、だいぶこの国の言葉を勉強

しました。それで、その次に宮廷へ行つたときには、国王の言うこともわかれ、いくらか返事をすることができました。

陛下は、この島を、北東々に進ませて、ラガード（下の大地にある、この国の首都）の上に持つてゆくよう、お命じになりました。ラガードは約九十九リーグほど離れていたので、この旅行には四日半かかりました。旅行中、この島が空中を進行しているような気配はちよつとも感じられないのでした。三日目の朝、十一時頃、国王は自ら貴族、廷臣、役人などを従えられ、それ／＼樂器の調子をとゝのえると、それから三時間、休みなしに演奏されました。騒々しくて、私はもう耳がつんぱになりました。

首都ラガードへ行く途中、陛下は、ところ／＼の町や村の上に、この島をとめるよう、お命じになりました。これは、それ／＼、人民の訴え／＼とを、お聞きになるためでした。小さい錘のついた紐が、この島からおろされると、下にいる人民は、それに手紙をくりつけます。そして、組はすぐまた吊り上げられます。ちょうど、子供が帆の糸の端に、紙片を結びつけるようなものです。ときには、下から持つて来る酒や飲料が、滑車でこの島へ引き上げられることもあります。

この国の人たちは、家の作り方が非常に下手です。壁はゆがみ、どの室も直角になつていないので。彼等は、定規や鉛筆で書く紙の上の仕事は大へんもつともらしいのですが、実地にやらしてみると、この国の人間ぐらい、下手で不器用な人間はいません。彼等は数学と音楽には非常に熱心ですが、そのほかの問題になると、これくらい、ものわかりの悪い、でたらめな人間はありません。理窟を言わせれば、さっぱり筋が通らないし、むやみに反対ばかりします。彼等は頭も心も、数学と音楽しかわからぬのです。

それに、この国の人たちは、いつも何か心配していて、そのために一分間も心は安らかでないのですが、他の人間から見たら、それは何でもないことを心配しているのでした。

その心配の種というのは、天に何か変つたことが起きはすまいか、ということです。たとえば、地球は絶えず太陽に向つて近づいているのだから、今に吸い込まれるか、飲み込まれてしまうだろう、とか、あるいは、太陽の表面にはガスがだん／＼固まつてきて、今に日が射さなくなるときが来るだろう、とか、この前の彗星のときは、地球は星の尻尾になでられないで助かつたが、今度、三十一年後に彗星が現れると、

たぶん、われ／＼はいよ／＼滅ぼされるだろう、というのです。そうかとおもえば、

太陽は毎日光線を出しているので、やがては、蠟燭のようになくなるだろう、

そうすると、地球も月も、みんななくなってしまうだろう、などという心配でした。

彼等は朝から晩まで、こんなふうなことを考えて、ビク／＼しています。夜も、よく眠れないし、この世の楽しみを味おうともしないのです。朝、人に会つて、第一に

する挨拶は、

「太陽の工合はどうでしよう。日の入り、日の出に、変りはございませんか。」

「今度、彗星がやつて来たら、どうしたものでしようか。なんとかして助かりたいものですね。」

と、こんなことを言い合うのです。それはちょうど、子供が幽霊やお化けの話が怖くて眠れないくせに聞きたがるような気持でした。

私は一月もたつと、この国の言葉がかなりうまくなりました。国王の前に出ても、質問は大がい答えることができました。陛下は、私の見た国々の法律、政治、風俗などのことは、少しも聞きたがりません。その質問といえば、数学のことばかりでした。私が申し上げる説明を、とき／＼、叩き役の助けをかりて聞かれながら、いかにも、つまんなそうな顔つきでいられます。

私は、この島のいろ／＼珍しいものを見せてもらいたいと、陛下にお願いしました。さつそく、お許しが出て、私の先生が一しょに行つてくれることになりました。私はこの島のさま／＼の運動が何の原因によるものなのか、それが知りたかったのです。

この飛島は、直径約四マイル半の真円の島です。面積は、一万エーカー、島の厚さは、三百ヤードあります。島の一番底は、滑らかな石の板になつていて、その上に、鉱物の層があり、そのまた上に、土がかぶさっています。

島の中心には、直径五十ヤードばかりの裂け目が一つあります。こゝから、天文学者たちが、洞穴へおりて行きます。

その洞穴の中には、二十箇のランプが、いつもともつています。そこには、望遠鏡や、天体観測器や、そのほか、天文学の器械が備えてあります。

この島の運命をつかさどっているのは、一つの大きな磁石です。磁石の真中に、心棒があつて、誰でも、ぐる／＼廻すことができるようになつています。

この磁石の力によつて、島は、上つたり下つたり、一つ場所から他の場所へ動いたりするのです。磁石の一方の端は、島の下の領土に対し、遠ざかる力を持ち、もう

一方の端は、近寄ろうとする力を持っています。

もし近寄ろうとする力を下にすれば、島は下つてゆきます。その反対にすれば、島は上つてゆきます。斜めにすれば、島は斜めに動きます。そして、磁石を土面と水平にすれば、島は停まっています。

この磁石をあずかつているのは、天文学者たちで、彼等は王の命令で、とき／＼、磁石を動かすのです。

もし、下の都市が謀叛を起したり、税金を納めない場合には、国王は、その都市の真上に、この島を持つて来ます。こうすると、下では日もあたらず雨も降らないので、住民たちは苦しんでしまいます。また場合によつては、上からどし／＼大石を都市めがけて落します。こうされでは、住民たちは、地下室に引つ込んでいるよりもかはありません。

だが、それでもまだ王の命令に従わないと、最後の手段を取ります。それは、この島を彼等の頭の上に落してしまいます。こうすれば、家も人も何もかも、一ぺんにつぶされてしまいます。

しかし、これはよく／＼の場合で、めったにこんなことにはなりません。王もこのやり方は喜んでいません。それにもう一つ、これには困ることがあるのです。つまり、都市には高い塔や柱などが立ち並んでいるので、その上に島を落すと、島の底の石が割れるおそれがあります。もし底の石が割れたりすると、磁石の力がなくなつて、たちまち島は地上に落つこちてしまうことになるのです。

## 2 発明屋敷

私はこの国で、別にいじめられたわけではないのです。だが、どうも、なんだか、みんなから馬鹿にされているような気がしました。この国では、王も人民も、数学と音楽のことのほかは、何一つ知ろうとしないのです。だから私なんか、どうも馬鹿にされるのでした。

ところが、私の方でも、この島の珍しいものを見物してしまふと、もう、こゝの人間たちは、あきあきしてしまいました。彼等はいつも、何か我を忘れて、ぼんやり考えごとに耽つてゐるのです。附き合う相手として、これほど不愉快な人間はありません。で、私はいつも女や、商人や、叩き役、侍童などとばかり話をしました。もの

を言つて、筋の通つた返答をしてくれるのは、こういう連中だけでした。

私は勉強したので、彼等の言葉はだいぶん話せるようになつていきました。で、私はこうして、ほとんど相手にもしてもらえないような国に、じつとしているのが、たまらなくなつたのです。一日も早く、この国を去つてしまいたいと思いました。

私は陛下にお願いして、この国から出られるようにしてもらい、二月十六日に、王と宮廷に別れを告げました。ちょうどそのとき、島は首府から二マイルばかり郊外の山上を飛んでいましたので、私は一番下の通路から、鎖を吊り下げてもらつて地上におりました。

その大陸は、飛島の国王に属していて、バルニバービといわれています。首府はラガードと呼ばれています。

私は地上におろされて、とにかく満足でした。服装は飛島のと同じだし、彼等の言葉も、私はよくわかつていたので、何の気がかりもなく、町の方へ歩いて行きました。私は飛島の人から紹介状をもらつて、それを持って、ある偉い貴族の家を訪ねて行きました。すると、その貴族は、彼の邸の一室を、私に貸してくれて、非常に厚くもてなしてくれました。

翌朝、彼は、私を馬車に乗せて、市内見物につれて行つてくれました。街はロンドンの半分くらいですが、家の建て方が、ひどく奇妙で、そして、ほとんど荒れ放題になつているのです。街を通り人には、みな急ぎ足で、妙にもの凄い顔つきで、大がいボロボロの服を着ています。

それから私たちは、城門を出て、三マイルばかり、郊外を歩いてみました。ここでは、たくさんの農夫が、いろいろの道具で地面を掘り返していましたが、どうも、何をしているのやら、さっぱり、わからぬのです。土はよく肥えているのに、穀物など一向に生えそうな様子はありません。

こんなふうに、田舎も街も、どうも実に奇妙なので、私は驚いてしました。

「これは一たいどうしたわけなのでしょう。町にも畑にも、あんなにたくさんの人々が、とても忙しそうに動きまわっているのに、ちよつとも、よくないようですね。私はまだ、こんなでたらめに耕された畑や、こんなむちやくちやに荒れ放題の家や、みじめな人間の姿を見たことがないのです。」

と私は案内役の貴族に尋ねてみました。

すると彼は次のような話をしてくれました。

今からおよそ四十年ばかり前に、数人の男がラピュタへ上つて行つたのです。彼等は五ヵ月ほどして帰つて来ましたが、飛島でおぼえて来たのは、数学のはしくれでした。しかし、彼等は、あの空の国のやり方に、とてもひどく、かぶれてしまつたのです。帰ると、さつそく、この地上のやり方を厭がりはじめ、芸術も学問も機械も、何もかも、みんな、新しくやりなおそうということにしました。

それで、彼等は国王に願つて、このラガードに学士院を作りました。ところが、これがついに全国の流行となつて、今では、どこの町に行つても学士院があるのであります。この学士院では、先生たちが、農業や建築の新しいやり方とか、商工業に使う新式の道具を、考え出そうとしています。先生たちはよくこう言います。

「もし、この道具を使えば、今まで十人でした仕事が、たつた一人で出来上るし、宮殿はたつた一週間で建つ。それに一度建てたら、もう修繕することが要らない。果物は、いつでも好きなときに熟れさせることができ、今までの百倍ぐらいたくさん取れるようになる。」

と、そのほかいろいろ結構なことばかり言うのです。

たゞ残念なのは、これらの計画が、まだどれも、ほんとに出来上つてはいないのです。だから、それが出来上るまでは、國中が荒れ放題になり、家は破れ、人民は不自由をつづけます。がそれでも彼等は元気は失わず、希望にもえ、半分やけくそになりながら、五十倍の勇気を振るつて、この計画をなしとげようとするのです。

彼はこんなことを私に説明してくれたのです。そして、

「ぜひ、ひとつあなたにも、その学士院を御案内しましょう。」

と、つけ加えました。

それから数日して、私は彼の友人に案内されて、学士院を見物に行きました。この学士院は、全体が一つの建物になつてゐるのではなく、往来の両側に建物がずっと並んでいました。

私が訪ねて行くと、院長は大へん喜んでくれました。私は何日もく、学士院へ出かけて行きました。どの部屋にも、発明家が一人二人いました。私はおよそ五百ぐらいの部屋を見て歩きました。

最初に会つた男は、手も顔も煤だらけで、髪はぼうくと伸び、それに、ところく焼け焦げがありました。そして、服もシャツも、皮膚と同じ色なのです。

彼は、胡瓜から日光を引き出す計画を、やつてゐるのだそうです。なんでも、もう八年間このことばかり考へてゐるのだそうです。それは、つまり、この胡瓜から引出した日光を壇詰にしておいて、夏のじめ／＼する日に、空気を温めるために使おうというのです。

「もうあと八年もすれば、これはきっと、うまくできるでしょう。」

と彼は私に言いました。

「しかし困るのは、胡瓜の値段が今非常に高いことです。どうか、ひとつこの発明を助けるために、いくらか寄附していただけないでしょうか。」

と彼は手を差し出しました。私はいくらかお金をやりました。

次の部屋に入ると、悪臭がむんと鼻をつきました。びっくりして私は飛び出したのですが、案内者が引きとめて、小声でこう言いました。

「どうか先方の気を損ねるようないふをしないでください。ひどく腹を立てますから。」

それで、私は鼻をつまむわけにもゆかず困つてしましました。この室の発明家は、顔も髪も黄色になり、手や着物は汚れた色がついています。彼の研究というのは、人間の排泄したもので、もう一度もとの食物になおすことでした。

それから、別の部屋に入ると、氷を焼いて火薬にすることを、工夫している男がいました。

それから、非常に器用な建築家もいました。彼が思つた新しい考へによると、家を建てるには、一番はじめに、屋根を作り、そして、だん／＼下の方を作つてゆくのがいゝといふのです。その証拠には、蜂や蟻などこれと同じやり方でやつてゐるのではないか、と彼は言つていました。

ある部屋には、生れながらの盲人が、盲人の弟子を使つていました。彼等の仕事は、画家のために、絵具を混ぜることでした。この先生は、指と鼻で、絵具の色が見分けられるといふのです。しかし、私が訪ねたときは、先生はほとんど間違つてばかりいました。

また別の部屋には、鋤や家畜の代りに、豚を使つて、土地を耕すことを発見したという男がいました。

それは、うするのです。まず、一エーカーの土地に、六インチおきに、八インチの深さに、どんぐり、なつめ、やし、栗、そのほか、豚の好きそうなものをたくさん埋めて

おきます。それから、六百頭あまりの豚を、そこへ、追い込むのです。すると、三日もすれば、豚どもは食物を探して、隅から隅まで掘り返すし、それに、豚の糞が肥料になるので、あとはもう種を蒔けば、ばかりです。もつとも、これは、お金と人手がかゝるばかりで、作物はほとんど、取れなかつたということです。

さて、その次の部屋に行くと、壁から天井から、くもの巣だけで、やつと人ひとりが出入りできる狭い路がついていました。私が入つて行くと、

「くもの巣を破つては駄目だ。」

と、いきなり大声でどなられました。それから、相手は私に話してくれました。

「そもそも／＼くもといふものは、蚕などよりずっと立派な昆虫なのだ。くもは糸を紡ぐだけでなく、織り方までちゃんと心得ている。だから、蚕の代りにくもを使えば、絹を染める手数が省けることになる。」

そう言つて、彼は、非常に美しい蠅をたくさん取り出して見せてくれました。つまり、くもにこの美しい蠅を食べさせると、くもの糸にその色がつくのだそうです。それに彼は、いろんな色の蠅を飼つていて、この蠅の餌として、何か糸を強くさすものを研究しているのでした。

それから私は、もう一人、有名な人を見ました。この人は、もう三十年間といふものは、人類の生活を改良させることばかり、考へつゝけているのです。

彼の部屋は奇妙な品物で、一ぱいでしたが、五十人の男たちが、彼の指図で働いていました。ある者は、空気をかわかして塊りにすることを研究していました。また、ある者は、石をゴムのよう柔かくして、枕をこしらえようとしていました。生きた馬の蹄のところを石にすることを考えている者もいました。

それから、これは私にはどうもよくわからないのですが、この有名な学者は、畑に糞がらを蒔くこと、羊に毛の生えない薬を塗ることを、目下しきりに研究しているのだそうです。

私は道を横切つて、向う側の建物に入りました。こゝの学士院には、学問の発明家がいるのでした。

私が最初に会つた教授は、広い教室にいました。そこには四十人ばかりの学生が集つていました。教授は一つの便利な機械を考へていました。

その機械を使えば、どんな無学な人でも、何でも書けるのです。哲学、詩、政治学、数学、神学、そんなものが誰にでも、らくに書ける機械でした。教授は、その機

械についていろいろ—— 私に説明してくれました。

私はつづいて国語学校を訪ねました。

——では、三人の教授が国語の改良をいろいろ——と熱心に考えていました。

一つの案は、言葉を全部しやべらないことにしたらいい、というのでした。その方が簡単だし、健康にもよい、ものをしやべれば、それだけ肺を使うことになるから、生命を縮める、というのです。

それで、その代りに、こんなことが発明されました。言葉というものは、物の名前だから、話をしようとするときには、その物を持って行って、見せつこをすれば、しゃべらなくても意味は通じるというのです。

しかし、これにも一つ困ることがあります。それはちょっとした話なら、道具をポケットに入れて持って行けばいいのですが、話がたくさんある場合だと大へんです。そのときは、力の強い召使が、大きな袋に、いろんな品物を入れて、背負って行かなければなりません。

私は、二人の男が、ちょうどあの行商人のような恰好で、大きな荷物を背負つているのを、たび々々見たことがあります。二人の男が往来で出会うと、荷物をおろして、袋をほどき、中からいろいろな品物を取り出します。こうして、かれこれ一時間ぐらい話がつづいたかと思うと、品物を袋におさめて、荷物を背負つて立ち上ります。

私はその次に数学教室を見物しました。

——では、ヨーロッパなどでは、思いつくともできない、珍しい方法で、教えられていました。まず、数学の問題と答案を、薄い煎餅の上に、特別製のインキで、清書して

おきます。学生たちに、お腹を空っぽにさせておいて、この煎餅を食べさせます。その後三日間は、パンと水しか与えません。そうすると、煎餅が消化されるにつれて、それと一しょに問題は頭の方へ上つてゆくというのです。

しかし、これは実際には一度も成功していません。というのは、この煎餅を食べると、ひどく胸が悪くなるので、みんなこつそり抜け出して、吐き出してしまふからです。

私はつづいて、政治の発明家たちを訪ねましたが、この教室では、あまり愉快な気持にはされなかつたのです。

この教室で、一人の医者がこんなことを言つていました。一たい、大臣などというものは、どうも物忘れがひどくて困るとは、誰もが言う苦情ですが、これを防ぐには、

次のようにすればいいというのです。つまり、大臣に面会したときには、できるだけ、わかりやすい言葉で用件を伝えておいて、別れぎわに、一つ、大臣の鼻をつまむとか、腹を蹴るとか、腕をつねるとか、なんとかして、約束したことは忘れないようにさせるのです。そしてその後も、面会するたびに同じことを繰り返し、約束したことは実行してもらうようにするのです。

また、この医者は、政党の争いをうまく停める方法を発明していました。

それは、まず両方の政党から百人ずつ議員を選んできて、これを二人ずつ、頭の大きさの似たもの同士の組にしておきます。それから、それ／＼両方の頭を鋸のこぎりでひいて、二つに分けます。こうして切り取った半分の頭を、それ／＼取り換えて、反対派の頭にくつけるのです。

私は、二人の教授がしきりに議論しているのを聞きました。どうしたら、人民を苦しめないで、税金を集めることができるかという議論でした。ところが、もう一人の教授の意見では、人がその自惚れている長所に税金をかけたらいい、というのです。

### 3 幽霊の島

私は学士院を見物すると、もうこれ以上、この国にいても仕方がないと思い、また、イギリスへ帰りました。私はヨーロッパへの帰り途に、ひとつラグナグ島へ寄つてみようと考えていました。それから、さらに日本へも寄つてみたいと思いました。

私は荷物を運ばせるために、驃馬らばを二頭、それに案内人を一人やといました。あの貴族には、いろいろ世話になつたのですが、私がいよいよ出発することになると、大へんな土産物までくれました。

ところで、マルドナーダという港に着いてみると、あいにく、ラグナグ島行きの船は当分出そうもないということがわかりました。そこで、私はその港町に、しばらく滞在することになりました。そのうち一二三の知合いも出来、みんな私に親切にしてくれました。ラグナグ島行きが出るまでには、まだ一月はあると聞いて、私は、そこから五リーグばかりのところにある、グラブダブドリブという島を訪ねることにしました。この町の一流の紳士が、小帆船を一隻仕立て、私と一しょに行つてくれまし

た。

ところで、この『グラブダブドリブ』という名前は、『魔法使の島』という意味なのでした。この島は酋長がいて治めていましたが、住民は一人残らず魔法使でした。島で一番年長者が酋長になると、庭園の中には、家畜、穀物、園芸などのために、小さな区切りが作っています。酋長とその家族が使っている、召使というのが、実に奇妙なっていました。酋長は、魔法を使って、死人の中から、誰でも好きな者を呼び出すことができます。そして、二十四時間限り、(それ以上は駄目でしたが)呼び出した死人を、召使として使います。だが、一度呼び出して使つたら、まずその召使は、三ヵ月間は呼び出せないことになっていました。

私たちが、この島へ着いたのは、朝の十一時頃でしたが、連れの紳士はさつそく、酋長のところへ行って、「実は外国人が一人、閣下にお目にかかりたくて、わざわざやつて来たのですが、ひとつ会つてやつてくださいませんか。」と頼みました。

さつそくそれは許されたので、私たちも宮殿の門をくぐつて行きました。門の両側には、鎧、兜を着た兵士がズラリと並んでいます。そして、その兵士たちはなんともいえない恐ろしい顔つきをしているので、私は思わずゾッと寒気がしました。私たちも部屋を二つ三つ通り抜けましたが、どの部屋にも、同じような無気味な恰好の兵士が並んでいました。

やがて、酋長の室に来ると、私たちは三度頭を下げて、おじぎをしました。それから、挨拶がすむと、酋長の席から一番下の段のところにある椅子に、私たちは腰をおろしました。

この酋長は、飛島の言葉をよく知っていました。それで私に、旅行の話を少し聞かせてほしい、と言いました。そして、彼は、「うん、召使たちはいない方がいいな。」

すると、今まで、酋長のまわりにいた召使たちが、一ぺんに、すーっと消えてしましました。私はびっくりして、しばらくは口もきけませんでした。「いや、何でもないのでですよ。怖がる」とはありません。」

と酋長は言つてくれます。

見ると、私の連れの紳士は、たびたびこんなことには馴れているらしく、まるで平気な顔をしていました。それで、私もやつと安心して、旅行の話を手短に話しました。

それでも、私は話しながら、ときどきも気になつて、あの召使たちが消えてしまつたあたりを振り返つて見ていました。

それから私たちは、酋長と一緒に食事をしました。すると、今度はまた別の幽霊どもが、食事を運んで来て、給仕してくれるのでした。それを見ても、私はもう最初ほど、ビクンしなくなつていました。夕方まで私たちは酋長のところにいました。彼は泊つてゆけとすゝめましたが、私たちは無理に帰りました。私たちは、島の民家に泊り、翌朝になると、また酋長のところへ訪ねて行きました。

こんなふうにして、私たちは十日間、この島にいました。毎日、大がい酋長のところへ行つて、夜は、民家の宿へ戻るのです。私は幽霊にも馴れてしまつたので、もう三四回目から平気になりました。いや、怖いのはまだ少し怖かったのですが、それよりも、とにかく、これが珍しくてたまらなくなつていたのです。

酋長は私にこんなことを言いだしました。

「私は誰でも死人の中から、あなたの好きな人間を呼び出してあげます。そして、何でも、あなたが聞きたいと思うことを聞けば、死人に返事させます。世界はじまつて以来、今日まで、どんな死人でも、呼び出すことができます。」

私は酋長の厚意を大へん有り難く思いました。ちょうど、私たちのいた部屋からは、庭園がすつかり見わたせるようになつていました。

私はまず最初に、何か雄大なものが見たいと思いました。「それではひとつ、アレキサンダー大王が戦場に立つている姿を見せてください。」

と私は言いました。

酋長は指先をちょっと動かして合図しました。すると、私たちのいる窓の下の庭園に、戦場の光景が現れました。それから、アレキサンダー大王は、私たちの部屋へ呼ばれやつて来ました。しかし、彼の話すギリシャ語は、私にはどうもよく通じませんでした。

次には、ハンニバルがアルプスの山を越すところを見せてもらいました。その次には、シーザーとポンペイが、それ、陣地に立つて、戦争をはじめよう

としているところを見せてもらいました。そして、シーザーが大勝利をするところも見ました。

私は次に、ひとつ最も偉い学者たちを見たいものだ、と思いました。そこで、酋長にこう頼みました。

「どうか、ホーマーとアリストテレスと、それから、その註釈家たちを、全部見せてください。」

すると、これはまた大へんな人数で、何百人という人間が、ぞろぞろと現れて来ました。私は一目見て、ホーマーとアリストテレスの顔はすぐわきました。

ホーマーの方が背も高く、好男子でした。歩き方も、しゃんとしているし、それに、目はまるで人を突き刺すような、鋭い眼光でした。アリストテレスの方は、だいぶん腰が曲って、杖をついていました。それに髪も薄くなっているし、声にも力がないのでした。しかし、この二人の学者と、まわりの群衆とは、まるで何の縁故もないのだということは、私にもよくわかりました。

私はまる五日間、まだまだ、いろんな人間や学者たちと会いました。ローマの皇帝たちにも、大てい会いました。

いよいよ出発の日が来たので、私はグラブダブドリブの酋長と別れて、連れの紳士と一緒に、マルドナーダーへ帰りました。そして、この港で二週間ばかり待つて、いよいよ、ラグナグ島行きの船が出ることになりました。この町の人たちは、大へん親切してくれて、私を、わざわざ船まで見送ってくれました。

航海は一ヶ月かかりました。一度は暴風雨に会つたりしましたが、一七一年四月二十一日に私たちの船はクルメグニグ河に入りました。

ここは、ラグナグ国の東南にある港です。船は、この町から一リーグばかり手前で、錨をおろし、水先案内に合図をしました。半時間もしないうちに、水先案内は二人連れでやって来ました。

ところが、船員の二三人の者が、私のことを、外国人で、大旅行家だと、水先案内に話してしまったのです。するとまた、水先案内は、税関吏に、私のことを話しました。そのために、私は上陸すると、さうそく厳しい検査を受けました。

この税関吏は、バルニバービ語で、私に話しかけました。この国とバルニバービとは互に往来しているので、港町では、大てい言葉が通じるのでした。

私はできるだけ簡単に、わかりやすく話してやりましたが、私の国はオランダだと、一つ嘘をつきました。これは、私が日本へ寄つてみようと思つてからです。その日本では、オランダ人のほかは、一さいヨーロッパ人を上陸させない、ということを、私は知つていました。

「私はバルニバービの海岸で船が難破して岩に打ち上げられたのです。すると、ラピュタ（飛島）に見つかって、救われました。今はこれから、日本へ行こうとしているところです。日本へ行きさえすれば、船があるので、故国へ帰れます。」

と私は役人に向つて言つてやりました。すると、役人は、

「ではさうそく、宮廷へ手紙を書いてあげる。二週間もすれば返事が聞けるだらうから。しかし、それまでは、一応あなたをこちらで捕えておくことにする。」

と言います。

そこで、私は宿へ引っ張つてゆかれましたが、門口には、番人がちゃんと一人立つています。しかし、庭の中を歩きまわることだけは許されました。それに、私は国王の費用で、ずいぶんよく、もてなされました。また方々から、私を珍しがつて、招いてくれました。私のことが、まだ話にも聞いたことのない、遠い國からやつて来た男だと、人々の噂になつていてからです。

私は同じ船で来た一人の青年を、通訳にやといました。この通訳を使って、私は訪ねて来る人たちと、話をすることができました。

宮廷からの返事を待つていていた頃、使者がやつてきました。それは、私と私の連れを、十頭の馬で、この通訳を使って、私は訪ねて来る人たちとトランドラグダカまで案内してくれるというのです。私は通訳の青年のほかに連れはなかつたので、彼に一しょに行つてくれるよう頼み、二人の乗り物として、驃馬を一頭ずつもらいました。いよいよ出発する前に、まず、使者を一人さきに発たせることにしました。

「陛下の御足の前の塵をなめさせていたゞきたいのですが、いつお伺いしたらいつか、御都合をお知らせくださいませ。」

と、私の使者は王にこう申し上げました。

はじめ私は、『塵をなめる』というのは、たゞ、この国の宮廷の言いまわしで、『お目にかかる』という意味だらう、と思つていました。ところが、その後、これはほんとに塵をなめるのだということがわかりました。

宮廷に着いて二日目に、私はいよいよ陛下の前に呼び出されました。すると、

私は腹這いになれ、と命じられました。そして、陛下の前まで進んで行き、床の塵を

ペロ／＼なめろ、と言わされました。もつとも私は外国人なので、特別の扱いをされて、

床は綺麗にしてありましたので、塵も大したことなかったのです。しかし、これは全

く特別扱いで、この国の一一番偉い人と同じよう扱つてくれたわけです。

ひどいになると、宫廷で気に入らない人がやつて来ると、わざ／＼塵をまき散らしておくのです。

私はこの宫廷で、ある大官が口の中を塵だらけにして、ものも言えず困っていると

ころを見ました。もしこんな場合、相手が陛下の前で、唾を吐いたり、口を拭いたり

したら、すぐ死刑にされてしまいます。

それからこの宫廷では、もう一つ、面白くない慣習があります。それは、もし王が

誰か家来をそつと死刑にしてやろうと思われると、この床の上に、毒の粉をまき散らすように、お命じになります。それを家来がなめれば、二十四時間で死んでしま

うというのです。しかし、こうして死刑がすむと、あとは必ず床についている毒を綺麗に洗い落しておくよう、お命じになります。

あるとき、私は一人の侍童がひどく叱られているのを見ました。それは、床にまいだ毒を、あとで綺麗に掃除しておかなつたからです。そのため、一人の立派な青年が、陛下の前で、毒をなめて死んでしまいました。そのとき、陛下は、彼を殺そうとはちよつともお考えにならなかつたので、ひどく残念がらされました。

王は私との会見が大へんお気に召されました。

私と通訳に宮中の部屋を貸してくださつて、毎日、食事とお小遣を与えてくれました。私は王にすゝめられて、この国に二ヵ月間滞在しました。ラグナグ人は、礼儀正しい国民でした。私は上流貴族と、おもに附き合いました。通訳つきで話をしたのですが、気まずいものではなかつたのです。

「あゝ、そんな人たちは、どんなに幸いでしよう。みんな人間は、死ぬことが恐ろしいから、いつも苦しんでいるのに、その心配がない人なら、ほんとに幸いなことでしょう。」

しかし、一つ不思議に思つたのは、ストラルドブラグが宮廷に一人も見あたらなかつたことです。とにかく私は、ひとつストラルドブラグたちに会つて話してみたいと思いました。そこで私は、紳士を通訳に頼んで、一度彼等と引き合せてもらいました。

まず紳士は、私がストラルドブラグを、大へんうらやましがつていることを、彼等に話しました。するとストラルドブラグたちは、しばらく自分たちの言葉でガヤ／＼話し合つていました。それから通訳の紳士は、私にこう言いました。

「もし、仮に、あなたがストラルドブラグに生れたら、どんなふうにして暮すつもりか、それを、あの人たちは聞かせてくれと言つていてます。」

ある日のことでした。一人の紳士がふと私に「なん」と尋ねました。

「あなたはこの国のストラルドブラグというものを見ましたか。これは『死なゝい人間』という意味なのですが。」

「あいにくまだ見ていません。しかし、死なゝい人間なんて、一たい、どうして、そんな

名前をつけるのですか。そのわけを教えてください。」

と私は尋ねてみました。すると、彼は次のようなことを教えてくれました。

それはごく稀なことですが、この国には、額の左の眉毛の上に、赤い円いあざのついた子供が生れるのです。このあざがあると、この子供はいつまでたつても死なゝい、といいうしるしなのです。

このあざは年とともに、大きくなり、色が變つてゆきます。十二歳になると、緑色になり、二十五歳になると、紺色に變り、それから四十五歳になると、真黒になりますが、それからはもう変りません。こんな子供が生れるのは、非常に稀で、全国を探しても、男女合せて千百人ぐらいしかいません。そしてそのうち、五十人ぐらいが、この首府に住んでいますが、そのなかには、三年前に生れた女の子も一人います。この死なゝい人間が生れるのは、全く偶然で、血統のためではないのです。だから、ストラルドブラグを親に持つていても、その子供は普通の子供なのです。

私は紳士からこの話を聞いて、何ともいえないので、思わず、こう口走りました。

「あゝ、そんな人たちは、どんなに幸いでしよう。みんな人間は、死ぬことが恐ろしいから、いつも苦しんでいるのに、その心配がない人なら、ほんとに幸いなことでしょう。」

しかし、一つ不思議に思つたのは、ストラルドブラグが宮廷に一人も見あたらなかつたことです。とにかく私は、ひとつストラルドブラグたちに会つて話してみたいと思いました。そこで私は、紳士を通訳に頼んで、一度彼等と引き合せてもらいました。

まず紳士は、私がストラルドブラグを、大へんうらやましがつていることを、彼等に話しました。するとストラルドブラグたちは、しばらく自分たちの言葉でガヤ／＼話し合つていました。それから通訳の紳士は、私にこう言いました。

「もし、仮に、あなたがストラルドブラグに生れたら、どんなふうにして暮すつもりか、それを、あの人たちは聞かせてくれと言つていてます。」

そこで、私は喜んで次のように答えました。

「もし私が幸いにストラルドブラグに生れたとすれば、私はまず第一に、大いに努力して金もうけをしようと思ひます。そして、節約と整理をよくしてゆけば、二百年ぐらいで、私は国内第一の金持になります。

第二に、私は子供のときから学問をはげみます。そうすれば、やがて國中第一の

学者になります。それから最後に、私は社会のいろんな出来事を何でもくわしく書いておきます。風習や、言語や、流行や、服装や、娯楽などが移り變るたびに、それらを、一つ／＼書きとめておきます。こうしておけば、私はやがて活字引いきじ引きとして皆から重宝がられます。

六十を過ぎたら、私は規則正しい安樂な生活をしたいと思います。そして、有望な青年を導くことを、私の楽しみにします。私の記憶や経験から、いろんなことを彼等に教えてやりたいと思います。

しかし、絶えず交わる友人には、やはり私と同じような、死なない仲間を十二人ほど選びます。そして、もし彼等のうちに生活に困っているようなものがあれば、私の土地のまわりに便利な住居を作つてやります。それから食事のときには、彼等のうちから数人招きます。もつともそのときには、普通の人間も、二三人ずつ立派な人を招くことにします。なにしろあまり長く生きていると、普通の人間が、どん／＼死んでゆくことなど、別に惜しくもなんともなくなるでしょう。孫が出来れば、私はその孫を招いたりするでしょう。こうなると、ちょうどあの庭のチューリップが、毎年人の目を楽しませて、前の年に枯れた花を悲しまさないのと同じことです。

それから私は死なないのですから、まだ／＼、いろんなものを見ることができます。昔、栄えた都が廃墟となつたり、名もない村落が都となつたり、大きな河が涸れて小川となつてしまつたり、文明国民が野蛮人になつたり、昨日の野蛮人が、今日の文明人になつていたり、そんなふうな移り變りを見ることができるのです。そして、まだ人間の知識では解けない、いろんな問題も解ける日が来るのを、それも見ることができるでしょう。」

私がこんなふうに答えると、紳士は、私の言つたことを、ストラルド・プラグたちに、通訳して聞かせました。すると、彼等はにわかにガヤ／＼と話しありました。なにかには、失礼にも何かおかしそうに笑い出したものもいました。しばらくして通訳の紳士は、私にこう言いました。

「どうも、あなたはストラルド・プラグというものを、考え違いしておられるようだと、彼等はそう言っています。

なにしろ、このストラルド・プラグなるものは、この国にしかいないもので、バルニバービにも日本にも見ることはできません。前に私も使節として、バルニバービや日本へ行つたことがあります、その國の人たちは、てんで、そんなものがあるとは考えられない

と言つていました。私は、バルニバービや日本の人たちと、いろいろ話してみて、長生ということが、すべての人間の願いであることを發見しました。片足を墓穴に突つ込んだような人間でさえ、もう一方の足ではできるだけ入るまいとあがきます。たとえ、どんなに年をとつても、まだ一日でも長生するつもりらしいのです。

ところが、このラグナゲの国では、絶えず眼の前にストラルド・プラグの例を見せつけられているためか、この國の人たちは、やたらに長生を望まないのです。

あなたは人間の若さとか健康とか元気とかいうものが、いつまでもいつまでもつぶくと、とんでもない考え方をしていられます、ストラルド・プラグのつらいところは、年をとつて衰えながら、いろんな不便を耐えて、まだ生きつづけているということなのです。」

そう言つて、彼はこの國のストラルド・プラグの有様を次のようにくわしく話してくれました。

彼等は三十歳頃までは普通の人間と同じことなのですが、それからあとは次第に元気が衰えてゆく一方で、そうして八十歳になります。この國では八十歳が普通、寿命の終りとされていますが、この八十歳になると、彼等は老人の愚痴と弱点をすつかり身につけてしまいます。おまけに決して死なないといふ見込みから、まだ／＼たくさんの方々がふえてきます。頑固、欲張り、気むずかし屋、自惚れ、おしゃべりになるばかりでなく、友人と親しむこともできなければ、自然の愛情というようなものにも感じなくなります。

たゞ嫉妬と無理な欲望ばかりが強くなります。彼等は青年が愉快そうにしているのを見ては、嫉妬します。それは彼等が、もうあんなに愉快にはなれないからです。それから彼等は、老人が死んで葬式が出るのを見ると、やはり嫉妬します。ほかの人たちは安らかに休息の港に入るのに、自分たちは死ねないからです。

彼等は自分たちが若かった頃に見たことのほかは、何一つおぼえていません。しかも、そのおぼえているということも、ひどくでたらめなのです。だから、ほんとのことをくわしく知ろうとするには、彼等に聞くより、世間の言い伝えに従う方が、まだましなのです。すつかり記憶がなくなつてしまつてるのは、まだいゝ方です。これはほかの連中とは違つて、もう多くの欠点もなくなつてゐるので、多少、人から憐憫でもらえます。

彼等は満八十歳になると、この國の法律ではもう死んだものと同じように扱われ、

財産はすぐ子供が相続することになります。そして國から、「く僅かの手当が出来され、困る者は國の費用で養わることになります。

九十歳になると、歯と髪の毛が抜けてしまいます。この年になると、もう何を食べても、味なんかわからないのですが、そのくせ、たゞ手あたり次第に、食べたくもないのに食べます。しかし彼等はやはり病気にはかかるのです。かかる病気の方は、ふえもしなければ減ることもありません。話一つしても、普通使うありふれた物の名まで忘れていました。人の名前などおぼえてはいません。どんな親しい友達や親類の人と会つても顔がわからないのです。本を読んでも、ほんやり一つページ眺めています。文章のはじめから終りまで読んで意味をたどる力がなくなっているのです。ですから、何もかも一向面白くはないのです。

それに、この国の言葉は絶えず変っています。だから甲の時代のストラルドブラグと、乙の時代のストラルドブラグが出会ったのでは、少しも言葉が通じません。そのうえ、二百年もたてば、友人と会つても話一つできない有様ですから、彼等は自分の国に住みながら、まるで外国人のように不便な生活をしているのです。

私が紳士から聞いた話は、大たい、こんなふうなものでした。

その後、私はいろいろの時代のストラルドブラグをたび々々、家につれて来て会つてみました。中で一番若いのは、まだ二百歳になつたかなならないくらいでした。彼等は、私が大旅行家で、世界中を見てきた人間だと聞いても、別に珍しがりもせず、何の質問もしません。たゞ、何か記念品をくれと手を差し出しました。

ストラルドブラグは、みんなから厭がられています。もしストラルドブラグがこの国に生れて来ると、これは不吉なこととして、その誕生がくわしく書き残される」とになつています。だから、その記録を見れば、彼等の年齢はわかるわけですが、しかしこの記録も千年くらい前のものしか残つていません。

実際、ストラルドブラグほど不快なものを私は見たことがないのです。ことにの方が男よりもっとひどいのでした。形がみにくいくらいでなく、その年齢に比例して、なんともいえないもの凄さがあるのです。私は彼等が六人ばかり集つているのを見て、年は百か二百ぐらいしか違わないのに、誰が一番、年上か、すぐわかりました。

私はストラルドブラグのことを知つたために、やたらに長生したいという烈しい欲望もすっかりさめてしましました。以前、心に描いていたたのしい夢が、今は恥かしくなつたのです。たとえどのような恐ろしい死でも、あのように、厭らしい生よりは、まだ

ましだと思いますようになりました。

こんなことを私が王に話したところ、王は大へん面白がられました。そして、私をおかからかいになつて、

「ひとつストラルドブラグを一人ばかり、イギリスへつれて行つて見せてやつてはどうか。」

とおっしゃいます。だが、実際はこの國の法律で、彼等を国外につれて行くことは厳しく禁止されているようでした。

ストラルドブラグのこの話は、諸君にもいくらか興味があるだろうと思います。というのは、少し普通とは変つた話ですし、私のこれまで読んだどの旅行記にも、まだ、これは出でていなかつたと思います。

このラグナグ国と日本国とは、絶えず行き来しているのですから、このストラルドブラグの話も、もしかすると、日本の人人が本に書いているかもしません。しかし、なにしろ私が日本に立ち寄つたのは、ほんの短い間でしたし、そのうえ、私は日本語をまるで話せなかつたので、そのことを確めてみることもできなかつたのです。

ラグナグ国王は、私を宮廷で何かの職につけようとされました。けれども、私がどうしても本国へ帰りたがつてゐるのを見て、快く出発をお許しになりました。そして、わざわざ、日本皇帝にあてゝ推薦状を書いてくださいました。そのうえ、四百四十四枚の大きな金貨と、赤いダイヤモンドを私にくださいました。このダイヤモンドの方は、私はイギリスに帰つてから、売つてしましました。

一七〇九年五月六日、私は陛下や知人一同に、うやうやしく別れを告げました。王はわざわざ、私に近衛兵をつけて、グラングエンスターランドという港まで送つてくれださいました。そこで、六日ほど待つていると、ちょうど、日本行きの船に乗れました。それから日本までの航海が十五日かかりました。

私たちちは、日本の東南にあるザモスキという小さな港町に上陸しました。

私は上陸すると、まず税関吏に、ラグナグ王から、この國の皇帝にあてた手紙を出して見せました。すると、その役人は、ラグナグ王の判をちゃんとよく知つていました。その判は、私の掌ほどの大きさで、王がびつこの乞食の手を取つて立たせているところが、图案になつてゐるのです。町奉行は、この手紙のことを聞いて、すっかり、私を大切にしてくれました。馬車やお附きをつけて、私をエド（江戸）まで送りとゞ

けてくれました。

私はエドで、皇帝にお目にかかると、手紙を渡しました。すると、この手紙はひどくおごそかな作法で開封され、それを通訳が皇帝に説明しました。やがて、通訳が私に向つて、こう言いました。

「陛下は、何でもいゝから、その方に願いの筋があつたら申し上げよと言つておられる。陛下の兄君にあたるラグナグ国王のために、聞きとゞけてつかわそとのことだ。」

この通訳は私の顔を見ると、すぐヨーロッパ人だと思つて、オランダ語で話しました。

そこで、私は、

「私は遠い／＼世界の果で難船したオランダの商人ですが、それからとにかく、どうにかラグナグ国までやつて来ました。それからさらに船に乗つて、今この日本にやつて來たところです。つまり、日本とオランダとは貿易をしていることを知つていたので、その便をかりて私はヨーロッパへ帰りたいと思つてゐるのです。そんな次第ですから、どうか、ナンガサク(長崎)まで無事に送りどゞけていたゞきたいのです。」

と答えてやりました。それから私はつけ加えて、

「それから、もう一つお願ひがござります。どうか、あの十字架踏みの儀式だけは、私にはかんべんしていたゞきたいのです。私は貿易のため日本へ來たのではなく、たゞ、たまたま災難からこの国へたどりついたのですから。」

と、お願ひしました。

ところが、これを陛下に通訳が申し上げると、陛下はちょっと驚いた様子でした。それから、こう言されました。

「オランダ人で踏絵をしたがらないのは、その方がはじめてなのだ。してみると、その方はほんとうにオランダ人かどうか怪しくなつてくる。これはどうもほんとうのクリスト信者ではないかと思えるのだがなあ。」

しかし、とにかく、私の願いは許されることになりました。役人たちは、私が踏絵をしなくとも、黙つて知らない顔をしているように命令されました。ちようどそのとき、ナンガサクまで行く一隊があつたので、その指揮官に、私を無事にナンガサクまでつれて行くよう、命令されました。

一七〇九年六月九日、長い旅のあげく、ようやくナンガサクに着きました。私はすぐそこで、『アンボニア号』という船の、オランダ人の水夫たちと知り合いになりました。前に私はオランダに長らくいたことがあるので、オランダ語はらくに話せます。

私は船長に、船賃はいくらでも出すから、オランダまで乗せて行ってほしいと頼みました。船長は、私が医者の心得があるのを知ると、では途中、船医の仕事をしてくださいました。船に乗る前には、踏絵の儀式をしなければならないのでしたが、役人たちには、私だけ見のがしてくれました。

さて、今度の航海では別に変つたことも起りませんでした。四月十日に船は無事アムステルダムに着きました。私はこゝから、さらに小さい船に乗つて、イギリスに向いました。

一七一〇年四月十六日、船はダーンズに入港しました。私は翌朝上陸して、久し振りに祖国の姿を見たわけです。それからすぐレドリックに向つて出発し、その日の午後、家に着き、妻子たちの元気な顔を見る事ができました。

「満潮にさらわれるといけないから早く行け。」  
と言ひながら、彼等はボートを漕いで行きました。

## 1 馬の主人

私は家に戻ると五ヵ月間は、妻や子供たちと一しょに楽しく暮していました。が、再び航海に出ることになりました。今度は私に『アドベンチュア号』の船長になつくれというので、すぐ私は承知しました。

一七一〇年九月七日に私の船はプリマスを出帆しました。ところが、熱い海を渡つてゆくうちに、船員たちが熱病にかゝつてたくさん死んでしまいました。そこで、私はある島へ寄つて、新しく代りの船員をやとい入れました。ところが、今度やとい入れた船員たちは、みんな海賊だったのです。この悪漢どもは、ほかの船員たちを引き入れ、みんなして船を横取りして、船長の私をとじこめてしまおうと、つそり計画していたのです。

ある朝のことでした。いきなり彼等は、なだれをうつて、私の船室に飛び込んで来ると、私の手足をしばりあげて、騒ぐと海へほうりこむぞ、と脅しつけます。私は、もうこうなつては、お前たちの言うとおりになる、と降参しました。

そこで、彼等は私の手足の綱を解いてくれました。それでも、まだ片足だけは鎖でべつにしばりつけて、しかも、戸口には弾丸をこめた鉄砲を持つて、ちゃんと番兵が立っていました。食物だけは上から持つて来てくれましたが、もう私は船長ではなく、今ではこの船は海賊のものでした。船はどこをどう進んでいるのか、私にはまるでわからませんでした。

一七一一年五月九日、一人の男が私の船室へやつて来て、船長の命令により、お前を上陸させる、と言つて私を連れ出しました。それから彼等はむりやりに私をボートに乗せてしまいました。一リーグばかり漕いで行くと、私を浅瀬におろしました。

「たいこはどう」の国なのか、それだけは教えてください。」  
と私は頼みました。しかし、彼等もそこがどこなのか全然知らないのでした。

こうして、私はたつた一人で取り残されました。仕方なしに、歩いて行くと、間もなく陸に着きました。そこで、しばらく堤に腰をおろして休みながら、どうしたらいいものか考えました。少し元気を取り戻したので、また奥の方へ歩きだしました。私は誰か蛮人にでも出会つたら、さつそく、腕環やガラス環などをやつて、生命だけは助けてもらおうと思つていました。

あたりを見わたすと、並木がいくすじもあつて、草がぼう／＼と生え、ところ／＼にからす麦の畑があります。私はもしか蛮人に不意打ちに毒矢でも射かけられたら大へんだと思ったので、あたりに充分眼をくばりながら歩きました。やがて、道らしいところに出てみると、人の足跡や牛の足跡や、それからたくさん馬の足跡がついていました。

ふと、私は畑の中に、何か五六匹の動物がいるのを見つけました。気がつくと、木の上にも一二匹いるのです。それはなんともいえない、いやらしい恰好なので、私はちよつと驚きました。そこで、私は叢の方へ身をかづめて、しばらく様子をうかづきました。

そのうちに、彼等の二三匹が近くへやつて來たので、私ははつきり、その姿を見ることができました。この猿のような動物は、頭と胸に濃い毛がモジヤ／＼生えています。背中から足の方も毛が生えていますが、そのほかは毛がないので、黄褐色の肌がむき出しになっています。それに、この動物は尻尾を持つていません。それから、前足にも後足にも、長い丈夫な爪が生えていて、爪の先は鉤形に尖っています。彼等は高い木にも、まるで、すのようによじのぼります。それからとき／＼、軽く跳んだり、はねたりします。

私もずいぶん旅行はしましたが、まだ、これほど不快な、いやらしい動物は、見たことがありません。見ていると、なんだか胸がムカ／＼してきました。

私は叢から立ち上つて、路を歩いて行きました。この路を行けば、いずれどこかインド人の小屋へでも来るかと思っていました。だが、しばらく行くと、私はさつきの動物が真正面から、こちらへ向つてやつて来るのに出くわしました。このみにくい動物は、私の姿を見ると、顔をさま／＼にゆがめしていました。と思うと、今度はまるではじめての物を見るように、目を見張ります。そして、いきなり近づいて来ると、何のつ

もりか、片方の前足を振り上げました。

私は短剣を抜くと、一つなぐりつけてやりました。が、実は刃の方では打たなかつたのです。というのは、私がこの家畜を傷つけたということが、あとで住民たちにわかつると、うるさいからです。

私になぐりつけられて、相手は思わず尻込みしましたが、同時に途方もない唸り声をあげました。すると、たちまち隣りの畠から、四十匹ばかりの仲間が、もの凄い顔をして吠えつづけながら集つて来ました。私は、一本の木の幹に駆け寄り、幹を後楯にして、短剣を振りまわしながら彼等を防ぎました。すると、二三匹の奴等がヒラリと木の上に躍り上ると、そこから私の頭の上に、ジャーンと汚いものをやりだします。私は幹にピッタリ身を寄せて、うまく除けていましたが、あたり一めんに落ちて来る汚いものゝために、まるで息がふさがりそうでした。

こんなふうに困つてゐる最中、私は急に彼等がちり／＼になつて逃げて行くのを見ました。どうしてあんなに驚いて逃げ出するのか、不思議に思いながら、私も木から離れ、もとの道を歩きだしました。

そのとき、ふと左の方を見ると、馬が一匹、畠の中をゆつくり歩いて來るのです。

さつきの動物どもは、この馬の姿を見て逃げ出しました。馬は私を見ると、はじめちよと驚いた様子でしたが、すぐ落ち着いた顔つきに返つて、いかにも不思議そうに私の顔を眺めだしました。それから私のまわりを五六回ぐる／＼廻つて、私の手や足をしきりに見て來ています。

私が歩きだそうとすると、馬は私の前に立ちふさがりました。しかし、馬はおとなしい顔つきで、ちよと手荒なことをしそうな様子はありません。しばらく私たちは、お互に相手をじつと見合つていました。どう／＼私は思いきつて片手を伸しました。そして、この馬を馴らすつもりで、口笛を吹きながら首のあたりをなでてやりました。

ところが、この馬は、そんなことはしてもらいたくないというような顔つきで、首を振り眉をしかめ、静かに右の前足を上げて、私の手を払いのけました。それから、馬は二三度いな／＼きましたが、なんだかそれは独言でも言つてゐるような、変つたいな／＼き方でした。

すると、そこへもう一匹、馬がやつて來ました。この馬はなにかひどく偉そうな様子で、前の馬に話しかけました。それから、二匹とも、静かに右足の蹄<sup>ひづ</sup>を打ち合せ

ると、代る／＼五六度いな／＼きました。だが、そのいな／＼き方は、これはどうも、普通の馬の声ではないようです。それから、彼等は私から五六歩離れたところを、二匹が並んで行つたり来たりします。それは、ちょうど、人間が何か大切な相談をするときの様子とよく似ています。そして、彼等はとき／＼私の方を振り向いて、私が逃げ出しあしないかと、見張つてゐるようでした。

私は動物がこんな賢い様子をしているのを見て、大へん驚きました。馬でさえこんなに賢いのならこの國の人間はどんなでしよう。たぶんこゝには、世界中で一番賢い人たちが住んでいるのでしよう。そう思うと、私は早く家か村でも見つけて、誰かこの國の人間に会つてみたくなりました。それで、私は勝手に歩いて行こうとしました。

そのとき、はじめの馬が、私の後から、「ちよと待て」というようにいな／＼きました。なんだか私は呼びとめられたような気がしたので、思わず引き返しました。そして、彼のそばへのこ／＼近づいて行きました。一たい、これはどうなるのか、実はそろ／＼心配でしたが、私は平気そうな顔つきでいました。

二匹の馬は、一匹は青毛で、もう一匹は栗毛でしたが、彼等は私の顔と両手をしきりに見ていました。そのうちに、青毛の馬が前足の蹄で、私の帽子をグル／＼なでまわしました。帽子がすっかりゆがんだので、私は一度脱いで、かむりなおしました。これを見て、彼等はひどくびっくりしたようでした。今度は栗毛の馬が私の上衣に触つてみました。そして何か不思議そうに驚いています。それから彼は私の右手をなで、ひどく感心している様子でしたが、蹄<sup>ひづ</sup>に挟まれて手が痛くなつたので、私は思わず大声をたてました。そうすると、彼等は用心しながら、そつと、触つてくれるようになりました。彼等は、私の靴と靴下が、いかにも不思議でならないらしく、何度も触つては互にいな／＼き合いました。そして、しきりに何か考え込むような顔つきをしていました。

こんな利口な馬は魔法使にちがいないと私は考えました。そこで次のように話しかけてみました。

「諸君、どうもあなたたちは魔法使のようと思えるのですが、魔法使なら、どこの国<sup>の</sup>言葉でもわかるのでしょうか。だから一つ申し上げます。実は私はイギリス人ですが、運悪くこの島へ流れ着いて、困つてゐるところなのです。それで、どこか私を救つても

らえる家か村までつれて行ってくださいませんか。ほんとの馬のようになんか乗せて行つてほしいのです。そのおれには、この小刀と腕環を差し上げますよ。」

こんなふうに私がしゃべっている間、二匹の馬は黙つてじつと聞いていましたが、私の話がすむと、今度は互に何か相談するようにならうきました。

私は馬の声を注意して聞いていましたが、何度も「ヤーフ」という言葉が聞えるのです。二匹ともその「ヤーフ」という言葉をしきりに繰り返していますが、私には何の意味なのか、さっぱりわかりません。けれども、彼等の話が終ると、私は大声ではつきり、

「ヤーフ」

と言つてやりました。

すると彼等は大へん驚いたようです。それから青毛が近寄つて来ると、

「ヤーフ ヤーフ」

と教えるように二度繰り返しました。私もできるだけ、その馬の声をまねしてみました。すると今度は栗毛が、別の言葉を教えてくれました。これは、「フワイヌム」という、むずかしい言い方でした。とにかく私が馬の言葉がまねできるので、彼等はとても感心したようです。それから、彼等はまだ何かしばらく相談していましたが、それがすむと、また前と同じように、蹄を打ち合せて二匹は別れました。

青毛の方が私を振り返つて、手まねで歩けと言いました。私は黙つてついて行くことにしました。私がゆつくり歩くと、彼はきまつて、「フウン、フウン」と叫びます。これはたぶん、ついて来いという意味なのでしょう。

三マイルほど行くと、一つの建物がありました。材木を地に打ち込んで、横に木の枝を渡したもので、屋根は低く、藁葺わらぶきでした。馬は私に先に入れと合図しました。中に入つてみると、下の床は滑らかな粘土で出来ていて、壁には大きな秣草棚まぐさだなや秣草桶まぐさとうがいくつも並んでいます。子馬が三四と牝馬が二匹いました。別に物を食べているのでもなく、ちゃんと、お尻を床の上につけて、坐つてているのです。私はびっくりしました。

もつと驚いたのは、ほかの馬たちが、みんなせつせと家の仕事をしていることでした。なにしろ、馬をこんなふうに数え、仕込むことのできる人間なら、よほど偉い主人にちがいないと、私は感心しました。

この部屋の向うには、まだ三つ部屋がありました。私たちは二つ目の部屋を通り、

三つ目の部屋へ近づいて行きました。青毛は、そこで私に待つておれと合図しました。私は戸口で待ちながら、この家の主人と奥さんに贈るつもりで、小刀を二つ、真珠の腕環を三つ、小さな鏡、それから真珠の首飾などを用意しておきました。

青毛は、その部屋に入つて、三四度にならきました。すると、彼の声よりもっとかん高い声で、誰かざいならきました。人間の声はまだ聞えません。しかし、私は向うの部屋に、どんな貴い人が住んでいるのだろうか、と考えました。面会を許してもらうのに、こんな手数がかかるのでは、この国でも、よほど位のいゝ人なのでしょう。だが、それにしては、そんな貴い人が、馬だけを家来に使つてゐるのは、少し変です。

これは私の頭の方が、どうかしたのではないかしらと思いました。私は今、立つている部屋の中をよく／＼見まわしてみました。何度も、目をこすつてみても、そこは前と変わらないです。夢ではないかしらと、目がさめるように、脇腹をつねつてみました。が、夢でもないのです。それでは、これはみんな魔法使の仕業しわざにちがいない、と私は決めました。

ちょうど、そのとき、青毛が戸口から顔を出して、私に入れと合図しました。中に入つてみて、私は驚きました。上品な牝馬が一匹、それに子馬が一匹、小さつぱりした筵ひのきの上にきちんと坐つてゐるのです。

牝馬は延から立ち上ると、私のそばへ来て、私の手や顔をジロ／＼眺めました。それから、いかにも私を軽蔑するような顔つきで、

「ヤーフ」

とつぶやきました。そして、青毛の方をかえりみては、お互に何回となく、この「ヤーフ」という言葉を繰り返してゐるのです。

青毛は私の方へ首を向けて、「フウン、フウン」としきりに繰り返しました。これは、ついて来い、という合図なのでした。そこで私は彼について、中庭のところへ出ました。家から少し離れたところに、また一棟、建物がありました。そこへ入つてみて、私はあつと思ひました。

私が上陸してすぐ出くわした、あのいやつたらしい動物がいたのです。その三匹の動物がいま、木の根っこや、何か生肉をしきりに食つていました。三匹は首のところを丈夫な紐でくられ、柱につながれたまゝ、食物を左右の前足でつかんでは、歯で引き裂いています。

主人の馬は、召使の馬に命じて、この動物の中から一番大きい奴を、取りはずし

て、庭の中へつれて来させました。私とこの動物とは、一ところに並んで立たされました。それから主人と召使の二人は、私たちの顔をじつとよく見くらべていましたが、そのときもまたしきりに「ヤーフ」という言葉が繰り返されたのです。

私はそばにいるいやらしい動物が、そつくり人間の恰好をしているのに気がついて、びっくりしました。この動物は顔が人間より少し平たく、鼻は落ち込んでいて、唇が厚く、口は広く割れています。だが、これくらいの違いなら、野蛮人にだつてあるはずです。ヤーフの前足は、私の前足より、爪が長くて掌がゴツ／＼してて、色が違っています。とにかく、この動物は人間より毛深くて、皮膚の色が少し変っているだけで、あとは身体中すっかり人間と同じことです。

だが、二匹の馬には、私が洋服を着ているので、ヤーフとは違つているように思えたのです。この洋服というものを、馬はまるで知つてないので、彼等にはどうも合点がゆかないのです。

ふと栗毛の子馬が、木の根っこを一本、私の方へ差し出してくれました。私は手に取つて、ちよつと臭を嗅いでみましたが、すぐていねいに返してやりました。すると、彼は今度はヤーフの小屋から、驢馬の肉を一きれ持つて来てくれました。これは臭くてたまらないので、私は顔をそむけてしまいました。しかし彼がそれをヤーフに投げてやると、ヤーフはおいしそうに食べてしまいました。

その次には乾草を一束とからす麦を私に見せてくれました。しかし、私はどちらも自分の食物ではないと、首を振つてみせました。私はもしこれで同じ人間に出会わなかつたら、いづれ餓死するのではないかと心配になりました。

かというような身振りをしました。だが、なにしろ私は相手にわかるように返事ができませんでした。

ところが、ちようどいことに、いま表を一匹の牝牛が通りかゝりました。そこで、私はそれを指さしながら、ひとつ牛乳をしぼらせてくれという身振りをしました。これが相手にもわかつたのです。彼は私を家の中へつれて帰ると、たくさんの牛乳が器に入れて、きちんと綺麗に並べてある部屋へつれて行きました。そして、大きな茶碗に牛乳を一ぱい注いでくれました。私はグッと一息に飲みほすと、はじめて生き返ったような気持がしました。

正午頃、一台の車が四人のヤーフに引かれて、家の前に着きました。車の上には

身分のいゝ老馬が乗つていました。彼は非常にていねいに迎えられて、一番いゝ部屋で食事することになりました。部屋の真中に秣草桶を円く並べ、みんなはそのまわりに、藁蒲団を敷き、尻餅をついたように、その上に坐るのでした。そして、馬どもは、それ／＼、自分の乾草やからす麦と牛乳の煮込みなどを、行儀よくきちんと食べるのでした。

子馬でも非常に行儀がいゝのです。特に、お客様をもてなす主人夫妻のやり方は、気持のいゝものでした。ふとそのとき、青毛が私を招いて、こちらへ来て立て、と命じました。

客たちは、しきりに私の方を見ては、『ヤーフ』という言葉を言つていて、これは、私のことを行つては、『ヤーフ』といふ言葉を言つてみよと言いました。

彼等は私に、知つてゐる言葉を言つてみよと言いました。そして、主人は食卓のまわりにあるからす麦、牛乳、火、水などの名前を教えてくれました。私はすぐ彼のあとについて言えるようになります。

と呼んでみました。『フルウン』といふのは、『からす麦』のことです。はじめ私はからす麦など、とても食べられそうになかつたのですが、これでなんとか、パンのようなのをこさえようと考えついたのです。

すると主人は、木の盆にからす麦をどつさり載せて持つて来ました。私はこれを、はじめ火でよく暖めて、もんで殻を取り、それから石で搗りつぶし、水を混ぜて、お菓子のようにして火で焼いて、牛乳と一しょに食べました。

これははじめは、とても、まずくて食べにくかつたのですが、そのうちに、どうにか我慢できました。私は、たまには、兎や鳥を獲つて食べたり、薬草を集めてサラダにして食べました。はじめ頃は塩がないので、私は大へん困りました。が、それも慣れてしまふと、あまり不自由ではなかつたのです。

私が言葉をおぼえるというので、主人も、子供たちも、召使まで、みんなが私に言

葉を教えてくれます。

私は手あたり次第、物を指さしては名前を聞きます。そして、その名前を手帳に書き込んでおいて、発音の悪いところは、家の者に何度もなおしてもらいます。それには、下男の栗毛の子馬が、いつも私を助けてくれました。

この家の主人は、閑なときには何時間でも、私に教えてくれました。彼ははじめ、私をヤーフにちがいない、と考えていたのです。しかし、ヤーフの私が物をおぼえたり、礼儀正しかったり、綺麗好きなので、彼はとても驚いたらしいのです。ヤーフなら決して、そんな性質は持つていません。彼に一番わからなかつたのは、私の着ている洋服のことです。あれは一たい何だろう、やはり身体の一部分なのだろうかと、彼は何度も考えてみたそうです。

ところで、私はこの洋服を、みんなが寝静まつてしまうまでは決して脱がなかつたし、朝はみんなが起きないうちに、ちやんと身に着けていたのです。

馬のようにものが言えて、上品で利口そうな、不思議なヤーフが現れたと、私のことが評判になると、近くの馬たちが、たび／＼、この家を訪ねて来ます。私に会いに来る馬たちは、私の身体が、顔と両手の外は、普通の皮膚がまるで見えないので驚いていました。いつも私は用心して、裸のところを見せないようにしていました。

ある朝のことでした。主人は召使に言いつけて、私を呼びに来ました。そのとき、私はまだぐつすり眠つていたので、服は片方にずり落ち、シャツは腰の上に載つていました。これを見て召使はすっかり驚き、さつそく、このことを主人にしやべりました。私が服を着て、主人の前に行くと、主人は不審そうに尋ねました。

「お前は寝たときと起きているときとでは、まるで姿が変るということだが、それは一たいどういうわけなのか。」

私はこれまで、あの厭なヤーフ族から区別してもらうために、洋服のことは秘密にしておいたのです。しかし今はもう隠せなくなりました。そこで主人に打ち明けてしました。

「私の国では、仲間たちはみんな、動物の毛で作ったものを身体に着けています。これは寒さや暑さを防ぐためと、礼儀のためにそうするのです。それで、もしそれを見せよ、とおつしやるなら、私はさつそく裸になつて、お目にかけてもよろしいのです。」

そう言つて、私はまず、ボタンをはずして上衣を脱ぎました。次には、チョッキ、そ

れから順々に、靴、靴下、ズボンと脱いでゆきました。

主人はさも不思議そうに眺めていましたが、やがて私の洋服を一枚ずつ拾い上げて、よく検査していました。それから、今度は私の身体をやさしくなでたり、私のまわりをぐるぐる歩きまわつて眺めしていました。そしてこう言いました。

「やはりヤーフだ。ヤーフにちがいない。だが、それでも皮膚の軟かさ、白さ、それから身体にあまり毛のないこと、四足の爪の形が短いこと、いつも一本足だけで歩くことなんか、他のヤーフどもとは、だいぶ変つているようだな。」

そこで、私も彼にこう言つてやりました。

「一つどうも面白くないことがあるのですが、それはしきりに私をヤーフ、ヤーフと呼ばれていることなのです。なにしろ、あんな厭な動物たらないのですから、私だつてヤーフは大嫌いなのです。どうか、これからはヤーフと呼ばれるのだけはよしてください。それから、この洋服のことは、あなたにだけ打ち明けましたが、まだほかの人には、どうか秘密にしておいてください。」

すると、主人は私の願いを、快く承知してくれました。それで、この洋服の秘密はうまく守られました。

ある日、私は主人に身の上話ををして聞かせました。

「私は遠い／＼国からやつて来たのです。はじめ私のほかに五十人ばかりの仲間が一しょでした。この家よりも、もっと大きい、木で作つた容れものに乗つて、海を渡つて來たのです。」

私は船のことをうまく口で説明し、それが風で動くとともに、ハンカチを出して説明しました。すると、主人はこう尋ねました。

「そうすると、誰が一たいその船を作のだ。また、フウイヌムたちは、よくその船をヤーフなんかにまかせておけるだらうか。」

フウイヌムというのはこの国の言葉で、馬のことでした。私は彼にこう言いました。「実はこれ以上、お話しするには、ぜひその前に、決して怒らないということを約束してください。」

彼は承知しました。そこで私は話しました。

「実は船を作るのは、みんな私と同じような動物がするのです。それは私の国だけではなく、今まで私はずいぶん旅行しましたが、どこの国へ行つてみても、私と同じ動物が一番偉いのです。ところが、私はこの国へ来てみて、フウイヌムが一番偉いので、非

常に驚きました。」

私がこう言うと、彼はびっくりして、こう尋ねます。

「お前の国では、ヤーフが一番偉いか。そんな馬鹿なことがあつてたまるか。それは、お前の国にはフウイヌムはいないのか。いるとすれば、何をしているのか、それを言つてみ給え。」

私は答えました。

「フウイヌムならずいぶんたくさんいます。夏は野原で草を食べているし、冬になると家中で飼われて、乾草やからす麦をもらっています。そして、召使のヤーフが、身体を磨いたり、たてがみをといてやつたり、食物をやつたり、寝床をこしらえてやつたりするのです。」

「なるほど、それでは、お前の国では、やっぱしフウイヌムが主人で、ヤーフは召使なのだな。」

と主人はうなずきます。

「いや、実はフウイヌムの話をこれ以上お聞かせすると、きっと、あなたは怒られるでしょう。だからもう、この話はよしましよう。」

と私は言いました。しかし、彼はとにかくほんとのことが聞きたいのだ、と承知しました。そこでまた私は話しました。

「私の国ではフウイヌムのことを馬と呼んでいますが、それは立派な美しい動物です。力もあり、速く走ります。だから貴人に飼われて、旅行や競馬や馬車を引く仕事をしているときは、ずいぶん大切にされます。しかし、病気になつたり、びつこになると、今度は他所へ売られて、いろんな苦しい仕事に追い使われます。それに死ねば死ぬで、皮をはがれて、いゝ値段で売られ、肉は犬なんかの餌にされます。そのほか、百姓や馬車屋に飼われて、一生ひどく生き使われ、ろくな食物ももらえない馬もあります。」

それから、私は馬の乗り方や、手綱や、鞍、拍車、鞭などをことを、できるだけわかるように説明してやりました。主人はちよと、腹を立てたような顔を見せました

が、また、こう言いだしました。

「それでも、お前らがよくもフウイヌムの背中へ乗れるものだ。この家のどんな弱い召使だって、一番強いヤーフを振り落すくらいわけないし、ヤーフ一匹押しつぶすことなど誰にもできるのだ。」

「私の国は馬はもう三つ四つの頃から、訓練されます。どうしてもいけない奴は、荷馬車引きに使われます。もし悪い癖でもあれば、子馬のうちにひどくひっぱたかれます。」

こう言つても、主人はまだ私の話がよくわからないようでした。そしてこう言います。

「この国では、動物という動物は、みんなヤーフを毛嫌いしている。弱い者はよけて通り、強い者は追つ払つてしまう有様だ。してみると、仮にお前たち人間が理性を持つとしても、あらゆる動物から嫌われているのをどうするのだろうか。どうして彼等を馴らして使うことなどできるのか、そのところがわからない。」

しかし、彼はもうその話はそれで打ち切りました。それから、今度は、私の経験や生国のことや、この国へ来るまでに出会つた、いろんなことを話して聞かせてくれと言つた。そこで私は言いました。

「それはもう、何なりとお話いたしましょう。たゞ、心配なのは、とても説明できないような、あなたなどは考えたこともないようなことが、多少あるのではないかと思ひます。」

まず、私の生れはイギリスという島国です。この島はこゝからずいぶん離れています。あなたの召使の一番強いものが歩いて行つても、太陽が一年かゝつて一周するだけかかるでしょう。私は一つ金もうけをして、それで帰つたら家族を養おうと思つて国を出たのです。

今度のこの航海では、私が船長になつて、五十人ばかりのヤーフを使つていきました。ところが、これが海でだいぶ死んでしまつたので、別のヤーフをやとい入れました。ところが、新しくやとい入れたヤーフは、海賊だったのです。」

こんなふうに私は話してゆきましたが、主人は海賊などというものが、てんでわからぬのでした。そしてこう尋ねます。

「一たい、何のために、何の必要があつて、人間はそんな悪いことをするのか。」

そこで、私はいろいろ骨折つて、人間の悪徳を説明してやりましたが、彼はまるで、一度も見も聞きもしなかつたことを聞かされたように、驚いて憤るのでした。

私と主人とは、それから後も何度も会つて、いろんな話をしました。私はヨーロッパのことについて、商業のこと、工業のこと、学術のことなど、知つていることを全部話してやりました。しかし、この国には権力、政府、戦争、法律、刑罰などという言葉

がまるでないのです。ですから、こんなことを説明するには、私は大へん弱りました。あるとき、私はこんなことを主人に話しました。

「今、イギリスとフランスは戦争をしているのです。これはとても長い戦争で、この戦争が終るまでには、百万人のヤーフが殺されるでしょう。」

すると主人は、一たい国と国とが戦争をするのは、どういう原因によるのか、と尋ねました。そこで、私は次のように説明してやりました。

「戦争の原因ならたくさんあります。主なものだけを言ってみましょう。まず、王様の野心です。王様は、自分の持っている領地や、人民だけで満足しません。いつも他人のものを欲しがるのです。第二番目の原因は政府の人たちが腐っていることです。彼等は自分で政治に失敗しておいて、それを「まかすために、わざと戦争を起すのです。

「そうかとおもえば、ほんのちょっとした意見の食い違いから戦争になります。たとえば肉がパンであるのか、パンが肉であるのかといった問題、口笛を吹くのが、いきとか悪いことか、手紙は大切にするのがよいか、それとも火にくべてしまつた方がよいかとか、上衣の色には何色が一番よいか、黒か白か赤か、或はまた、上衣の仕立ては、長いのがよいか短いのがよいか、汚いのがよいか、清潔なのがよいか、そのほか、まあ、こんな馬鹿馬鹿しい争いから、何百万という人間が殺されるのです。しかも、この意見の違いから起る戦争ほど気狂じみてむごたらしいものはありません。

「ときには、一人の王様が、よその国の領土を欲しがつて、戦争をはじめる場合もあります。またときには、ある王様が、よその国の王から攻められはすまいかと、取越苦労をして、かえつてこちらから戦争をはじめることもあります。相手が強すぎて戦争になることもあります。また、人民が餓えたり病気して国が衰えて乱れている場合には、その国を攻めて行つて戦争してもいいことになつています。

「そこで、軍人という商売が一番立派な商売だとされています。つまり、これは何の罪もない連中を、できるだけたくさん、平気で殺すために、やとわれているヤーフなのです。」

すると主人は、私の話を聞いて、こう言いました。

「なるほど、戦争について、お前の言うことを聞いてみると、お前がいう、その理性の働きというのもよくわかる。だが、それでも、お前たちのその恥かしい行いは、働きました。」

実際には危険が少い方だろう。お前たちの口は顔に平たくくついているから、いくら両方が噛み合つてみても、大した傷にはならないし、足の爪も短くて軟かいから、まあこの国のヤーフ一匹で、お前の国のヤーフ十四ぐらいは追つ払うことができるだろう。だから、戦場で仆れたという死者の数だつて、お前は大げさなことを言つているだけだろう。」

主人がこんな無智なことを言うので、私は思わず首を振つて笑いました。私は軍事について少しは知つていて、大砲とか、小銃とか、弾丸、火薬、剣、軍艦、それから、攻撃、砲撃、追撃、破壊など、そういう事柄をいろいろ説明してやりました。

「私はわが国の軍隊が、百人からの敵を囲んで、これを一ぺんに木の葉みじんに吹き飛ばしてしまうところも、見たことがあります。また、数百人の人が、船と一緒に吹き上げられるのも見ました。雲の間から死体がバラ／＼降つて来るのを見て、多くの人は万歳と叫んでいました。」

「こんなふうに私はもつと／＼しゃべろうとしていると、主人がいきなり、

「黙れ。」

と言いました。

「なるほど、ヤーフのことなら、今お前が言つたような、そんな忌まわしいこともやります。」

「そうだ。ヤーフの智恵と力が、その悪心と一しょになれば、できることだろう。」

主人は私の話を聞いて、非常に心が乱され、そして、私の種族を前よりもつと嫌うでした。

私は今度は金銭の話ををしてやりました。これも、主人には私の言う意味がなか／＼、のみこめないようでした。私は言いました。

「ヤーフというものは、このお金をたくさん貯めていさえすれば、綺麗な着物、立派な家、おいしい肉や飲物、そのほか、何でも欲しいものが買えるのです。そして、ヤーフの国では、何もかも、お金次第なのですから、ヤーフどもは、いくら使つても使い足つたとか、いくら貯めてももうこれでいいと思うことはありません。お金のためには、ヤーフどもは絶えず互に相手を傷つけ合うことを繰り返します。お金持は貧乏人を働かせて、らくな暮らしをしていますが、その数は貧乏人の千分の一ぐらいしかいません。多くのヤーフは毎日々々、安い賃銀で働いて、みじめな暮らしをつゞけています。」

と、こんなふうに私は話してやりました。それから、ヤーフの国の政治とか法律のこと、主人にいろ／＼説明して聞かせました。

### 3 楽しい家庭

ある朝、迎えの使いが、私のと、ろへやつて来ました。行つてみると、主人が、「まあ、そこに坐れ。」

と言います。

「これまで、お前から聞いた話は、その後、まじめに考えてみたが、どうも、お前たちは、どういう風の吹きまわしか、たま／＼爪のあかほどの理性を持つてゐる一種の動物らしい。ところが、お前たちはせつかく、自然が与えてくれた立派な力は、捨て見向きもしようとして、もとから持つてゐる欠点ばかりをふやそうとしている。わざ／＼骨を折つては、欠点をふやす工夫や発明をしてゐるみたいなものだ。

ところで、お前は、お前の国のヤーフどもの有様をいろ／＼話してくれたが、お前たちと、この国のヤーフとは、身体の恰好がよく似てゐるだけではなく、心の方もよく似てゐると思えるのだ。ヤーフどもがお互に憎み合つうのは、ほかの動物には見られないほど猛烈なもので、それは誰でも知つてゐることなのだが、この国のヤーフどもの争いも、お前が言つたお前たちのその争いも、どちらも、どうもよく似てゐるのだ。

もし、こゝにヤーフが五匹いるとして、そこへ五十人分ぐらいの肉を投げてやるとする。すると、彼等はおとなしく食べるこゝが、一人で全部を取ろうとして、たちまち、ひどいつかみ合いがはじまる。だから、彼等が外で物を食べるときには、召使を一人そばに立たせておくことにするし、家にいるときは、お互に遠くへ離してつないでおく。

また、牛が死んだりした場合、それをフウイヌムが家のヤーフのために買って戻ると、間もなく近所のヤーフどもが群をなして盗みに来る。そして、お前が言つたと同じような戦争がはじまる。爪で引っ搔き合つて大怪我をする。たゞ幸いなことに、お前の発明したような、人殺し器械はないので、めつたに死ぬようなことはない。また、あるときは、何の理由もないのに、近所同士のヤーフどもが、同じような戦争をはじめめる。つまり近所同士で、折もあらば不意をおそつてやるうと、隙をねらつてゐるのだ。」

それから、主人はさらに次のような珍しい話をしてくれました。

この国の、ある地方の野原には、さま／＼の色に光る石があつて、これがヤーフどもの大好物なのです。もし、この石が地面から半分ほど、のぞいていたりすると、ヤーフは何日でも、朝から晩まで爪で掘り返しています。そして家に持つて帰ると、それを小屋の中にそつと隠しておきますが、まだそれでも、もしか仲間に嗅ぎ出されはしないかと、ギヨロ／＼と目を見張つていてます。

主人は、どうしてまたこんな石をヤーフどもが大切がるのか、さっぱりわからなかつたのですが、一度試しに、ヤーフが埋めている場所から、そつとこの石を取りのけておきました。すると、このさもしい動物は、宝がなくなつてゐるのに気づいて、大声で泣きわめき、仲間をすつかりそこへ呼び集めました。そして、さも哀れげに悲しんでいるかとおもうと、たちまち誰彼の区別もなく喧みついたり、引っ搔いたり大騒ぎをします。それからだん／＼元気がなくなつて、物も食べなければ、眠りもしません。そこで主人は、その石をまたもとのところへ返してやりました。それを見ると、ヤーフはすぐ機嫌もよくなり、元気になつたということです。

この光る石がたくさん出る土地にかぎつて、ヤーフどもは絶えず、その土地を争い合つて、お互に戦争します。二匹のヤーフが野原で、この石を見つけると、互にらみ合つて争います。そこへもう一匹のヤーフが現れて、横取りすることもあるそうですね。

それから、ヤーフという奴は、とき／＼、気が変になるらしく、たゞ隅っこに引っ込んでしまい、寝ころがつて、吠えたり喰つたり、誰かそばへ寄ると、たちまち蹴とばしてしまいます。まだ年も若いし、肉附きもいゝし、別に食物が欲しいわけでもないのです。一たいどことが悪いのか、さっぱりわかりません。ところが、こんな場合、ヤーフを無理にどん／＼働かせると、この病気はケロリと治るそうです。

こんなふうに、私は主人から、ヤーフの性質をいろ／＼聞かされました。

それではひとつぜひ、どこか近所のヤーフの群を訪問させてください、と私は頼みました。主人は快く承知して、召使の月毛の子馬を、私の附添いに命じました。この附添いがいなかつたら、とても私はヤーフの近くに行くことはできなかつたのです。私が最初この国に来たとき、この忌まわしい動物にいじめられたことは、前にも言つたとおりですが、その後も、私はうつかり短剣を忘れて外に出たときなど、三四度も危く爪にかけられるこゝでした。

それに、どうやら彼等の方でも、私が同種族のものであることに、うす／＼感づいていたようです。私は附添いと一しょにいるときなど、よく袖をまくりあげて、腕や胸を見せてやりました。すると彼等は、いつも私のすぐ傍まで来て、ちょうどあの猿の人まねと同じように、しきりに私の恰好をまねますが、いつも憎々しげな顔つきで、それをやるのでした。

彼等は子供のときから、とても敏捷です。あるとき私は三歳の子を一匹捕えて、手なずけようとしましたが、相手は、恐ろしい勢いで、喰したり、引っ搔いたり、噛みついて、とう／＼放してやりました。私の見たところでは、ヤーフほど教えにくい動物はいません。できる」といえば、荷物を引いたり、かついだりすることぐらいで子供に食べさせます。

フウイヌムたちは、家から少し離れたところに、小屋を作つて、ヤーフを飼つていますが、その他のヤーフは、すべて野原に放し飼いにされているのです。彼等はそこで、木の根を掘つたり、草を食つたり、肉をあさつたり、ときには、いたちを捕えて食べます。そして丘などの側に、爪で深い穴を掘つて、その中に寝ます。彼等は子供のときから、水泳ぎや、水潜りができます。こうしてよく魚を捕えては、牝が家に持つて帰つて、子供に食べさせます。

ところで、なにしろ、私はこの国に三年も住んでいたのですから、この国の住民たちの風俗や習慣を、こゝに少し述べておきます。

このフウイヌム族というのは、生れつき、非常に徳の高い性質を持つています。彼等の格言は、『理性を磨け。理性によつて行え。』というのでした。

友情と厚意は、フウイヌムの美德です。どんな遠い国から来た知らない人でも、まるで友達のようにもなされます。どこへ行つても、自分の家と同じように安心できます。みんなは、非常に上品で、つゝみ深いのですが、ちょっと、わざとらしいところがありません。自分の子供も他所の子供も、同じように可愛がります。子供の教育の仕方は、なか／＼立派なのです。十八歳になるまでは、ある定まった日でなければ、からす、麦など一粒も口にすることを許されません。夏は午前に二時間と、午後に二時間ずつ、草を食べさせてもらいますが、この規則を親たちもきちんと守ります。

フウイヌムは、その子弟を強くするために、険しい山や石ころ道を走らせます。汗だくになると、今度は河の中にザンブリ頭から跳び込ませるのです。それから、一年

に四回、若い男女が集つて、駆けくらや、跳込み、そのほか、いろ／＼の競技をします。勝った者には、それをほめる歌が与えられます。

フウイヌムは文字というものを、まるで持つていません。知識は親から子へ口で伝えます。彼等は詩を作ることが、とても上手です。友情や善意を歌つたものと、運動の優勝者をほめたものと、なか／＼美しい詩があります。

フウイヌムたちは、病気にかゝることがないので、医者はいません。しかし、怪我をしたときつける薬は、ちゃんと備えています。彼等は、病気にかゝつて死ぬようなことはなく、たゞ年をとつて自然に衰えて死ぬのです。そして、死人は人目につかない場所にそつと葬られます。臨終だといって、誰も悲しんだりするものはありません。死んでゆく本人でさえ、ちよとも悲しそうな顔はしていないのです。

彼等は大てい、七十か七十五まで生きます。たまには八十まで生きるものもいます。死ぬ二三週間前になると、だん／＼身体が弱つてきますが、別につらくはないのです。そうなると、友達が次々に訪ねて来ます。つまり、気楽にちよと外出するようなことができないからです。いよ／＼死ぬ十日前頃には、今度は櫂そりに乗つて、ヤーフどもに引かせて、ごく近所の人たちだけに答礼に出かけてゆきます。彼は答礼先へ着くと、まず、お別れの挨拶をのべるのですが、それはまるで、どこか遠いところへ旅行するときの別れのような恰好なのです。

私は、主人の家から六ヤードばかり離れたところに、自分の室を一つ作らせてもらいました。

壁は自分で塗り、床には自分で作った筵わらじを敷きました。この国には麻が多いので、それを打つて、蒲団のおゝいを作り、その中に鳥の羽毛を詰めました。骨の折れる仕事は子馬に手伝つてもらい、小刀で椅子を二つこしらえました。服が擦り切れると、これは兎の皮で代りを作りました。この皮からは、立派な靴下もできました。私はよく木のうろから蜜を取つて来て、水に混ぜて飲んだり、パンにつけて食べました。

私は、主人のところへ訪ねて来る、フウイヌムのお客たちとも、知り合いになりました。

主人の部屋に、私の方から出かけて行くこともあります。ときには、主人やお客様が、私の部屋に訪ねて来ることもあります。それから、またときには、主人のお供をして、お客様に訪ねて行くこともあります。

私は質問に答えるほかは、こちらから口を出して、しゃべつたりするようなことはしません。

なかつたのです。たゞ、そばで彼等の話を聞いていれば、それだけで、私は気持よかつたのです。

彼等の話は、ちよつとも無駄なところがなく、簡単で、はつきりしていました。ちゃんと礼儀は守られていて、堅苦しいところがないのです。しゃべることは、話す方も樂しければ、聞く方も気持よくなるようなことばかりです。じや、まも入らねば、退屈もなく、のぼせたり、争つたりするようなことはないのです。

彼等は大てい、友情とか、慈善とか、秩序とか、経済などのことを話し合います。それから、詩の話もよく出ます。私はヨーロッパで一番偉い人たちの集まりに出るよりも、ここで、フウイヌムの話を開いている方が、ずっと誇らしく思えました。

私はこの国の住民たちの力と美と速さを感心しました。そして、このような穏やかな、立派な人格を、私はだん／＼尊敬するようになりました。

そして私は、自分の家族や友人、同胞などを考えてみると、とてもひどく恥かしくなりました。ヤーフと私たちが違うのは、たゞ人間の方は言葉が話せるということだけで、理性はかえつて悪いことに使われています。よく、泉や湖にうつる自分の姿を見たときなど、私は思わず顔をそむけたりしました。

#### 4 ヤーフ君、お大事に

私はこの国にいつまでも住んでいたい、と思うようになりました。ところが、どうし

ても、この国を立ち去らねばならぬことがもちあがりました。

この国では、四年ごとに全国から、代表者が集つて、会議を開くのです。この会議は野原で、五六日つづけられます。私の主人も、今度その会議に、代表者として、出て行つたのです。

ところで、今度の会議で問題になつたのは、ヤーフをこの地上に生かせておいて、いかが悪いかという問題でした。

一人の議員は次のように演説しました。

「およそ、世の中にヤーフほど、不潔で、いやらしいものはない。彼等は、つそり、牛の乳を吸うやら、猫を殺して食べるやら、畠を荒すやら、ろくなことはしない。

このヤーフというものは、もとからこの国にいたものではない。伝説によると、あるとき、突然、山の上に一匹のヤーフが現れたという。これは、太陽の熱で腐つた泥の中

から生れたものかどうか、よくわからないが、一度生れて来ると、子供がずん／＼ふえて、たちまち全国にひろがつてしまつた。

そこでフウイヌムたちは大山狩をして、ヤーフたちを取り囲み、年とつたものを殺してしまい、若いのだけ、フウイヌム一人について一匹ずつ、小屋を作つて飼うことになりました。そこで、あばれものゝ動物も、少しほと馴らされ、とにかく物を引かせたり、運ばせたりするくらいの役には立つようになつた。

しかし、住民たちは、ヤーフを使つてゐるうちに、ついうつかり驢馬をふやすことを忘れてしまつた。驢馬はヤーフにくらべて、すばしきくはないが、その代り形もいゝし、おとなしくて、臭くもない。われ／＼は、あのいやらしいヤーフは殺して、その代りに驢馬を使つた方がいゝと思う。」

これには賛成したものも大分ありましたが、私の主人は反対の意見をのべました。「一匹のヤーフが山に現れたという伝説は、こんなふうに考えられる。あれは、確かに海を越えて、向うからやつて來たもので、一匹は上陸すると、そのまま山の中へ逃げ込んだものらしい。それから時のたつとともに、だん／＼野蚕になつて、とう／＼、あんなふうな動物になつてしまつたのだと思われる。その証拠には、私は不思議なヤーフを一匹持つてゐる。」

こういつて、主人は、私を見つけたときのこと、洋服を着ていること、この国の言葉をおぼえてしまつたこと、この国へ來るまでのことを自分で話して聞かせたことなど、いろいろ説明しました。

「こんなふうな、おとなしいヤーフもいるのだから、ヤーフをみな殺しにするのは可哀そうだ。それより、ヤーフの子供をふやさないようにして、驢馬の子をうんとふやすようにしたらいゝと思う。」

と私の主人はこう演説したのでした。

私はこの会議のことを主人から聞かされて、なんだか心配になりました。ヤーフをどうすることに決ましたのか、それはまだ、はつきり聞かせてもらえなかつたのです。

ある朝、主人から迎えの使が来ました。行つてみると、主人は、どうも何か話し出したらいゝのか、困つてゐる様子でした。が、やつと口を開いて言いました。

それによると、今度の会議で、私はこの国から出て行つてほしい、ということに決まつたのです。

ヤーフを家に置いて、フウイヌム並みに扱つてゐるとは實にけしからん、と主人は代

表者たちから苦情を言わされました。普通のヤーフのように働くかすか、それとも、泳いで国へ帰らすか、どちらかにせよ、と言われるのです。だが、私を普通のヤーフの仲間に入れたら、ヤーフたちをそゝのかして、夜になると家畜をおそつたり、どんな危険なことをやりだすかわからない、というので、やはり泳いで国へ帰らせた方がいいと決まりました。主人は私に同情して、

「私はむろん一生でも喜んでお前を置いてやりたかったのだが、どうも仕方がない。泳いで帰るといつても、まさかお前の国まで泳げもすまい。だから、いつかお前の話した、海を渡る容れものをひとつ作ってみてはどうか。それなら私の召使や近所の召使にも手伝わせてやる。」

私は主人にこう言いわたされると、悲しくなつて、彼の足許にふら／＼と倒れました。主人は私が死んでしまったのかと思つたほどでした。しかし、とにかく気を取りなおして、船を作ることに決めました。船ができるまで、二ヶ月待つてもらうことになりました。そして、私は召使の月毛を助手に貸してもらいました。

私は月毛をつれて、あの海賊どもが私をむりやりに上陸させた海岸の方へ行つてみました。丘のぼつて、ずっと四方を見わたすと、東北の方向に島影のようなものが見えています。望遠鏡を出してのぞいてみると、確かに島です。距離は五リーグぐらいです。とにかく、この島が見つかた以上はもう大丈夫だ、後は運を天にまかせて、あの島まで流れで行こう、と私は決心しました。

それから家に帰ると、月毛と相談して、今度は森へ出かけて行きました。私は小刀で、彼はフウイヌムの斧を使って、槲の枝を幾本も切り落しました。それを私はいり／＼に細工しました。一番骨の折れるところは月毛が手伝つてくれて、六週間もすると、インド人の使うような独木舟<sup>カヌー</sup>が一隻出来上りました。

船はヤーフの皮で張つて、手製の麻糸で縫い合せました。帆もやはりヤーフの皮で作りました。兎と鳥の蒸肉、それに牛乳、水を入れた壺を二つ、それだけを船に積み込んでおきました。私はこの船を家の近くの大きな池に浮べてみて、悪いところをおし、隙間にはヤーフの脂を詰めました。いよいよ、これで大丈夫になりました。そこで、今度は船を車に積み、ヤーフたちに引かせて、静かに海岸まで運んだのです。

準備が出来上つて、出発の日がやつて来ました。私は主人夫妻と家族に別れを告げました。目は涙で一ぱいになり、心は悲しみで、搔きむしられるばかりでした。だが、主人は、私が船に乗るところが見たいと言つて、近所の人々を誘つて一しょにや

つて来ました。私は潮合を一時間ばかり待つていました。風工合もよくなつたので、いよ／＼向うの島へ渡ろうと思い、そこで、私は改めてまた主人に別れを告げました。私がひれ伏して、彼の蹄にキスしようとする、彼は静かにそれを私の口許まで上げてくれました。ほかのフウイヌムたちにも、ていねいに挨拶して、舟に乗り込むと、私はいよいよ岸を離れたのです。

私が岸を離れたのは、一七一四年二月十五日、朝の九時でした。主人や友人たちは、私の姿が見えなくなるまで、海岸に立つて、見送つてくれていました。とき／＼、召使の月毛が、

「ヤーフ君、お大事にね。」

と、どなつてくれるのが聞えました。

私はできることなら、どこか無人島を見つけたい、と思いました。そこで働きさえすれば、生きてゆける小さな島があつたら、私は、ひとりで静かに暮したいのです。私はヨーロッパのヤーフたちの社会へ帰るのは、もう考えただけでも厭でした。

その日の夕方、向うに小さな島が一つ見えてきて、私は間もなく、そこへ着きました。だが着いてみると、それは大きな岩だつたのです。しかし、岩の上によじのぼつてみると、東の方に陸地がずっと伸びているのが、はつきり見えました。その晩は舟の中で寝て、翌朝早く起きると、また航海をつづけました。七時間ばかりすると、ニューポーランドの東南端に着きました。

私は武器を持つていないので、奥へ進むのは心配でした。海岸で貝を拾いましたが、火をたいて土人に見つかるといけないので、生のまゝ食べました。三日間は牡蠣と貝ばかり食べていましたが、近くに綺麗な小川があつたので、水の方は助かりました。

四日目の朝、私は少し遠くへ出かけてみました。ふと、前方の丘の上に、二三十人の土人の姿が見えました。男も女も子供も、真裸で、火を囲んでいます。一人がふと私の姿を見つけて、すぐほかの者に知らせたかとおもうと、五人の男がこちらへ近づいてきました。私はもう一目散に海岸へ逃げて帰ると、舟に飛び乗つて漕ぎ出しました。

それから私は舟を北の方へ進めてみました。しばらくすると、向うに帆の影が一つ見えました。しかも、船はどん／＼こちらへ近づいて来るので、私はこのまゝ待つていいよかしらと思いましたが、ヤーフのことを考へると、たまらなくなりました。そこで舟を漕いで一目散に逃げ出しました。そして私が朝出たあの島へまた戻つて来

ました。私は小川の傍の岩かげに隠れていきました。

後から追つて来た舟は、ボートをおろして、この島へ水汲みにやつて来ました。そして水夫が上陸するとき、私の独木舟に気づきました。持主がどこかにいるにちがいないと、彼等はそらじゅうを探しまわりました。武装した四人の男が、とうく、岩かげにすくんでいる私を見つけだしたのです。革の服、毛皮の靴下、私の奇妙な服装に、彼等は驚いたようです。

「立て、お前は何者だ。」

と、水夫の一人が、ポルトガル語で尋ねました。ポルトガル語なら、私もよく知っていますので、すぐ立ち上つて答えてやりました。

「私はフライヌムの国から追い出された哀れなヤーフです。だから、どうか、このまゝ、そつとしておいてください。」

ポルトガル語ができるので彼等は驚きましたが、私がまるで馬のようにいなういてものを言うのに噴き出していました。私はもう怖くてブル／＼震えていました。逃がしてください、と言いながら、独木舟の方へ行こうとすると、彼等は私を捕えて、どこの國の者で、どこから来たかなど、いろんな質問をしかけます。

彼等がものを言いだしたとき、私は犬や牛がものを言いだしたように、全く変な気持にさせられました。私が何度も逃げ出そうとするので、とうく、彼等は私をしばりあげて、ボートへ引きずりこみ、それから本船へつれて行かれました。そして私は船長室へ引っ張つて行かれました。船長の名前はペドロといへ、大へん、親切な男でした。

「どうか、あなたの身の上話を聞かせてください。食事はどんなものを召し上りますか。これからは私と同じ待遇にしてあげたいのです。」

と、こんな親切なことを言つてくれます。しかし、私は相変らず黙り込んでいました。

私は彼等の臭が厭でたまらなく、今にも倒れそうでした。しかし、彼等は私に一寝入せよと言つて綺麗な部屋へ案内してくれました。私は服のまゝベッドに渡ころんでいましたが、三十分ばかりして、水夫たちの食事をしている隙に、そつと抜け出しました。こんなヤーフどもと暮すくらいなら、いつそ海へ飛び込もうと覚悟しているところを、船員の一人に見つけられました。そして、今度は船長室にとじこめられました。

「なぜあんな無謀なことをしようとしたのだ。自分は、できるだけのことをしてあげたいと思つてゐるのに。」

と船長はしみく言つてくれます。

私はごく簡単に、これまでの身の上話ををしてやりました。すると、船長は夢の話でも聞いているような顔つきでした。しかし、彼はなかく賢い男で、やがて私の話をだんくわかつてくれました。私も、もう二度と逃げ出すようなことはしないと約束しました。

航海は順調に進みました。一七一五年十一月五日、船はリスボンに着きました。十一月二十四日にイギリス船で私はリスボンを発ち、十二月五日にダウンスに着きました。

てつくり私を死んだものと思い込んでいた妻子たちは、大喜びで迎えてくれました。家に入ると、妻は私を両腕に抱いてキスしました。だが、なにしろこの数年間というものは、人間に触られたことがなかったので、一時間ばかり、私は気絶してしまいました。

あとがき

ガリバーは十六年と七ヶ月の間、不思議な国々を旅行してきました。私たちも、彼のあとについて、もう一度、その珍しい国々を廻つてみましょう。

まず一番はじめに、リリパットの国へ来てみると、どうでしよう。うつかり歩けば、足の下に踏みつぶしてしまいそうな小人がうじょうじよしているではありませんか。小人なんか何でもないと侮るあなざると大間違いです。ガリバーはあべべに小人の王様の家来にされてしまします。それから、ハンカチの上で騎兵を走らせたり、軍隊を股またの下に進行させたりします。こんな話なら、もう誰でも一度は絵本で見たり、人から聞かされて知つているはずです。私も子供のときリリパットの国の話を聞いて、縁側で蟻ありの行列を眺めていたら、自分がガリバーになつたような気がしたものでした。しかし、小人の国にも戦争があつたり、政争があつたりして、ガリバーはどうとうこの国を逃げ出してしまいます。

それから、その次にプロブデインナグ国へ来てみると、ガリバーはまず胆きもをつぶします。今度はガリバーの方が小人になつてゐるのです。いくら、ガリバーが強きつそうな振りをしても、自分の国の自慢をしてみても、この国の人から見れば、まるで虫けらのようなものです。だから、ガリバーは箱に入れられて、カナリヤのように可愛がられています。すると、その箱を鷺アヒがつかんで海へ持つて行きます。こうして、ガリバーは大人国ともお別れになります。

今度はガリバーは飛島へやつて来ます。どうもそこには奇妙な人間ばかり住んでいるので、ガリバーはうんざりしてしまいます。それから、バルニバービ国の学士院を見物したり、幽靈の国へ行つたり、死なない人間と会つてみたりします。それからガリバーははるばる日本へまでやつて来ます。東京はまだ江戸といわれていた頃のことです、長崎では踏絵があつたりします。

最後にガリバーは馬の国へやつて来ます。そこには人間そつくりのヤーフといいういらしい家畜がいるので、まずガリバーはそれを見てぞつとします。それからフライヌムたちに会い、そこの言葉をおぼえ、その国に馴れてくるにしたがつて、ガリバーはこ

の穏やかな理性の国がすつかり気に入つてしまします。そして人間より馬の方がずっと立派だと思つようになります。だから、この国を彼が追放されたときの嘆きは大へんなものです。それから久し振りで人間と出会うと、ガリバーはたまらなくなつて逃げ出そうとします。しかし、人間より馬の方が立派だなど、少しお情ない話ではありませんか。ほんとにこれは情ない、奇妙な話にちがいありません。けれども、この話は奇妙でありながら、何か人の心に残るものがあります。読んだら忘れられない話のようです。

では、こんな不思議な話を書いた人は、一たいどんな人なのでしょうか。

今からおよそ二百年ばかり前、ジョナサン・スイフトという人がこれを書いたのです。彼は一六六七年、アイルランドのダブリンに生れました。頭の鋭い、野望家でした。はじめは、ロンドンに出てしきりに政治問題に筆を向け、政党にも加わっていました。生れつき諷刺の才能に恵まれていたので、『書物の戦争』とか『桶物語』とかいう本を書いて、当時の社会を皮肉つていました。しかし、後にはアイルランドに引っ込んで、そこで、教会の副監督をしながら、淋しく暮していたのです。

さて、この『ガリバー旅行記』は一七二六年に書き上げられました。ちょうど、彼が五十九の年で、アイルランドに引退してから十四年目のことでした。

痛ましいことに、彼はその後、次第に気が狂つてゆきました。一七四五五年、七十七歳で、この世を去りました。

この『ガリバー旅行記』は、これまで広く世界中の人々に親しまれてきた本です。大人にも、子供にも、これくらい、よく読まれてきた本は稀まれです。これからもまだ多くの人々に読まれてゆくことでしょう。

ガリヴァー旅行記

——K·Cに——

この頃よく雨が降りますが、今日は雨のあがつた空にむくむくと雲がただよつてます。今日は八月六日、ヒロシマの惨劇から五年目です。僕は部屋にひとり寝転んで、何ももう考えたくないほど、ぼんやりしています。子供のとき、僕は姉から「ん

な怪談をきかされたのを、おもいだします。ある男が暗い夜道で、怖い怖いお化けと出逢う。無我夢中で逃げて行く。それから灯のついた一軒屋に飛込むと、そこには普通の人間がいる。呼と安心して、彼はさきほど出逢つたお化けのことを相手に話しだす。すると、相手は「これはこんな風なお化けだろう」という。見ると、相手はさつきのお化けとそつくりなのだ。男はキヤツと叫んで氣絶する。——この話は子供心に私をぞつとさすものがありました。一度遇つたお化けに二度も遇わすなど、怪談といふものも、なかなか手のこんだ構成法をとつてゐるようです。

先日から僕はスウイフトのガリヴァー旅行記をかなり詳しく読み返してみました。小人国の話なら子供の頃から聞かされています。夏の日もうつとりして、よく僕は小人の世界を想像したもので、子供心には想像するものは、実在するものと殆ど同じように空間へ溶けあつてゐるようです。そういえば、少年の僕は、船乗りになりたかつたのです。膝をかかえて、老水夫の話にきき入つてゐる少年ウォター・ロレイの絵を御存知ですか。あの少年の顔は、少年の僕にとても氣に入つてゐたのです。

地図を愛し版画を好む少年には宇宙はその広大なる食慾に等し。

ああ！ ランプの光のもと世界はいかに大なることよ！

されど追憶の眼に映せばいかばかり小なる世界ぞ！

ボードレールは「航海」という詩でこう嘆じていますが、僕自身は今でもまだ人生の航海を卒業していない人間のようです。

しかし、近頃の新聞記事を読むと、何だか、この地球はリリパットのように、ちっぽけな存在に思えて來るのであります。卵を割つて食べるのに、小さい方の端を割るべきか、大きい方の端を割るべきかと、二つの意見の相違から絶えず戦争をくりかえさねばならないほど、小っぽけな世界に……

だが、小人国から大人国、ラピュタ、馬の国と、つぎつぎに読んで行くうちに、僕はもつとさまざまのことを考えさせられました。この四つの世界は起承転結の配列によつて、みごとに効果をあげているようですが、僕を少しづつとさせるのは、あの怪談に似た手のこんだ構成法でした。

小人国からの帰りに、ガリヴァーは船長にむかつて体験談をすると、てつきり頭がどうかしていると思われます。そこでポケットから小さな牛や羊をとり出して見せるの

です。そして、その豆粒ほどの家畜をイギリスに持つて帰つて飼つたなどといふところは、まだ軽い気分で読めます。しかし、大人国からの帰りには、ガリヴァーは箱のなかに、鷺にさらわれて海に墜<sup>墜</sup>されて船で救われるのですが、ここで船員たちとガリヴァーとの感覚がまるで喰いちがつてゐます。最初私を発見したとき何か大きな鳥でも飛んでいなかつたかと、ガリヴァーが訊ねると、船員の一人は鷺が三羽北を指して飛んでゐたのを見た、が大きさは別に普通の鷺と変つたところはなかつたと答えます。もつとも非常に高く飛んでいたので小さく見えたのだろうとガリヴァーは考ふるのでが、これは少し念が入りすぎているようです。そして、こんな手法は馬の国からの帰航では更にに陰鬱の度を加えてくりかえされています。ここでは人間社会から逃げようと試みるガリヴァーの悲痛な姿がさまざまと目に見えるほど真に迫つて訴えて来ます。が、奇妙なのは船長とガリヴァーとの問答です。はじめ彼の話を疑つていた船長が、そういえばニューホランドの南の島に上陸して、ヤーフそつくりの五六匹の生物を一匹の馬が追いたててゆくのを見たという人の話をおもいだした、という一節があります。実際に短かい一節ながら、ここを読まざると、何かぞつと厭やなものがひびいて来ます。何のために、こんな念の入つたフィクションをつくらねばならなかつたのかと、僕には、何だか痛ましい気持きえしてくるのです。

身振りで他国の言葉を覚えてゆくとか、物の大小の対比とか、そういう発想法はガリヴァー全篇のなかで繰返されています。この複雑な旅行記も、結局は五つか六つの回転する発想法に分類できそうです。だが、それにしても、一番、人をハツとさすのは、ヤーフが光る石（黄金）を熱狂的に好むというところでしょう。僕は戦時中、この馬の国の話を読んでいて、この一節につきあたり、ひどく陰惨な気持にされたもので、陰鬱といふれば、この物語を書いた作者が発狂して、死んで行つたということも、ゴーゴリの場合よりも、もつと凄惨な感じがします。

また僕は五年前のことをおもい出しました。原爆あとの不思議な眺めのなかに——それは東練兵場でしたが——一匹の馬がいたのです。その馬は負傷もしていないのに、ひどく愁然と哲人のごとく首をうなだれています。

五年前のことである。

私は八月六日と七日の二日、土の上に横たわり空をながめながら寝た。六日は河の堤のクボ地で、七日は東照宮の石垣の横で、——はじめの晩は、とにかく疲れないので、おもつて絶対安静の気持でいた。夜あけになると冷え冷えした空が明るくなつてくるのに、かすかなのぞみがあるような気もした。しかし二日目の晩は土の上にじかに横たわっているとさすがにもう足腰が痛くてやりきれなかつた。いつまでこのような状態がつづくのかわからないだけに憂うつであつた。だが周囲の悲惨な人々にくらべると、私はまだ幸福な方かもしかつた。私はほとんど傷も受けなかつたし、ピンと立つて歩くことができたのだ。

八日の朝があけると私は東練兵場を横切つて広島駅をめざして歩いて行つた、朝日がキラキラ輝いていた。見渡すかぎり、何とも異様なながめであつた。

駅の地点にたどりつくと、焼けた建物の脇で、水兵の一隊がシャベルを振り回して、破片のとりかたづけをしていた。非常に敏ショウで発ラツたる動作なのだ。ザザザザと破片をすくう音が私の耳にのつた。そこから少し離れた路上にテーブルが一つぽつんと置いてある。それが広島駅の事務所らしかつた。私はその受付に行つて汽車がいま開通しているものかどうか尋ねてみた。

それから私は東照宮の方へ引かえしたのだが、ふと練兵場の柳の木のあたりに、一匹の馬がぼんやりたたずんでいる姿が目にうつつた。これはクラもなにもしていない裸馬だつた。見たところ、馬は別に負傷もしていないようだが、実にショウ然として首を低く下にさげている。何ごとかを驚き嘆いているような不思議な姿なのだ。

私は東照宮の境内に引かえすと石垣の横の日陰に横臥していた。昼ごろ罹災証明がもらえて戻つてみると今度は間もなく三原市から救援のトラックがやつて來た。

私は大きな二ギリ飯を二つてのひらに受けとつて、石垣の日陰にもどつた。ひもじかつたので何気なく私は食べはじめた。しかしふとお前はいまここで平氣で飯を食べておられるのか、という意識がなぜか切なく私の頭にひらめいた。と、それがいけなかつた。たちまち私は「オウド」を感じてノドの奥がぎくりと揺らいできた。

### ガリヴァの歌

必死で逃げてゆくガリヴァにとつて  
巨大な雲は真紅に灼けただれ

その雲の裂け目より

屍体はバラバラと転がり墜つ  
轟然と憫然と宇宙は沈黙す

されど後より後より迫まくつてくる  
ヤーフどもの哄笑と脅迫の爪

いかなればかくも生の恥辱に耐えて  
生きながらえんと叫ばんとすれど  
その声は馬のいななきとなりて悶絶す

底本：「ガリバー旅行記」講談社文芸文庫、講談社

1995(平成7)年6月10日第1刷発行

底本の親本：「定本原民喜全集2」青土社

1978(昭和43)年9月

※底本の奥付には、原著者の表示はありません。しかし、「あとがき」にある「ジョナサン・スイフト」という人がこれを書いたをもとに、このファイルでは、ジョナサン・スイフトを著者、原民喜を訳者としました。混在している「スイフト」と「スウェイフト」の内、著者名としては前者をとりました。

※底本の末尾には、「一九七七年一二月刊、晶文社版『原民喜のガリバー旅行記』の「あとがき」以下四篇を、「著者から読者へに代えて」として収録した。」とあります。

入力：kompass

校正：浅原庸子

2003年5月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)に作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

PDF化：えだまめ

※オリジナルファイルをMicrosoft Wordにて整形後、田沼英樹氏作成の青空文庫テキスト傍点ルビ変換マクロ Version 1.0で、傍点とルビの変換を行いました。変換によつて不要になつた【テキスト中に現れる記号について】の注記を削除しました。